512
310

帝國圖書館藏

高畠素之譯

クマルス著

資本論

第二卷

新潮社出版

大正
15. 3. 9
内交

572-310

編輯者序文

『資本論』第二卷を以つて、一方には首尾連結ある出來得る限り完備した一書たらしめると同時に、他方にはそれが編輯者の著作となることなく、專ら著者の手に成つた述作たることを失はぬやうに完成して、上梓し得るまでにすることは、決して容易な仕事ではなかつた。存在してゐる原稿は大抵斷片的のもののみであつて、而もその數が極めて夥多であつたことは、この仕事を更らに困難ならしめた。原稿の中、それ自體として印刷に附し得るまでに徹頭徹尾手入れされてあつたものは、高々一つきり（第四稿）であつた。而もその大部分は、後ちに加へられた改修のため不用に歸してしまつたのである。材料の主要部分は實質上には大抵完成されてあつたとはいへ、用語の點に於いては不備なるを免れなかつた。卽ちそれは、マルクスが摘要の際使用するを常としたところの言葉を以つて書かれたものであつて、行文は疎漏、措辭や語法は口語的で、屢々不躾な諧謔的の言葉を用ゐた所があり、英佛兩語の術語を挿み、數句甚だしきは數頁に亙つて英語を用ゐた所もある。要するに、著者は思想が彼れの腦裡に展開し來たる毎に、その儘書き下したのである。若干の部分は詳細に叙述されてあつたが、同樣に重要なる他の部分はただ暗示されてあるのみであつた。例解的の事實材料は蒐集されたままで、殆んど類別されて居らず、推敲に至つては尙ほ更ら與へられて居らなかつた。章末に達する

と次章に移ることを急ぐため、説明を未了のままに放擲し、脈絡なき僅少の辭句を里標として與へ置くに止まるといふ場合が屢々あつた。最後に、人の良く知るところの、著者自身にさへ往々讀めないことのあるやうな、筆蹟に惱まされた。

私は原稿を出來得る限り逐語的に解釋し、行文についてはマルクス自身も變更したであらうと信ぜられる點のみを變更するに止め、而して絶對的に必要であり且つ意義の上に毫も疑ひの餘地なき場合にのみ、説明用の中間句と連結句とを挿入することを以つて滿足した。意味の上に極少の疑ひがあると思はれる辭句は、寧ろ其まま逐語的に取入れることとした。私の與へた改修と挿入は全部で十印刷頁にも達して居らず、それもただ形式的性質のものだけである。

第二卷に充用すべきものとしてマルクスが遺した自筆の材料を數へるのみを以つてしても既に、彼れがその經濟學上の大發見をば、刊行に先だつて此上なく完成しようと努力した無比の誠意と嚴格なる自己批判とを窺ひ知ることが出來るのである。この自己批判があつたからこそ、彼れはその説明を以つて、内容上にも形式上にも絶えず新たなる研究に依つて擴大されつつある己れの眼界に適合せしめることが滅多に出來なかつたのである。ところで、この第二卷に充用すべき材料といふのは左の諸稿から成つてゐる。

先づ『經濟學の批判』と題する、四ッ折判一千四百七十二頁（二十三冊）の原稿があつた。之れは一八六一年八月から六三年六月に至る間に書かれたもので、一八五九年ベルリンで刊行した同一標題の第一部に對する續稿である。この原稿は第一頁から二二〇頁（第一乃至五冊）に至る間、次いで又第一一五九頁から一四七二頁（第一九乃至二三冊）に至る間に於いて、『資本論』第一卷中に攻究した貨幣の資本化と題する編から始めて卷末に至る諸題目を取扱つたもので、此等の問題について與へられた最初の草稿となつてゐるのである。また第九七三頁から一一五八頁（第一六乃至一八冊）に至る間に於いては、資本と利潤、利潤率、商人資本と貨幣資本など、換言すれば後に至り第三卷の原稿中に展開された諸題目を取扱つてゐる。然るに第二卷に屬すべき諸題目、及び後に至つて第三卷の中に取扱はれた極めて多くの題目は、尚未だ特別の編制を與へられて居らなかつた。これらの題目は特に原稿の主要部を成してゐる『餘剰價値學説史』と題する一編、即ち第二二〇頁から九七二頁（第六乃至一五冊）に至る間で、附隨的に取扱はれてゐるに過ぎなかつた。この編は經濟學の樞點たる餘剰價値説についての詳細な批判的歴史を含み、同時に先行諸學者に對する論戰の形を以つて、後に至り第二及第三卷の原稿中に論理的聯絡を與へて逐一攻究された諸問題の大半を説明してゐる。この原稿の中、第二及第三卷に依つて既に説き盡された幾多の個所を除去した殘餘の批評的部分は、之れを『資本論』第四卷として刊行すべく保留して置く。この原稿は極めて價値多きものであるとはいへ、茲に刊行する第二卷にとつては利用し得ざるものであつた。

年月順から見て右に續くべきものは、即ち第三卷の原稿である。この原稿の少なくとも大半は、一八六四年及六五年に書かれたものであつて、マルクスはその重要部分を完成した後、一八六七年に刊

行した第一卷の手入れに著手した。私は目下この第三卷の原稿を上梓し得るやうに整理しつつある所である。

次の期間――第一卷刊行後における――に屬するものは、第二卷に使用すべき四つの二ッ折り原稿の一組である。之れはマルクス自身に依つて、第一乃至第四稿と附號されたもので、第一稿は百五十頁から成り、恐らく一八六五年又は六七年に書かれたものらしく、玆に編制する第二卷の諸問題をば獨立して、然し多かれ少なかれ斷片的に、論究した最初のものである。この原稿についても亦、何等利用し得る所がなかつた。第三稿は一部的には、主として第二卷第一編に關する諸種の引抄とマルクスのノートに對する參照とを編纂したものであり、一部的には又特殊の諸事項に關する論究、特に固定資本及び流通資本と利潤の源泉とに就いてのアダム・スミスの見解に對する批評から成るものである。その中には更らに、第三卷に屬すべき、餘剰價値率と利潤率との關係についての叙述も含まれてゐる。然しその參照は殆んど何等新たの得る所を與へず、第二及第三卷に屬すべき論究は後に與へられた改修に依つて不用に歸してゐる。隨つて之れも大抵は放棄しなければならなかつた。第四稿は第二卷の第一編と第二編第一章とに屬する問題を取扱つたもので、上梓し得る形に完成されてあつた。私は之れを適所に利用した。この原稿は第二稿よりも先きに書かれたものであることが明かとなつたに拘らず、形態上ヨリ完備したものであつたから、本卷の該當部分に對して有利に使用することが出來たのである。第二稿からは若干の追加をなすのみで十分であつた。この最終稿は、第二卷に使用すべき、唯一の或程度まで完成された原稿であつて、一八七〇年に書かれたものである。マルクスは最終訂正の爲に與へた所の、軈て以下に述べる覺書の中に、『この第二の手入れを基礎とすべきである』と明言してゐる。

一八七〇年以後にも、主として疾病狀態に基く一つの休止期間が生じた。マルクスは慣例通り、諸種の研究を以つて此期間を充たしたのであつて、農學や、アメリカ及び特にロシアにおける農村事情や、金融市場及び銀行制度や、最後に自然科學なる地質學及び生理學や、殊に又數學上の獨立した諸研究などは、この期間における幾多のノートの内容を成してゐるものである。一八七七年初葉に至り彼れは再び本來の勞作に著手し得る程に健康が恢復したことを覺えた。一八七七年三月末には、新たに作製すべき第二卷の基礎として、前記の四原稿から參照及覺書が作られた。この新たに作製すべき第二卷の最初の部分は、第五稿（二ッ折判五六頁）の中に與へられてゐる。卽ち、第五稿は第二卷の最初の四章を含むのであるが、尙いまだ完成されて居らず、その要點は本文の註の中に取扱はれてゐるといふ有樣であり、その材料は淘汰されたといふよりも寧ろ蒐集されたに過ぎなかつたものである。而もそれは、第一編の此最重要部分について與へられた最終の完全なる叙述となつてゐた。この第五稿を印刷に附し得る原稿にしようとする第一の試みは、第六稿の中に與へられてゐる。これは一八七七年十月以後一八七八年七月に至る間に書かれたもので、四ッ折判十七頁を有するに過ぎず、第一章の大部分を包括せるものである。右に關する第二の（且つ最終の）試みは、第七稿に依つてな

された。これは『一八七八年七月二日』に書かれたもので、二ッ折判七頁しかなかつた。

この頃、マルクスは健康狀態を完全に革命せずしては、到底己れの滿足するやうに第二及第三卷を完成し得るものでないことに氣づいたらしく見える。實際のところ、第五稿から第八稿迄の間には、彼れが意氣銷沈的な疾病狀態と努めて戰つて來た痕跡が、無視し得ざるほど屢々現はれてゐるのである。第一編中の最も困難な部分は、第五稿の中で新たに推敲された。第一編の殘部と、第二編の全部（第十七章を除く）とは、學說上何等の顯著なる困難をも呈しなかつた。反對に、社會的資本の再生產と流通とを取扱つた第三編は、是非とも改修を要するものの如く見えたのである。蓋しマルクスは第二稿の中で、最初にこの再生產をばその媒介たる貨幣流通を顧慮せずして取扱ひ、次いで更らにこれを顧慮して取扱つたからである。そこで此部分を削除して、全編總體をば著者の擴大された眼界に一致するやう改修せねばならなくなつた。かくして生じたものが卽ち第八稿である。これは四ッ折判七十頁の小原稿であるが、マルクスが斯かる少頁數の中に幾許の材料を密集せしむることを心得てゐたかは、玆に上梓する第三編の中から第二稿よりの挿入部分を控除した殘部について對照して見れば知り得るところである。

この第八稿も亦、主題を豫備的に取扱つたものに過ぎず、第二稿に示されなかつたところの新たに獲得した見地をば確立し展開することを主要目的としたものであつて、語るべき何等の新事實も存せざる點はこれを等閑に附したのである。さらでだに或程度まで第三編にハミ込んでゐる第二編第十七章の重要な一部も亦、玆に再論究され擴充されてゐる。論理的連續は屢々中絕し、主題の取扱は所々不十分であり、殊に結末に至つては全く斷片的となつてゐるが、然しマルクスの言はんとしたところは、何等かの形で此原稿の中に語られてゐるのである。

マルクスが死ぬ少し前、娘エラナーに語つた所に依れば、彼れは私が此第二卷の材料を以つて『何物かを造り上ぐべき』ことを期待してゐたのである。私は此依囑を最も狹い限界に解釋した。卽ち如何やうにか可能である限り、私は自分の仕事を各異なつた材料の間に選擇を與へるといふだけの範圍に局限した。これについては常に、最後に與へられた材料を基礎として、それ以前に與へられた諸材料と比較することにしたのである。この場合に、單なる技術上以外の現實的な困難は決して小なるものではなかつた。私は專ら著者の精神を以つて、これを解決するに努めた。

本文中の引用句が事實に對する例證として與へられてゐる場合、若しくはアダム・スミスからの引抄における如く、問題を根本的に究明せんとする何人にも自由に原文が得られる場合に對しては、私は斯かる引用句を大抵みな飜譯することにした。ただ第十章のみに於いては、かくすることが出來なかつた。なぜならば此章に於いては、直接英語の原文を批評してゐるからである。第一卷からの引用句に對しては、マルクスの存命中に刊行された最終版（第二版）の頁數を附することとした(1)。

第三卷に充用すべき材料としては、『經濟學の批判』と題する原稿の中に與へられた最初の材料と、第三稿中に含まれる上記の諸編と、ノートの中に時折り散在してゐる簡單な控へとの外に、尙ほ第二

卷用の第二稿と殆んど同樣に完全な推敲を施された上記一八六四乃至六五年の二ッ折判原稿と、最後に數學的に比例を以つて說明した『餘剩價値率と利潤率との關係』と題する一八七五年の一原稿とが存在するだけであつた。この三卷を上梓し得る迄に完成する仕事は、目下迅速に進捗しつつある。今日迄の經驗に依つて判斷し得る限り、第三卷の編輯に伴ふ困難は、極めて重要な若干の編に關するものを除く以外、主として技術的性質のもののみであらう。

この際、マルクスに向けられた一つの攻擊を論破すべきである。この攻擊は最初はただ穩かに個別的に與へられたに過ぎなかつたが、マルクス死後の今日に於いてはドイツの講壇社會主義者、國家社會主義者及びその一味の人々に依り、確定した事實として吹聽されてゐる。マルクスがロドベルトスを剽竊したといふ攻擊が卽ちそれである。私は旣に他の場所で(一)、これに關する最も緊急な事項を語つたが、玆に初めて決定的の證據を提出し得る次第である。

(一) カール・マルクス著『哲學の窮乏。プルドーンの窮乏の哲學に答ふ』(エドウワード・ベルンシュタイン、カール・カウツキー共同ドイツ譯シュトットガルト、一八八五年刊)(2) 序文。

私の知る所では、この攻擊はルドルフ・マイアー著『第四階級の解放戰』(3)の中に初めて現はれたものである。卽ちその第四三頁に曰く『マルクスが彼れの批評の大部分を此等の刊行物(十九世紀三十年代の後半以降におけるロドベルトスの述作)から汲み來たつた事は論證し得る所である』と。更らに之れ以上の論證が與へられざる限り、この主張の全『論證』は畢竟するところ、ロドベルトスがマイアー君にさう語つたといふに外ならないことは、私の推斷し得るところである。一八七九年にはロドベルトス自身登場して來て、その著『國家經濟現狀論』(一八四二年刊)(4)につきヨット・ツェラーに語つて曰く、(『總國家學時報』チュービンゲン、一八七九年刊、第二一九頁)(5)『貴下は、それ[同書に展開されたロドベルトスの思想系行]がマルクスに依つて極めて美しく……勿論私の名を揭ぐることなしに利用されたことを知るであらう』と。ロドベルトスの遺稿の編纂者たるトマス・コザークも亦、この主張を其ままに眞似てゐる。(『ロドベルトス資本論』ベルリン、一八八四年刊、緖論、別丁第一五頁)(6)。最後に一八八一年ルドルフ・マイアーの發行にかかる『ヤゲッォーのドクター・ロドベルトスの書翰及社會政策論集』(7)の中で、ロドベルトスは端的に述べて曰く『私は今や、シエッフレー及マルクスから私の名を揭ぐることなくして、掠奪されてゐた事を知る』(第六〇翰第一三四頁)と。而して他の場所では、ロドベルトスの主張は更らに明確な形を採つて現はれてゐる。彼れは曰く、『資本家の餘剩價値が何處から生ずるかは、私が第三社會書翰の中で、本質上マルクスと同樣に、ただ異なる點はヨリ簡單明瞭に論證した所である』(第四八翰、第一一一頁)。

此等すべての剽竊攻擊については、マルクスは何事も知らなかつた。彼れの手許に在る前記『解放戰』の中で頁の切り開かれてあつた所はインターナショナルに關する部分のみであつて、他の部分は

彼れの死後私自身に依つて初めて切り開かれたのである。チュービンゲンの『時報』は、マルクスの讀んだことのないものである。ルドルフ・マイアーに宛てた前記の『書翰集』も、マルクスには知られて居らなかつた。私が『掠奪』のことを書いた前記の個所に注意を向けるやうになつたのは、一八八四年のことで、それもドクター・マイアー君自身の好意に依つて初めて知つたのである。反對に、第四八翰はマルクスに知られてゐた。マイアー君は親切にも其原文をマルクスの末女に送つたのであつた。これより先、マルクスの批評の秘密な源泉はロドベルトスに在るとの不可思議な私語が、幾分マルクスの耳に達してゐたことは確かであつた。それで彼れは、次の如く言ひながら右の書翰を私に示した。――ロドベルトスが何を要求してゐるかは、これで到頭確かに分つた。然し彼れが之れ以上の事を要求するのでない限り、斯かる主張は私自身にとつては一向差支のない事である。ロドベルトスが彼れ自身の説明の方をヨリ簡單明瞭だと考へる事も、彼れの樂しむ儘に放任して置いて可いと。實際のところ、マルクスはロドベルトスの此書翰に依つて問題は一切落著したものと考へたのである。

マルクスが彼れの經濟學上の批評を單に概略的にだけではなく、更らに重要なる細目に亙つても完成してゐた一八五九年頃に至るまで、ロドベルトスの文獻的活動は毫も彼れに知られて居らなかつたことは、私の確知する所である。斯かる次第であるから、彼れは尙更ら、右の如く考へることが出來たのである。彼れは一八四三年、パリーで英佛兩國の大なる學者につき經濟學上の研究を始めた。ドイツの學者ではラウとリストを知つてゐたのみであるが、この二人だけで澤山であつた。マルクスも私も、ロドベルトスがベルリン選出の議員として述べた演説とプロイセンの大臣としてなした行動とを、一八四八年『新ライン新聞』紙上に批評せねばならなくなつた當時迄は、彼れの存在について一ことも耳にする所がなかつたのである。當時我々は、斯く突然大臣になつた此ロドベルトスといふのは、一體何人であるかと、ライン地方の議員たちに訊ねたほど、彼れについては無知であつた。然るに斯く訊ねられた議員たちも亦、ロドベルトスの經濟學上の文獻については、何事も洩らし得なかつたのである。他方に於いて、マルクスが當時すでにロドベルトスの援助に依らずして、『資本家の餘剰價値が何處から生ずるか』といふ事のみでなく、更らに如何にして生ずるかといふ事をも、熟知してゐたことは、一八四七年に刊行された『哲學の窮乏』及び一八四七年ブリユッセルで述べられ而して一八四九年『新ライン新聞』（第二六四――六九號）紙上に公刊された賃銀勞働と資本に關する講演に依つても知られるところである。一八五九年頃、マルクスはラッサレの注意に依つて初めてロドベルトスといふ經濟學者が居ることを知り、その後イギリスの博物館でロドベルトスの『第三社會書翰』を見出したのである。

右は事實關係を述べたのであるが、次にマルクスがロドベルトスから『掠奪』したと言はれる學説の内容については如何？　ロドベルトスは曰く、『資本家の餘剰價値が何處から生ずるかは私が第三社會書翰の中で、本質上マルクスと同樣に、ただ異なる點はヨリ簡單明瞭に論證した所である』と。要するに、餘剰價値説が論點となつてゐるのである。而して又實際のところ、此ほかに尙ほ

ロドベルトスが彼れ自身の所有物として何時でもマルクスから取戻しを請求し得べき如何なるものがあるかは語り得ざる所である。かくの如く、ロドベルトスは右の主張に依つて、自分こそ餘剰價値說の眞の創始者であつて、これをマルクスが掠奪したのだと言明してゐる。

然らばこの第三社會書翰なるものは、餘剰價値の發生について如何なる事を語つてゐるか？　其處に述べられてゐる事は單に次の一點だけである。即ち『賃子』(ロドベルトスは此語を以つて地代と利潤とを總括してゐる)なるものは、商品の價値に對する『價値追加』に基くものではなく、寧ろ『勞銀が價値控除を蒙むる結果、換言すれば勞銀が生產物價値の一部を代表するに過ぎない結果』生ずる所のものである。而して勞働の生產力が十分である場合、勞銀は『その生產物の自然的交換價値に等しいことを要するものではない。これは、この交換價値の中から、尙ほ資本回收(！)と賃子とに充つべき殘餘を存せしめん爲に必要な條件となるのである』と。尤も『資本回收』に、隨つて原料と生產器具の磨滅分との回收に充用すべき殘餘を存せざる、生產物の『自然的交換價値』とは抑も如何なる種類のものであるかといふ事は、右の說明の中には語られて居らないのである。

我々は幸ひに、ロドベルトスの此劃時代的な發見がマルクスに如何なる印象を與へたかを確めることが出來る。『經濟學の批判』と題する原稿の第十冊(第四四五頁以下)に、『岐論、ロドベルトス君、新地代說』といふ數語が見出される。即ちマルクスは此原稿に於いては、斯かる見地のもとにのみ右の第三社會書翰を觀察したのである。ロドベルトスの餘剰價値說一般について言へば、それは次の反語的叙述を以つて片づけられてゐる。即ち『ロドベルトス君は先づ、土地所有と資本所有との間に分化の行はれない一國には、如何なる狀態が生ずるかを攻究し、然る後、賃子(全餘剰價値のこと)とは畢竟するところ不拂勞働又はそれを代表する生產物量に等しいのみであるといふ重要な結論に到達してゐる。』

扨て、資本主義的人類は既に數世紀に亙り餘剰價値を產出し來たつたものであつて、その間また次第に餘剰價値の起原についても思惟するに至つたのである。かくして生じた第一の見解は、直接の商人的經驗に基くものであつた。即ち餘剰價値なるものは、生產物價値の釣り上げに依つて生ずるといふのである。此見解はマーカンチリストの間に專ら行はれてゐた。然しジェームス・スチュアートは、斯かる場合一方の人の得る所は必然的に他方の人の失ふ所とならねばならぬことを早くも看破したのである。それにも拘らず、この見解は尙久しく――殊に社會主義者の間に――出沒してゐた。けれどもアダム・スミスは、遂に之れを正統派科學から驅逐したのである。

彼れは其著『諸國民の富』第一部第六章に言ふ。『資本が特殊の人々の手に蓄積されるや否や、此等の人々の或者は當然に之れを、勤勉なる人々を勞働に從事せしめ、彼等に原料と生活資料とを給する目的に充用するであらう。之れは彼等の勞働の生產物を販賣することに依つて、換言すれば彼等の勞働が右の原料の價値に追加する所のものに依つて利潤を得んがためである。……即ち勞働者たちが原料に追加する所の價値は、この場合、二つの部分に歸せられることとなる。其一つは彼等の賃銀に

相當するものであり、他は彼等の雇主が己れの前貸した原料及賃銀の全額について得るところの利潤である。』更らに稍々進んだ所で、彼れは次の如く述べてゐる。――『一國の土地が悉く私有化するに至るや否や、他の總べての人々と同樣に土地所有者も亦蒔かぬ所に刈らんことを欲し、かくして土地の天然産物についても地代を要求するに至るのである。……勞働者は……彼等の勞働に依つて蒐集又は生産した物の一部を土地所有者に手放さなければならない。この部分こそ、又は――畢竟同じ事に歸するが――この部分の價格こそ、地代を構成する所のものである。』

スミスの此所論について、マルクスは『經濟學の批判』と題する上記の原稿の第二五三頁に述べて曰く、『要するにアダム・スミスは、餘剰價値を、餘剰勞働を、換言すれば支拂勞働（賃銀に依つて等價を受ける勞働）以上に出づる、實現され商品に對象化された勞働超過分を、一般的の範疇と見做し嚴密な意味の利潤及地代は斯かる勞働の分割されたものに過ぎないと解してゐるのである。』

アダム・スミスは更らに第一部第八章に言ふ。――『土地が私有化されるに至るや否や、土地所有者は彼れの土地から勞働者が生産又は蒐集し得る所の殆んど凡ゆる生産物について別け前を要求する。土地所有者の得る地代は、土地に使用される勞働の生産物からの第一の控除たるものである。土地を耕作する人が、收穫の時まで生活を維持すべき資力を有することは滅多にない。彼れの生計は通常、雇主の資本の中から前貸されるものである。即ち彼れの勞働の生産物の分配に與かることなきか又は自己の資本が彼れの勞働に依つて利潤を含んで回收されることなき限り、彼れを雇傭することに何等の利害關係をも有せざるべき、彼れの雇主たる小作農業者の資本の中から前貸されるものである。この利潤は即ち、土地に使用される勞働の生産物からの第二の控除たるのである。他の殆んど總べての勞働の生産物も亦、利潤たるべき同樣の控除を蒙むるものである。凡ゆる技術竝びに製造業を通じて、勞働者の大多數は、己れの手に勞働上の原料を前貸し、また勞働が完成される迄の間賃銀と生計とを前貸すべき雇主を要する。斯かる雇主は彼等の勞働の生産物の一部、又は彼等の勞働が加工材料に附加する價値の一部を受ける。而して雇主の得る利潤なるものは、畢竟する所この受け分に外ならないのである。』

マルクスは之れを評して言ふ（原稿第二五六頁）。――『即ちアダム・スミスは茲に飾氣なき言葉を以つて、地代及び資本利潤とは、勞働者に依る生産物からの、又は彼れの生産物の價値（彼れが原料に附加する所の勞働に等しき）からの控除に外ならないものであると言つてゐる。而もこの控除はアダム・スミス自身が先きに説明した如く、勞働者に支拂はれる賃銀に相當するに止まる勞働量以上、換言すれば賃銀の等價を給するに止まる勞働量以上には、ただ勞働者が原料に附加する所の勞働分のみから成るものである。即ちそれは、餘剰勞働（彼れの勞働の不拂分）から成るものである。』

かくの如く、『資本家の餘剰價値（更らに土地所有者の餘剰價値）が何處から生ずるか』は、アダム・スミスの既に知る所であつた。マルクスは一八六一年すでに此事實を認めてゐた。然るにロドベルトスと、國家社會主義といふ溫き夕立の下に簇々擡頭し來たつた彼れの崇拜者群とは、この事實を

全く忘れてゐた如く見えるのである。

マルクスは更らに語を續けて曰く、『されどアダム・スミスは、餘剰價値そのものを本來的の範疇と見做してそれが利潤及地代として受ける特殊の形態から分離するに至らなかつた。彼れの攻究に幾多の錯誤と不備とが存してゐるのは、蓋し之れが爲である。而して此事實はリカルドに至つては更らに甚しいのである。』この言葉は逐一ロドベルトスに適合する。彼れの謂ふ『賃子』とは、地代と利潤との和に過ぎない。彼れは、地代については全く誤つた學說を樹立し、利潤については先進學者たちの間に見出したものを其儘受け入れてゐる。反對に、マルクスの餘剰價値なるものは、生產機關の所有者が等價を支拂はずして占有する價値總額の一般的形態であつて、この價値總額はマルクスに依つて初めて發見された全く獨特の法則に從ひ、利潤及地代なる特殊の轉化された形態に分割されるのである。この法則は第三卷に依つて說明される。第三卷に於いて初めて、餘剰價値一般に關する理解から、餘剰價値の利潤及地代化についての理解、換言すれば餘剰價値が資本家階級の內部に分配されるに至る法則についての理解に達する迄の間に、如何に多くの中節を要するかが知られるであらう。

リカルドに至つては、アダム・スミスよりも遙かに進んでゐる。彼れは新たなる價値說——アダム・スミスに於いても既に萠芽的に存在してゐたことは事實であるが、應用の段になると殆んど常に忘れられてしまつた所の——の基礎上に彼れの餘剰價値觀を樹立してゐる。（この價値說は、彼れ以後における總べての經濟科學の出發點となつたものである）。彼れは商品の價値なるものは商品に實現されてゐる勞働量に依つて決定されるといふ見地から出發し、此見地に基いて、勞働が原料に附加する所の價値量は勞働者と資本家との間に配分されるといふ、換言すれば勞銀と利潤（茲では餘剰價値を意味する）とに分割されるといふ說を推論した。彼れは、此等の兩部分の比例が如何に變動しても、商品の價値は不變たるべきことを論證し、この法則は僅少の例外を許すに過ぎないとしたのである。しかのみならず、彼れは餘りに概括的な叙述を以つてであるとはいへ、兎にかく勞銀と餘剰價値（利潤の形に理解したる）との相互關係を支配する若干の根本法則を確立し（マルクス著『資本論』第一卷、第一五章、A）、且つ地代なるものは一定事情のもとに得られる利潤以上の超過分であることを論證した。

以上の如何なる點から見ても、ロドベルトスはリカルド以上には進んで居らないのである。リカルド學派の倒壞を招致したリカルド說の內部的矛盾については、ロドベルトスは何等知る所がなかつた。或は高々、この矛盾に依つて、經濟學上の解決を忘れ空想的主張の迷路へ誘ひ込まれたに過ぎなかつた（『國家經濟現狀論』第一三〇頁）。

然しリカルドの價値及餘剰價値說が社會主義の目的に利用されるには、ロドベルトスの『國家經濟現狀論』を待つを要しなかつたのである。マルクスは『資本論』第一卷、第七七八頁に、『國民的難局の原因及救治、ジョン・ラッセル卿への一書』（ロンドン、一八二一年刊）と題する著述の中から『餘剰生產物卽ち資本の所有者』といふ引抄を與へてゐる。この著述はマルクスが失踪の內から救ひ出し

た四十頁の一小冊子であつて、その重要なることは『餘剰生産物卽ち資本』といふ言ひ現はしに依つても既に認めらるべきである。その中に曰く、

『如何なるものが資本家の有に歸するにしても、彼れは［資本家たる立場から］決して勞働者の餘剰勞働以上のものを占有することは出來ない。なぜならば、勞働者は生活しなければならないからである』（第二二三頁）と。けれども勞働者が如何なる生活をするか、隨つて資本家の占有すべき餘剰勞働が幾許なるを得るかといふ事は、極めて相對的な問題である。『若し資本の量が增大するに比例して價値の減少を來たすことがないとすれば、資本家は勞働者の手から其生活し得べき最低限以上に出づる每時間の勞働生産物を搾り取るであらう。……資本家は終極に於いて、勞働者に言ふことが出來る。「麵麭を食べてはいけない。甜菜と馬鈴薯で生きてゆけるから」と。而してこれ卽ち、我々の終極に於いて到達せねばならぬ所である』（第二四頁）。『若し勞働者をして麵麭の代りに馬鈴薯を以つて生活せしめ得るに至るとすれば、彼れの勞働の中からヨリ多くを獲得し得ることは疑ひを容れざる所である。換言すれば、麵麭を以つて生活せんとする場合、己れ自身竝びに一家の生計のため、月曜、及火曜の勞働を保有することを必要とされるとすれば、馬鈴薯を以つて生活する場合には、月曜の勞働の半分のみを自己のために保有することとなるであらう。而して月曜の他の半分と火曜の全部とは、國家なり資本家なりの利益のために遊離されることとなるのである』（第二六頁）。『地代なり、貨幣利子なり、又は商業上の利潤なりの形を以つて資本家に支拂はれる利子の總額は、他人の勞働の中から支拂はれるものである』（第二二三頁）。我々は茲に、ロドベルトスが『賃子』と稱してゐる所のものと全く同一の觀念に逢著する。ただ異なる所は、『賃子』の代りに『利子』なる言葉を用ゐてゐる一點のみである。

マルクスは此書について曰く（『經濟學の批判』と題する原稿、第八五二頁）『この殆んど世に知られざる小冊子は、かの「信ずべからざる靴直し」マカロックが評判になり始めた當時刊行されたもので、リカルドに比し本質的の一進歩を含んでゐる。この書は、餘剰價値、又はリカルドの謂ふ「利潤」（また往々餘剰生産物）若しくは此書の著者が利子と稱してゐる所のものを以つて、直接に餘剰勞働（換言すれば、勞働者が無料で供給する勞働、卽ち自己の勞働力の價値を回收し自己の賃銀に對する等價を生産するに必要な勞働量以上に供給する勞働）なりとしてゐる。價値を勞働に約元することが重要であつた如く、餘剰生産物に依つて代表される餘剰價値を餘剰勞働に約元することも同樣に重要であつた。これは實際アダム・スミスが既に叙述してゐる所であり、またリカルドの說明の主なる要素ともなつてゐたものである。けれども彼等は、何處に於いても之れを絕對的の形に明言し確立しては居らないのである。』更らに同じ原稿の第八五九頁に曰く、『尙また、著者は彼れが見出した經濟學上の既成範疇に囚はれてゐる。餘剰價値と利潤との混合に依つて、リカルドが不愉快な矛盾に陷つた如く、この書の著者は餘剰價値を資本利子と名づける事に依つて、同樣の矛盾に陷つてゐる。勿論彼れは先づ、一切の餘剰價値をば餘剰勞働に約元した點に於いて、リカルドに優つてゐることは事實で

ある。而して彼れは餘剰價値を資本利子と名づけたとはいへ、同時に又、彼れの謂ふ資本利子とは餘剰勞働の特殊形態たる地代や貨幣利子や商業利潤などから區別したところの一般的形態を煮味するものである事を强調した。けれども彼れは、此等の特殊形態の一つである利子といふ名稱を、更らに一般的形態の名稱としても採用してゐるのである。而して此事實こそ、彼れを經濟學上の珍紛漢（原稿にはスラング(8)といふ言葉が用ゐられてゐる）に復歸せしむるに十分のものとなつたのである。」

この最後の一句は、我がロドベルトスにもそつくり當て嵌る。彼れも亦、自己の見出した經濟學上の既成範疇に囚はれてゐる。彼れも亦、餘剰價値に、其轉化された副形態の一つである賃子といふ名稱を與へてゐる。（加ふるに、彼れは此名稱を全く不定のものにしてゐるのである）。此等二つの錯誤があつたため、彼れも亦經濟學上の珍紛漢に復歸し、リカルドに對する彼れ自身の進歩を更らに批判的に攻究することをなさず、寧ろ未完成な自説を以つて、卵殼を脱せざる中に早くも一つのユトーピアの基礎たらしめるに至つたのである。彼れは他の總べての點における如く、このユトーピアに到達することも餘りに遲かつた。右の小冊子は一八二一年に刊行されたもので、一八四二年におけるロドベルトスの『賃子』に十分先鞭をつけてゐたものである。

この小冊子は、十九世紀二十年代にリカルドの價値及餘剰價値説をプロレタリアのため資本制生産攻撃の目的に利用し、ブルヂョアア自身の武器を以つてブルヂョアと戰つた全文獻の極面前哨に過ぎないものである。オーウエンの全共產主義は、經濟學上の論戰に關與した方面に於いてはリカルドに立脚してゐる。オーウエンの外にも、當時尙ほ幾多の著述家があつた。一八四七年、マルクスがプルドーンに對抗して引抄した所のもの（『哲學の窮乏』第四九頁）は、その中の數名に過ぎない。此等の著述家といふのは卽ち、エドモンヅ、ダムソン、ホヂスキン等、等、『更らに四頁分の等、等』である。此等無數の著者の文獻中から、玆に手當り次第に掴み出した一書は卽ちウヰリアム・タムソン著『人類の幸福を最も助長すべき富の分配原理の研究』（新版、ロンドン、一八五〇年刊）(9)である。この書は一八二二年に書かれ、一八二七年に初めて刊行されたものであるが、其處でも生產に從事することなき階級に依つて占有される富は、一般に勞働者の生產物からの控除とせられてゐる。而もそれは可なりに强い言葉を以つて論述されてゐるのである。『我々が社會と呼ぶ所のものに依つて爲される不斷の努力は、詐僞又は説服、脅迫又は强制に依り、生產勞働者に彼れの生產物の最小部分を與へて勞働を行はしむることに在る』（第二八頁）。『勞働者は何故、彼れの勞働の全生產物を受くるを許されないのであるか？』『資本家が地代又は利潤なる名義のもとに生產勞働者から强取する所のものは、土地又は其他の物を使用せしむるに對して要求する所の代償である。……生產に從事する無產勞働者は己れの生產能力の外には何物をも所有して居らない。彼れが依つて此生產能力を實現し得る所の一切の物材は、他人の所有に屬してゐるのである。而して此物材を所有する人々の利害は、彼れの利害に對立するものであつて、彼等の同意を得る事は彼れの活動に對する豫備條件となるのである。斯かる事情のもとに、彼れ自身の勞働の果實の中から幾許を此勞働の賠償として彼れに支拂ふべきかは、此

等の資本家の好意に懸る所であり、また懸らねばならぬ所である（第一二五頁）。……留保される生産物――それが租税と名づけられるにしろ、利潤または盗品と名づけられるにしろ……の大小に比例して、斯かる減損は』云々（第一二六頁）。

私は此等の文言を書くに當つて、衷心忸怩たるものなきを得なかつたことを告白する。十九世紀二三十年代におけるイギリスの反資本主義的文獻については、マルクスが既に『哲學の窮乏』の中に直接言及してゐる所であり、且つ其中の或もの、例へば上記一八二一年の小冊子や、レーヴンストーン、ホヂスキンなどの著書は『資本論』第一卷の中に屢々引用された所であるに拘らず、ドイツに於いては此等の文獻が全く知られずにあつたといふ事實はまだしも、かの死物狂ひになつてロドベルトスの上衣の裾に縋りつき、『現實に於いても何等學ぶ所がなかつた』俗學的經濟學者のみではなく、更らに『學識を誇りとする』正式の大學教授までが、アダム・スミスやリカルドの著書にさへ書いてあることをマルクスがロドベルトスから剽竊したなどと眞面目に非難するほど、正統派經濟學を忘れ果てゐたといふに至つては、これ公認經濟學の墮落が今日如何に甚しき程度に達してゐるかを證明するものではないか。

然らばマルクスは、餘剰價値について如何なる新らしき所論を與へたか？　マルクス以前における總べての先進社會主義者（ロドベルトスを含む）の學說が效果を止めずに消滅したに反し、マルクスの餘剰價値說に限つて宛ら晴天の電光の如く凡ゆる文明國に震徹して行つたといふ事は、抑も如何にして生じたのである？

我々は化學の歷史に依つて、これが例解を與へることが出來る。

十八世紀末に至るまで、燃素說が化學界を支配してゐたことは人の知る所である。この學說に依れば、燃燒の本體は、燃燒體の中から他の假說體たる絕對的の可燃物質が分離することに在る。この物質が卽ち燃素と名づけられたものである。この學說は間々附會されたこともないではないが、兎にかく當時知られてゐた化學的現象の大部分を說明するに足るものであつた。然るに一七七四年、プリーストレーは一種の氣體を造り出した。この氣體は『極めて純粹のものであり、燃素を脫すること極めて著しきものであつて、通例の空氣もこれに比すれば不純に見えるほどであつた。』彼れは之れを脫燃素氣體と名づけた。その後暫くしてスエーデンのシューレも亦同一の氣體を見出して、それが大氣中に存することを論證した。彼れは更らに、この氣體が其內部又は通例の空氣中で物を燃燒するとき消滅するものである事をも發見した。そこで彼れは之れを火氣體と名づけた。『此等の事實に依つて、彼れは燃素が空氣成素の一つと結合する際［卽ち燃燒の際］に生ずる所の化合現象は、火又は熱に外ならぬものであり、硝子を通過して遁れ去るものであるといふ結論に達した』(II)。

(II) ロスコー・シオルレマー著『詳說化學教科書』ブラウンシュヴァイヒ、一八七七年刊第一卷第一三及一八頁(I)。

プリーストレーとシエーレが造り出した所のものは實に酸素であつたが、彼等は何を發見したのかに氣づかなかつたのである。彼等は『彼等が見出した既成の「燃素」範疇に囚はれてゐたのである。』

燃素觀念の全部を顚覆し化學を革命すべきであつた元素も、彼等の手の中で實らずに消滅してしまつたのである。けれどもプリーストレーは軈て彼れの發見をパリーでラヴォアジエに傳へた。ラヴォアジエは今や此新たなる事實に基いて燃素化學の全部を攻究し、茲に初めて右の新氣體が新たなる化學元素であること、而して燃燒の際には不可思議なる燃素が燃燒體から分離するのではなく、寧ろ此新たなる元素が燃燒體と化合するものであることを發見した。かくして燃素形態の下に逆立ちしてゐた全化學は、茲に漸く正立するやうになつたのである。而してラヴォアジエは後年みづから主張した所とは異なり、他の二人の學者と同時に、また彼等から獨立して、酸素を見出したものでないとはいへ、彼等に對比して酸素の眞の發見者たることを失はないのである。他の二人は何を見出したかに氣づかずして、それを造り出したに過ぎなかつたのである。

餘剰價値學說の上でマルクスが先行學者たちに對して有する關係は、ラヴォアジエがプリーストレー及びシエーレに對して有する關係と同一のものである。我々が今日、餘剰價値と呼ぶ生產物價値分の存在は、マルクスよりも久しき以前に確められてゐたものである。同樣に、此價値分の成立、卽ちそれが占有者に依つて何等の等價をも支拂はれざる勞働の生產物から成るといふ事實も、多かれ少かれ明瞭に述べられてゐた所である。然しそれ以上には進まなかつた。一方の學者、卽ち正統派ブルヂオア經濟學者たちは高々、勞働生產物が勞働者と生產機關の所有者との間に分配される分量比例を研究せるに止まつてゐた。他方の學者、卽ち社會主義者たちは、この分配を不道理のものとなし、斯かる不道理を廢除すべき空想的な手段を求めた。彼等はいづれも、彼等が見出した經濟上の旣成範疇に囚はれてゐたのである。

そこへマルクスが現はれた。彼れは一切の先行者に直接對立した立場を採つた。彼等が解決を見た所に、彼れは問題を見たのである。彼れは此場合目前に存在するものが脫燃素氣體でもなく、火氣體でもなく、寧ろ酸素であることを知つてゐた。卽ち此場合問題となるものは、經濟上の一事實を確立するといふだけの事ではなく、また此事實が永遠の正義竝びに眞正の倫理と衝突するといふ事でもなく、寧ろ全經濟學を革命すべき使命を有し、而して資本制生產の總體を理解すべき鍵論をば、之れが使用を心得た人の手に提供する所の一事實が問題であることを知つてゐたのである。彼れは此事實に基いて、彼れの逢著した一切の範疇を檢覈した。これ恰も、ラヴォアジエが酸素を基礎として、己れの逢著した燃素化學上の諸範疇を檢覈した如くである。餘剰價値の何たるかを知るには價値の何たるかを知る必要があつた。そこで彼れは先づ、リカルドの價値說そのものに批評を向けなければならなかつた。かくして彼れは勞働を分析して、その價値形成的性質を究め、茲に初めて如何なる勞働が、何故また如何にして價値を形成するかを確め、價値なるものは總じて斯種の勞働の凝結したものに外ならないことを明かにした。この點はロドベルトスが最後に至るまで理解しなかつた所である。

マルクスは次いで商品と貨幣との關係を究め、商品及び其交換が如何にしてまた何故、內在的の價値性質に依り商品と貨幣との對立を生ぜしめねばならぬかを論證した。これを基礎として築かれた彼

れの貨幣説は、この問題を餘蘊なく取扱つた最初の貨幣説であり、今日暗默の間に普く採用されてゐる所のものである。彼れは貨幣の資本化を分析して、それが勞働力の賣買に基く事を論證した。彼れはこの場合、價値造出的性質なる勞働力を以つて勞働に代へ、かくしてリカルド學派の到壞を招いた難關の一つ（卽ち資本と勞働との相互交換を以つて、價値が勞働に依つて決定されるといふリカルド流の法則と調和せしむることの不可能）をば一擧にして解決した。彼れは更らに不變資本と可變資本との區別を明かにすることに依り、玆に初めて現實的に進行する餘剩價値形成の行程をば、細目に亙つて分析し説明することを得たのである。これは彼れの先行學者中の何人にも成し得ざる所であつた[11]。換言すれば、彼れは資本そのものの内部に存在する區別を明かにしたのであつて、この區別はロドベルトスにもブルヂョア的經濟學者たちにも、如何に處理して可いか解らなかつた問題であるが、而もそれが極めて複雜な經濟學上の諸問題を解決すべき鍵鑰を與へるものであることは、玆に刊行する第二卷、更らに著しくは軈て知られる如く第三卷に依つて、極めて的確に證明されるところである。彼れは更らに餘剩價値それ自體を分析して、その兩形態たる絶對的餘剩價値と相對的餘剩價値とを見出し、此等の餘剩價値が資本制生産の史的發展の上に演じたところの、夫々異なつた、然しいづれも決定的となつてゐる役割を論證した。彼れは餘剩價値に基いて、我々の有する最初の合理的な勞銀學説を展開し、他の學者に先んじて資本主義的蓄積史の概要と、資本主義的蓄積の史的傾向についての叙述とを與へたのである。

然るにロドベルトスは如何？　彼れは以上すべての所論を讀んだ後、それが『社會に對する襲擊』であることを見出した（傾向經濟學者が常になす如く！）。彼れは餘剩價値が何處から生じて來るかについては、自分の方が既にヨリ簡單明瞭に述べてゐたと主張し、最後にマルクスの説く所は總べて『今日の資本形態』換言すれば歴史的に成立した資本に適用し得ることは事實であるが、然し『資本概念』、換言すればロドベルトス君の空想的な資本觀念には適用し得るものでないことを見出した。この點に於いて、彼れのなした所は、最後に至るまでも燃素を固守し酸素については毫も知らうとしなかつた老プリーストレーのなした所と同一轍であつた。ただ異なるところは、プリーストレーの方は現實に於いて酸素を最初に見出したのであるが、ロドベルトスの方は餘剩價値或は寧ろ『賃子』を以つて、日常の平凡事を再發見したに過ぎないといふ一點のみであつた。且つまたマルクスは、ラヴォアジエのなした所とは異なり、餘剩價値存在の事實を最初に發見した者が自分自身であるなどと主張することを屑しとしなかつたのである。

經濟學上に於けるロドベルトスの他の功績も、矢張り同一の水準に立つものである。彼れが餘剩價値を一つのユトーピアに造り上げた事は、マルクスの『哲學の窮乏』の中に既に圖らず批評されてゐる所である。これに就いて更らに語るべき事項は、該書のドイッ譯本に附した私の序文の中に述べられてゐる。また商業上の恐慌は勞働者階級の消費不足に基くといふロドベルトスの所説については、すでにシスモンヂが其著『經濟新原論』[12]（第四部、第四章）[13]の中に述べてゐる。ただ異なる所

は、シスモンヂの方は此問題について常に世界市場を念頭に置いたのであるが、ロドベルトスの眼界はプロイセンの限界を出でて居らないといふ一點だけである。勞銀は資本から生ずるか、收入から生ずるかといふ問題についての彼れの攻究は、煩瑣哲學の領域に屬する事項であつて、玆に刊行する『資本論』第二卷第三編に依つて終極的に解決されてゐる。かくて賃子說のみが彼れの專有財產として殘される譯である。而して此學說は、これを批評したマルクスの原稿が刊行される迄は安眠を續け得るであらう。最後に、舊プロイセンの土地所有を資本の壓迫から解放すべしと主張した彼れの提案はこれまた徹頭徹尾空想的のものである。卽ちこの提案は、解決を要すべき唯一の實地問題——舊プロイセンの土地貴族は如何にして、年々例へば二萬マルクの收入を得て三萬マルクの支出をなし、それで毫も負債をしないで行けるかといふ問題に觸れることを避けてゐるのである。

(III)『かくて富が少數占有者の手に集中する結果、國內市場はます〳〵狹隘となり、產業はます〳〵國外市場を開始せざるを得なくなる。而して其處には、更らに大なる革命（卽ち此文章の直ぐ次に叙述されてゐる一八一七年の恐慌）が待ち設けてゐるのである』（『經濟新原論』一八一九年版、第一卷、第三三六頁）。

リカルド學派は一八三〇年の頃、餘剩價値の難關のために挫折した。この學派に依つて解決され得なかつたものは、その後繼者たる俗學的經濟學にとつては尙更ら解決し得ざる所であつた。リカルド學派を挫折せしめた二つの點は、左の如きものであつた。

（一）勞働は價値の尺度である。然るに生きた勞働が資本と交換される場合を見るに、それは自己が交換されるところの對象化された勞働に比しヨリ小なる價値を有してゐる。一定量の生きた勞働の價値である勞銀は、同一量の生きた勞働に依つて生產され同一量の生きた勞働を代表する生產物の價値よりも常に小である。マルクスは之れを正しき形に提出して以つてその解決を得た。卽ちこの問題は斯かる形に提出されるとき、實際の所解決し得るものではないのである。この問題は之れを正しき形に提出して以つてその解決を得た。卽ち價値を有するものは勞働ではない。勞働が價値造出的活動として特殊の價値を有するものでないことは、恰も重みに特殊の重量がなく、熱に特殊の溫度がなく、電氣に特殊の電流强度がない如くである。商品として賣買されるものは勞働ではなく勞働力である。勞働力が商品となるや否や、その價値は社會的生產物としてのこの商品に體化された勞働に依つて決定されることとなる。卽ちそれは、この商品の生產並びに再生產上社會的に必要な勞働に等しいのである。されば此價値に基いて勞働力が賣買されるといふことは、決して經濟上の價値法則と矛盾するものではないのである。

（二）リカルドの價値法則に從へば、等量にして且つ等額の代價を支拂はれる生きた勞働を充用する所の二資本は、他の事情に變化なき限り、同一の期間に同一價値の生產物を生產し、また等額の餘剩價値又は利潤を生產する。けれども不等量の生きた勞働を充用する場合には、此等の資本は等額の餘剩價値又は——リカルド論者の言葉を以つていへば——利潤を生產し得るものではない。然るに實際行はれる所は之れと反對である。卽ち等額の各資本は幾許の生きた勞働を充用するかに關係なく、事實上同一の期間に、平均して等額の利潤を生產する。玆に價値法則との矛盾が存在してゐるのであ

る。リカルドは既にこの矛盾を認めてゐた。けれども彼れの學派には、矢張りこの矛盾を解決する力がなかつたのである。ロドベルトスも亦、この矛盾を認めざるを得なかつた。然し彼れは之れを解決しないで、寧ろ自己のユトーピアの一起點たらしめたのである(『國家經濟現狀論』第一三一頁)。マルクスは既に、『經濟學の批判』と題する原稿の中でこの矛盾を解決してゐた。『資本論』の計畫に從つた解決は、第三卷の中に與へられてある。第三卷が刊行される迄には尙ほ數月を要するであらう。ロドベルトスを以つて、マルクスの祕密の源泉でありヨリ優秀なる先驅者であると主張する經濟學者たちは、この際ロドベルトスの經濟學が、これに就いて如何なる解決を與へ得るかを示すべきである。均等の平均利潤率なるものの成立し得る所以、及び成立せざるべからざる所以をば、彼等が價値法則に牴觸せざるは勿論、寧ろ價値法則に基いて論證するに至つたならば、そのとき更らに彼等と意見を交換することにしよう。願くば、それを急いで貰ひたいのである。茲に刊行する第二卷の燦爛たる攻究と、この攻究に依つて殆んど先人未踏なる領域に與へられた全く新たなる結論とは、第三卷の內容に對する前提に過ぎないものである。第三卷に於いては、資本制度に基く社會的再生產行程に關するマルクスの說明の最終結論を展開するからである。この第三卷が刊行されたとき、ロドベルトスなる經濟學者のことは最早話頭に上らなくなるであらう。

マルクスが屢々私に語つた如く、『資本論』第二及第三兩卷はマルクス夫人に題寄すべきこととなつてゐたのである。

一八八五年五月五日(マルクスの誕生日)

ロンドンにて

フリードリヒ・エンゲルス

茲に刊行する第二版は、大體に於いて第一版を其ままま複刷したものである。誤植を訂正するほか、文章上の二三の疎漏と、反復を含むに過ぎない若干の短句とを削除した。

第三卷は全く豫期せざる困難を呈したが、その原稿も今や殆んど完成された。若し私の身體が引つづき健康であるとすれば、今秋にはその印刷に著手し得るであらう。

一八九三年七月十五日

ロンドンにて

フリードリヒ・エンゲルス

左に第二稿乃至第八稿から採用した本卷各部分を簡單に概括して、一覽の便に供する。

第一編

第五頁、第二稿より。第六頁乃至二〇頁、第七稿より。第二〇頁乃至二五頁、第六稿より、第二五頁乃至一二一頁、第五稿より。第一二一頁乃至一二七頁、諸書からの拔萃中に見出される註。第一二七頁より結末迄、第四稿より(但し撒布的)、第一三七頁乃至一三九頁、第八稿より。第一四三頁及一五二頁の註、第二稿より。

第二編

目頭第一六七頁乃至一七九頁、第四稿の結論。第一七九頁から編末第四三一頁に至る全部、第二稿より。

第三編

第十八章(第四三三頁乃至四四四頁)、第二稿より。第十九章第一及二節(第四四四頁乃至四八六頁)、第八稿より。同章第三節(第四八六頁乃至四八九頁)第二稿より。第二十章第一節(第四九〇頁乃至四九四頁)、第二稿より(但し最終の一節のみは第八稿より)。同章第二節(第四九四頁乃至四九八頁)、主として第二稿より。同章第三乃至五節(第四九八頁乃至五三二頁)、第八稿より。同章第六乃至九節(第五三二頁乃至五五二頁)、第二稿より。同章第十乃至十二節(第五五二頁乃至六〇一頁)、第八稿より。同章第十三節(第六一六頁乃至六二九頁)、第二稿より。第二十一章の全部(第六三〇頁乃至六八〇頁)、第八稿より。

資本論 第二卷目次

編輯者序文

第二卷 資本の流通行程

第一編 資本の諸轉形及び此等の轉形の循環……五—一六六

第一章 貨幣資本の循環……五

(一) 第一段階 G—W……六

(二) 第二段階 生產資本の機能……一七

(三) 第三段階 G'—W'……二三

(四) 總循環……三六

第二章 生產資本の循環……五二

(一) 單純なる再生產……五三

(二) 蓄積及び規模の擴大された再生產……七〇

(三) 貨幣の蓄積……七七
(四) 準備金……七九
第三章 商品資本の循環……八二
第四章 循環行程の三公式……一〇〇
第五章 流通期間……一二七
第六章 流通費用……一三七
(一) 純粹の流通費用……一三七
(1) 賣買期間……一三七
(2) 簿記……一四二
(3) 貨幣……一四五
(二) 保管費用……一四六
(1) 一般的意味に於ける在庫品形成……一四七
(2) 嚴密な意味の在庫商品……一五五
(三) 運輸上の費用……一六二
第二編 資本の回轉……一六七—四三二

第七章 回轉期間及び回轉度數……一六七
第八章 固定資本及び流通資本……一七二
(一) 形態上の區別……一七二
(二) 固定資本の成分、代置、修繕、蓄積……一八七
第九章 前貸資本の總回轉、回轉循環……二〇六
第十章 固定資本及び流通資本に關する諸學說、フォジオクラット派並びにアダム・スミス……二一四
第十一章 固定資本及び流通資本に關する諸學說、リカルド……二五〇
第十二章 勞働期間……二六八
第十三章 生產期間……二八二
第十四章 流通期間……二九五
第十五章 回轉期間が資本前貸の大小に及ぼす影響……三〇六
(一) 勞働期間が流通期間と等しい場合……三一八
(二) 勞働期間が流通期間よりも大なる場合……三三三
(三) 勞働期間が流通期間よりも小なる場合……三三〇

(四) 結論……三三六
(五) 價格變動の影響……三四四
第十六章　可變資本の回轉……三五六
(一) 餘剰價値の年率……三五六
(二) 個別的可變資本の回轉……三七四
(三) 社會的見地から觀察した可變資本の回轉……三八一
第十七章　餘剰價値の流通……三八九
(一) 單純なる再生産……三九七
(二) 蓄積竝びに擴大されたる再生産……四二四
第三編　社會的總資本の再生産竝びに流通……四三三—六八〇
第十八章　緒論……四三三
(一) 研究の對象……四三三
(二) 貨幣資本の役割……四三七
第十九章　過去に於ける本問題の論究……四四四
(一) フヰジオクラット派……四四四
(二) アダム・スミス……四四八
(1) スミスの一般的見地……四四八
(2) スミスに依る v+m への交換價値の分解……四五九
(3) 不變資本分……四六三
(4) アダム・スミスの資本及び收入觀……四七〇
(5) 摘要……四七九
(三) アダム・スミス以後の經濟學者……四八六
第二十章　單純なる再生産……四九〇
(一) 問題の表現……四九〇
(二) 社會的生産の二部類……四九四
(三) 兩部類間の取引、第一部類 v+m 對第二部類 c……四九八
(四) 第二部類の内部に於ける取引、生活必需品と奢侈品……五〇四
(五) 貨幣流通に依る取引媒介……五一七
(六) 第一部類の不變資本……五三二
(七) 兩部類に於ける可變資本及び餘剰價値……五三六
(八) 兩部類に於ける不變資本……五四一

(九) アダム・スミス、ストルヒ及びラムセーの回顧……五四八
(十) 資本及び收入、可變資本及び勞銀……五五二
(十一) 固定資本の回復……五六九
(1) 貨幣形態を以つてする磨滅償値分の回復……五七四
(2) 現物形態を以つてする固定資本の回復……五八二
(3) 結論……五九七
(十二) 貨幣材料の再生産……六〇一
(十三) デスチュト・ド・トレーシーの再生産說……六一六
第二十一章　蓄積並びに擴大されたる再生産……六三〇
(一) 第一部類における蓄積……六三四
(1) 貨幣退藏……六三四
(2) 追加的の不變資本……六三九
(3) 追加的の可變資本……六四六
(二) 第二部類に於ける蓄積……六四七
(三) 蓄積の表式的表現……六五二
(1) 第一例……六六〇
(2) 第二例……六六六
(3) 蓄積の下に於ける第二部類Cの交換……六七五
(四) 補遺……六七八
○
原語及び譯註……1——10

第二卷目次終

カール・マルクス原著

高畠素之飜譯

資本論

第二卷

カール・マルクス著

資本論

經濟學の批判

第二卷　資本の流通行程

第二卷　資本の流通行程

第一編　資本の諸轉形及び此等の轉形の循環

第一章　貨幣資本の循環

資本の循環行程は三つの段階を經て進行する(一)。此等の段階は、第一卷の説明に依れば、左の系列を成すものである。

(一)以下第二稿より。

第一段階――資本家は購買者として、商品市場及び勞働市場に現はれる。彼れの貨幣は商品に換へられる。換言すれば、G―Wなる流通取引を通過する。

第二段階――資本家は彼れの購買した商品を生産的に消費する。彼れは資本家的商品生産者たる職分を盡し、彼れの資本は生産行程を通過する。その結果として、生産要素の價値よりも大きな價値を有する商品が得られる。

第三段階――資本家は販賣者として市場に復歸する。彼れの商品は貨幣に換へられる。換言すれば、W―Gなる流通取引を通過する。

即ち貨幣資本の循環公式は左の通りである。

G—W……P……W′—G′

點線は流通行程の中斷せることを示し、W′及G′はそれ〴〵餘剩價値に依つて增大せるWとGとを示す。

右の第一及第三段について第一卷に攻究せる所は、第二段階を理解する上に必要なる範圍に、資本の生產行程上に必要なる範圍に止まつてゐた。隨つて資本が種々なる段階のもとに採り、その循環を反復しつつある間に或時は保存し或時は放棄する樣々の形態は、第一卷に於いては顧慮せずに置いたのである。此等の形態が今や、我々の研究の對象となる。

此等の形態を純粹の形に理解するには、先づその變化及成立それ自體とは何等關係する所なき一切の要素から抽象する必要がある。そこで本卷に於いては、單に商品が價値通りに販賣されると假定するのみではなく、またこの販賣が不變なる事情のもとに行はれると假定する。即ち循環行程中に生じ得べき價値變動のことも、問題外に置くこととするのである。

（一）第一段階　G—W（II）

G—Wは一つの貨幣額が一つの商品額に換へられること、即ち購買者よりいへば彼れの貨幣が商品に轉化され、販賣者よりいへば彼れの商品が貨幣に轉化されることを示す。一般的商品流通の斯かる行程をば、同時にまた個別的一資本の獨立した循環における機能的に限定された一節たらしむる第一の原因は、この行程の形態ではなく素材的內容である。換言すれば、貨幣と代位すべき商品の特殊の使用性質である。この商品は一方には生產機關を代表し、他方には勞働力を代表する。即ちそれは商品生產の物的因子と人的因子とを代表するものであつて、此等の因子の特性は

生產機關
勞働力
商品

$W \neq A+P_m$

生產すべき物品の種類に照應すべきであることは言ふ迄もない。Aを以つて勞働力を示し、P_mを以つて生產機關を示すとすれば、購買すべき商品額WはA+P_mに等しくなる。即ち W=P_m である。更らに簡單に言へば、W<$^{A}_{P_m}$ である。故に G—W を內容の上より觀察すれば、G—W<$^{A}_{P_m}$ といふ形に表現される。換言すれば G—W は G—A とG—P_m とに分割され、貨幣額Gは勞働力を購買する部分と生產機關を購買する部分との二つに分割される。この兩列の購買はそれ〴〵全く異つた市場に屬するものであつて、一方は嚴密なる商品市場に於いて行はれ、他方は勞働市場に於いて行はれるのである。

（II）以下第七稿（一八七八年七月二日著手）より。

けれどもこの G—W<$^{A}_{P_m}$ は、Gと交換される商品額の斯かる質的分割のほかに、尙ほ極めて特徵的な量的關係をも代表するものである。

勞働力の價値又は價格は、勞働力を商品として販賣すべく所有してゐる人の手に勞銀なる形態を以つて、換言すれば餘剩勞働を含む一勞働量の價格として支拂はれるものであることは、我々の知る所である。」かくて勞働力の日價値が、例へば五時間勞働の產物である三マルクに等しいとすれば、この三マルクなる貨幣額は購買者と販賣者との契約に於いては、例へば、十時間勞働の價格又は賃銀として作用することになる。」かかる契約が例へば五十人の勞働者との間に締結されるとすれば、彼等は一日の中に合計五百勞働時間を購買者の手に供給せねばならぬ。而してこの五百勞働時間の二分の一なる二百五十時間（＝十時間第四條第四日25）は、餘剩勞働より成るものに過ぎないのである。」購買すべき生產機關の量並びに範圍は、右の五百時間の勞働量を充用するに足るものでなくてはならない。

かくの如く、G—W<$^{A}_{P_m}$ は單に一定額の貨幣例へば四百二十二磅が、相互に應當する生產機關と勞働力とに換へ

られるといふ質的關係を言ひ現はすのみではなく、またこの貨幣の勞働力Aに放下さるべき部分と、生産機關P_mに放下さるべき部分との間の量的關係をも言ひ現はすのである。而してこの量的關係は、一定數の勞働者の支出すべき必要以上なる餘剩勞働の量に依つて、最初から決定されてゐるのである。

假りに或紡績工場に使用される五十人の勞働者の週賃銀が五十磅であるとすれば、生産機關の爲に三百七十二磅の支出を要することとなる。但しこの三百七十二磅は、此等の勞働者のなす三千時間なる週勞働（この中、一千五百時間は餘剩勞働）に依つて絲に轉化さるべき生産機關の價値を代表するものと假定するのである。

種々異なつた産業部門に於いて追加勞働を充用する場合、生産機關なる形態を以つて幾許の價値追加をなさなければならないかといふ事は、この場合些かも關係する所なき問題である。寧ろ生産機關に支出される貨幣分（$G-P_m$を通して購買される生産機關）は、如何なる事情のもとにも十分の程度に存在しなければならないといふ事實、換言すれば幾許の必要あるかを豫め計算して適當なる比例に準備されねばならないといふ事實のみが、この場合問題となるのである。卽ち生産機關の量は、それを生産物に轉化せしむべき勞働量を吸收するに足るものでなくてはならない。若しこの目的のために十分なる生産機關が存在しないとすれば、購買者の支配に屬する過剩の勞働は之れを利用することが出來ず、その支配權は彼れにとつて何等の役をもなさないものとなるであらう。また若し利用し得べき勞働に要するよりも多量の生産機關が存在するとすれば、かかる生産機關は勞働に飽和されず、生産物に轉化されないであらう。

$G-W\begin{smallmatrix}A\\P_m\end{smallmatrix}$が完了したとき、購買者は單に何等かの有用品の生産に要する生産機關及び勞働力を支配するに至るのみではない。彼れは更らに、この勞働力の價値を償ふに必要であるところ以上の流動勞働力たる勞働量を支配すると同時に、又かかる勞働量の實現に、對象化に必要なる生産機關をも支配することとなる。卽ち彼れは生産要素の價値よりも大なる價値を有する物品の生産に、換言すれば餘剩價値をも含む商品量の生産に必要な諸因子を支配することとなるのである。かくて彼れが貨幣の形で前貸した價値は、今やそれが餘剩價値（商品形態における）を生む價値として實現され得べき現物形態を採ることとなる。換言すれば、右の價値は今や價値及び餘剩價値を造り出すものとして作用すべき能力を有する生産資本なる狀態又は形態のもとに存在することとなるのである。この形態における資本をPと呼ぶことにしよう。

所でこのPの價値は$A+P_m$の價値に等しく、A及P_mに換へられたGに等しい。GはPと同一の資本價値であつて、ただその存在形態が異なるのみである。卽ちそれは、貨幣狀態又は貨幣形態のもとにおける資本價値であり、換言すれば貨幣資本である。

故に$G-W\begin{smallmatrix}A\\P_m\end{smallmatrix}$又はその一般的形態たる$G-W$（卽ち商品購買の總計）は、一般的商品流通の斯かる行程は、これを資本の獨立した循環行程に於ける段階として見るとき、同時に又資本價値が貨幣形態から生産形態に轉化されること、約して言へば、貨幣資本の生産資本化となるのである。卽ち玆に先づ考察する所の循環形態に於いては、貨幣は資本價値の第一の負擔者として現はれ、隨つて貨幣資本は資本の依つて前貸さるべき形態として現はれることとなるのである。

貨幣資本としての貨幣は、諸種の貨幣機能——現在の場合について言へば、一般的の購買要具竝びに支拂要具たる機能のごとき——を盡し得べき狀態のもとにある。（貨幣が支拂要具たる機能を盡すは、勞働力を先づ購買して利用した後に初めて代價を支拂ふといふ場合に行はれる。生産機關が成品として市場に存在することなく、先づその註文をなす必要のある場合にも、$G-P_m$に於ける貨幣は矢張り支拂要具として作用するのである）。貨幣の斯くの如き能

力は、貨幣資本が資本であるとの事實に基くものではなく、寧ろそれが貨幣であるとの事實に基くのである。

他方に又、貨幣狀態における資本價値も矢張り貨幣機能のみを盡し得るに止まり、他の如何なる機能をも盡し得るものではない。この貨幣機能が資本機能となるのは、それが資本の運動上に一定の役割を演ずるからである。即ち其現はれる段階と、資本循環の他の諸段階との間に聯絡が存してゐる結果である。例へば玆に問題となつてゐる場合について見るに、貨幣は諸種の商品に換へられる。而して此等の商品の結合せるものは即ち生產資本の現物形態となるのである。かくて此等の商品は、潛伏的に、可能的に、豫め資本制生產行程の結果を包藏してゐることとなる。

$G—W \begin{cases} A \\ P_m \end{cases}$ に於いて貨幣資本たる機能を盡す貨幣の一部は、この流通それ自身の行はれる結果、資本性質が消滅して貨幣性質のみ殘存する所の一機能を盡すことになる。貨幣資本Gの流通は、$G—P_m$ と $G—A$ とに、即ち生產機關の購買と勞働力の購買とに分割される。いま、この勞働力購買の行程を單獨に考察して見よう。

$G—A$ は、資本家の側から見れば勞働力の購買であり、勞働力の所有者たる勞働者の側から見れば、勞働力——玆には勞銀なる形態の存在を假定するのであるから勞働といつてもいい——の販賣である。購買者にとつての $G—W$ ($=G—A$) は、他の各購買における如く、この場合にも亦、販賣者(勞働者)の側から見れば $A—G$ ($=W—G$) 即ち已れ自身の勞働力の販賣である。これは流通の第一段階であり、商品の第一轉形(第一卷、第三章、第二節a)であつて、勞働の販賣者から見れば彼れの商品が貨幣形態に轉化されることである。勞働者は斯くして得たる貨幣をば、彼れの欲望を充たす若干量の商品の購買に、消費資料の購買に次第に支出してゆくのであつて、彼れの商品の總流通は $A—G—W$ なる形を採つて現はれることとなる。換言すれば、それは第一に $A—G$ ($=W—G$)、第二に $G—W$ なる形を採るのであつて、單純なる商品流通 $W—G—W$ の一般的形態に依つて表現されることとなるのである。貨幣はこの場合、單なる經過的の流通要具として、商品對商品の交換の單なる媒介者として作用するに過ぎない。

$G—A$ は、貨幣形態のもとに前貸された價値を現實に於いて資本に轉化せしめる本質的條件であり、餘剩價値を產出する所の價値に轉化せしめる本質的條件となるものであるから、隨つて貨幣資本の生產資本化における特徵的の要素となるのである。$G—P_m$ なる行程は單に、$G—A$ を通して購買した勞働量を實現する上に必要たるのみである。されば第一卷第二編(『貨幣の資本化』)では、この見地からして $G—A$ を論究した譯である。本卷では、更らに他の見地から、特に資本の現象形態としての貨幣資本に關聯して、この問題を攻究しなければならない。

$G—A$ は資本制生產方法の一般的特徵と見られるが、然しこれは決して勞働力の購買なるものが、勞働力の價格たる勞銀の回收に必要である以上の勞働量の供給(1)を規定した購買契約(換言すれば前貸價値の資本化の根本條件たり又は畢竟同じことに歸するが、餘剩價値生產の根本條件たる餘剩勞働の供給を規定した購買契約)であるといふ、上記の理由に依るものではない。寧ろ $G—A$ の形態の上から斯く見られるのであつて、要するに勞銀なる形態のもとに貨幣を以つて勞働が購買される結果である。而してこの事實こそ、貨幣經濟の特徵となつてゐるのである。

この場合の特徵となつてゐるものは、更らに形態上の不合理でもない。かかる不合理は寧ろ、看過してしまふのである。この不合理は畢竟、左の事實に存してゐる。即ち勞働は價値形成要素であるとはいへ、それ自身としては何等の價値をも有し得るものではなく、隨つて一定量の勞働は、その價格に依り、その等價たるべき一定量の貨幣に依つて言ひ現はされる何等の價値をも有し得るものではないといふ事である。然るに我々の知る如く、勞銀なるものは一つの變裝形態に過ぎず、例へば勞働力一日分の價格をばこの勞働力から一日の中に實現される所の勞働の價格と見えしむるものであつて、これがため勞働力が例へば六時間の勞働を以つて生產する所の價値は十二時間分の勞働力の機

能（即ち勞働）の價値として言ひ現はれることとなるのである。

G—A は所謂貨幣經濟なるものの特徴となり印章となるのである。

現はれ、隨つて貨幣が購買者として現はれるからであつて、要するに貨幣關係なるものの（換言すれば、人間活動の賣買の）存在に依るのである。然るにGが貨幣資本に轉化せられることなく、又は經濟の一般的性質の上に革命が生ずることなくして、貨幣は早くから既に所謂勤勞なるものの購買者として現はれてゐるのである。

貨幣が如何なる種類の商品に轉化されるかといふことは、貨幣から見れば全くどうでも可い問題である。貨幣は凡ゆる商品の普遍的な等價形態であつて、如何なる商品も觀念的に一定額の貨幣を代表するものであり、貨幣への轉化を豫期するものであつて、ただ貨幣と代位することに依つてのみ所有者の爲の使用價値に變更され得べき形態を受くるものであることは、商品の價格が既に之れを示す所である。故に勞働力が一度びその所有者の商品として、勞働の代價たる勞銀を目的に販賣さるべき商品として市場に存在する以上、その賣買は他の凡ゆる商品の賣買に比して何等異つた所を示さない。商品たる勞働力が賣買され得るといふ事ではなく、寧ろ勞働力が商品として現はれるといふ事が特徴となるのである。

生産の物的因子と人的因子とが商品より成る限り、資本家は $G—W<^{A}_{P_m}$ 即ち貨幣資本の生産資本化に依つて此等の兩因子を結合せしめる。貨幣が初めて生産資本に轉化され又はその所有者にとり初めて貨幣資本たる機能を盡す場合、彼れは勞働力を購買する前に先づ生産機關たる勞働建物や機械などを購買して置かなければならない。なぜならば勞働力が彼れの支配に屬したとき、これを勞働力として充用し得るためには、生産機關が既に彼れの手に存在しゐることを必要とするからである。

以上は、資本家の側から見た形態である。

翻つて勞働者の側から見れば、次の如くになる。彼れの勞働力の生産的實現は、それが販賣の結果生産機關と結合する瞬間に初めて可能となる。彼れの勞働力は販賣される以前には、それ自身の實現の對象的條件たる生産機關から離れて存在してゐるのである。この分離狀態に置かれてゐる限り、勞働力は直接その所有者のための使用價値の生産に使用し得るものでなく、また販賣に依つて彼れを生活せしめ得べき商品の生産に使用し得るものでもない。然るに勞働力は販賣に依つて生産機關と結合するに至るや否や、生産機關と同樣に購買者の生産資本の一成分となるのである。

G—A なる取引に於いて、貨幣所有者と勞働力所有者とは購買者對販賣者として相互に關係し、貨幣所有者對商品所有者として相互に對立する。この意味に於いて、彼等相互の關係は單なる貨幣關係に過ぎないことは事實である。けれども同時に又、購買者は最初から、勞働力の所有者をしてこれを生産的に支出せしむべき對象的條件たる生産機關の所有者として現はれて來るのである。語を換へていへば、この生産機關は他人の所有に屬するものとして勞働力の所有者に對立することとなるのである。他方に又、勞働の販賣者は他人の勞働力として購買者に對立するものであつて、購買者の資本が現實的に生産資本として作用する爲には、この勞働力は彼れの支配に屬し、彼れの資本と合體せしめられなければならない。即ち資本家對勞働者の階級關係は、兩者が G—A（勞働者の側から見れば A—G）なる取引に於いて相對立する瞬間に既に存在し前提されてゐるのである。この關係は賣買であり、貨幣關係である。けれども、それは購買者が資本家として前提され、販賣者が賃銀勞働者として前提される所の賣買である。而してこの關係は、勞働力の實現に必要な條件なる生活資料及び生産機關が他人の所有に屬し、勞働力の所有者からは分離されて

ゐるといふ事實に基くものである。」

如何にしてこの分離が生ずるかといふ問題は、玆に說く必要はない。G—A が行はれるとき、この分離は事實に於いて存在してゐるのである。これについて我々の興味を引く問題は、G—A が貨幣資本の一機能として現はれ、貨幣が資本の存在形態として現はれるやうになるのは決して、貨幣が利用效果を有する所の人間活動たる勤勞に對する支拂要具としてこの取引の上に作用するといふ理由にのみ依るものではなく、隨つて貨幣が支拂要具として盡す機能にのみ依るものではないといふ一事である。貨幣は左の理由に依つてのみ、この形態のもとに支出され得る。即ち勞働力は生產機關（勞働力それ自身の生產機關としての生活資料をも含む）から分離された狀態のもとに存在し、而してこの分離はただ勞働力が生產機關の所有者に販賣されることに依つてのみ廢除されるものであり、隨つて又勞働力の實現——その限界は決して、勞働力それ自體の價格の再生產に必要な勞働量の限界と一致するものではない——は購買者の處置に屬してゐるといふ事實がそれである。」生產行程の持續中に資本關係が生じて來るのは、それが既に流通取引の內部に、購買者と販賣者とを相互對立せしむる經濟上の相異つた根本條件の內部に、換言すれば彼等の階級關係の內部に存在して居ればこそである。この關係は貨幣の性質に基くものではなく、寧ろこの關係が存在すればこそ、單なる貨幣機能は一つの資本機能に轉化され得るのである。」

貨幣資本（今のところ、玆に問題となる一定機能の範圍內についてのみ謂ふのであるが）の解釋には通常、互ひに竝行し又は交叉した二つの錯誤が伴ふものである。即ち一、資本價値が貨幣資本として盡す機能、貨幣形態のもとに存すればこそ盡し得る機能は、資本價値の資本性質に基くものとされてゐる。然しこれは誤りであつて、かかる機能はただ資本價値の貨幣狀態に基くのみであり、それが貨幣として採る所の現象形態に基くのみである。二、反對に貨幣をして同時に資本機能をも盡さしめる所の、貨幣機能の特殊的內容は、貨幣の性質に基くものとされてゐる。即ち貨幣は資本と混同されてゐる。而も斯くの如き貨幣機能は、この場合 G—A の實現に含まれる如き社會的の條件を前提するものであつて、かかる條件は單なる商品流通及びそれに照應した貨幣流通の場合には決して存在するものではないのである。

奴隸の賣買も、形式上には矢張り商品賣買である。然し奴隸制度が存在しなければ、貨幣はこの機能を盡くすことが出來ない。奴隸制度の存在するとき、貨幣は初めて奴隸の購買に支出され得るものとなるのである。他方に、貨幣が購買者の手に存在するといふ事實のみに依つて、奴隸制度は可能となり得るものではない。

自己勞働の販賣又は勞銀の受領なる形態を以つて行はれる自己勞働力の販賣が隔絕的の現象としてではなく、商品生產の社會的に標準的なる前提條件として表現され、かくして貨幣資本が玆に考察する $G—W\overset{A}{<}_{P_m}$ なる機能をば社會的の規模に於いて遂行する事となる爲には、生產機關と勞働力との本來的結合を分解せしむべき歷史的行程の存在を必要とする。この行程に依つて、非所有者としての多數人民たる勞働者と、生產機關の所有者としての非勞働者とは相對立することとなるのである。これについて、右の分解以前に存在した結合が、勞働者みづから生產機關として他の生產機關の一部を成すといふ形態のものであつたにしろ、又は勞働者が生產機關の所有者であるといふ形態のものであつたにしろ、いづれにしても問題の上には何等影響する所がないのである。

要するにこの場合、$G—W\overset{A}{<}_{P_m}$ なる取引の根柢に存在する事實は分配である。尤もそれは消費資料の分配といふ通常の意義における分配を指すものではなく、生產要素そのものの分配を謂ふのである。この分配に依つて、一方には對象的因子が集積され、他方にはそれから隔絕されて勞働力が集積されることとなる。

されば G—W なる取引が普遍的の社會的取引となり得るためには、生産資本の對象的部分たる生産機關が豫め斯かるものとして、資本として、勞働者に對立してゐることを要するのである。

資本制生産が一度び確立されると、その發展中に右の分離を再生産するのみではなく、更らに益々大なる範圍に擴大して、遂にはこれを普遍的に行はれる社會狀態たるに至らしめることは、我々の曩に見た所である。けれどもこの問題には、更らに他の一面がある。そも〳〵資本が成立して生産を支配し得るやうになるためには、商業が、商品流通が、隨つて商品生産が、豫め一定の發達を遂げてゐることを必要とする。蓋し如何なる物品も販賣を目的として生産されざる限り、商品として生産されざる限り、商品として流通に入ることは出來ないからである。然るに商品生産なるものは、資本制生産の基礎上に立つたとき、初めて生産の標準的な支配的な性質として現はれるのである。

所謂農民解放なるものが行はれた結果、今や農奴的の强制勞働者を以つてする代りに賃銀勞働者を以つて農業を經營しつつあるロシアの土地所有者たちは、二つの事實について怨嗟の聲を發してゐる。其一つは貨幣資本の缺乏といふ事である。例へば彼等は曰く、農作物を販賣する前に多額の賃銀を勞働者に支拂はねばならないのであるが、その第一の條件たる現金が缺乏してゐるのであると。生産を資本制的に經營する爲には、勞銀支拂の目的から見ても、貨幣なる形態を採つた資本が絶えず存在してゐることを必要とする。然しこの問題については、彼等は安んじて可なりである。待てば海路の日和といふこともある。而して産業資本家は、今や自己所有の貨幣のみではなく、他人の貨幣をも支配してゐるのである。

所で第二の怨言は更らに特徴的なものである。卽ち彼等は曰く、假りに貨幣はあるとしても、購買すべき勞働力は十分に且つ何時でも見出される譯のものではない。蓋しロシアの農村勞働者は、村落共産體のもとに行はれた土地共有の結果、尙いまだ十分にその生産機關から分離されて居らず、隨つていまだ完全なる意味の『自由賃銀勞働者』とはなつて居らないからであると。而もこの自由賃銀勞働者なるものが社會的規模に存在することは、G—W（貨幣の商品化）を貨幣資本の生産資本化として表現し得る上に必要缺くべからざる條件となるのである。

されば貨幣資本の循環公式たる G—W……P……W′—G′ は、資本制生産が既に發達してゐる所にのみ資本循環の自明的形態となり得るものである事は言ふ迄もない。なぜならば、この公式は社會的規模における賃銀勞働者階級の存在を前提するからである。既に說いた如く、資本制生産なるものは單に商品及び餘剩價値を生産するのみではなく、また益々大規模に賃銀勞働者階級を再生産し、且つ直接的生産者の大多數をば賃銀勞働者に轉化せしめるのである。かくの如く G—W……P……W′—G′ を行はしめる第一の條件となるものは、賃銀勞働者階級が不斷に存在するといふ事實であるから、この公式は生産資本なる形態を採つた資本の存在、隨つて又生産資本の循環形態の存在を前提することになるのである。

（II）第二段階。生産資本の機能

玆に考察する資本循環は G—W なる流通取引を以つて、卽ち貨幣の商品化を以つて、購買を以つて始まる。隨つて流通は更らに、反對轉形たる W—G に依つて、商品の貨幣化卽ち販賣に依つて補充されねばならないこととなる。然るに $G—W \cdots\cdots P_m^A$ の直接の結果は、貨幣形態を以つて前貸された資本價値の流通が中絶することである。貨幣資本が生産資本に轉化された結果、資本價値は一つの現物形態を與へられ、かくして最早引續き流通することが不可能となり、消費（換言すれば生産的消費）の領域に入らなければならなくなる。勞働力の使用たる勞働は、勞働行程の

内部に於いてのみ實現され得るものである。勞働者は資本家の奴隷ではないから、資本家は勞働者を更らに商品として販賣することは出來ない。資本家が勞働者から購買したものは、勞働者の勞働力の一定時間に亙つた利用のみである。他方に又、資本家は勞働力の助けを以つて生産機關を商品形成要素として利用することに依るのほか、勞働力を利用し得るものではない。かくて第一段階の結了は即ち第二段階（資本の生産段階）の開始となるのである。

この運動は $G—W\begin{smallmatrix}A\\P_m\end{smallmatrix}\cdots\cdots P$ に依つて表現される。點線は資本流通の中絶を示す。然し資本の流通は中絶しても資本は商品流通の部面から轉じて生産部面に入るものであるから、その循環行程は依然繼續する譯である。かくの如く、第一段階（貨幣資本の生産資本化）は、第二段階（生産資本の機能）の先驅たり序段たるに過ぎないのである。

$G—W\begin{smallmatrix}A\\P_m\end{smallmatrix}$ は、この取引をなす個人が何等かの使用形態のもとに存する價値を支配する事みのではなく、また此等の價値をば貨幣形態のもとに所有する事、即ち彼れが貨幣所有者である事を前提する。然るにこの取引は、畢竟するところ貨幣の交附といふ事に外ならない。而して彼れはこの貨幣交附なる行爲そのものの中に貨幣の回流が含まれてゐる限りに於いてのみ、貨幣所有者たるを得るのである。而も貨幣はただ商品を販賣することに依つてのみ彼れの手に回流し得る。故に右の取引は、彼れが商品生産者たることを前提する譯である。

$G—A$　賃銀勞働者は勞働力を販賣せずしては生活し得ない。勞働力の保存即ち勞働者の自己生存には日々の消費を要する。そこで彼れに對する支拂は、絶えず小刻みに反復されることを要する譯である。これは彼れが己れの生存に要する諸種の購買（$A—G—A$ 又は $W—G—W$ なる取引）を反復し得る上に必要な條件である。かくて資本家は貨幣資本家として、彼れの資本は貨幣資本として、絶えず賃銀勞働者と對立しなければならなくなつて來る。

然し他方に又、直接的生産者たる賃銀勞働者の多衆が、$A—G—A$ なる取引をなし得る爲には、必要なる生活資料が購買し得べき形態を以つて、商品形態を以つて、絶えず彼等に對立することを要する。而してこの狀態は、生産物が商品としてなす流通、隨つて又商品生産の範圍が既に著しく發達してゐることを必要とするのである。賃銀勞働を基礎とする所の生産が普及するや否や、商品生産は生産の普遍的形態とならねばならなくなつて來る。而して商品生産が斯く普遍的に行はれると假定することは又、社會的の分業が絶えず增進すること、換言すれば一定の資本家に依り商品として生産される生産物の特殊化が絶えず增進し、相互補充的なる生産諸行程の獨立行程への分化が絶えずます〳〵發達することを前提する。かくて $G—A$ が發達するに比例して、$G—P_m$ もまた發達することになる。換言すれば、右の發達と同一の比例を以つて、生産機關の生産は生産機關に依つて生産される商品から分離し、生産機關は商品として各商品生産者自身に對立することとなる。彼れはこの生産機關を自ら生産することなく、彼れ自身の經營に掛かる一定の生産行程のために他から購買するのである。生産機關は彼れの生産部門から全く分離された獨立に經營される他の生産部門に依つて生産され、商品として彼れの生産部門に入るのであつて、彼れはそれを購買しなければならない。商品生産の物的條件は、ます〳〵著しく他の商品生産者に依る生産物として、商品として彼れに對立する。これに應じて又、資本家は貨幣資本家とならねばならず、彼れの資本が貨幣資本として作用すべき規模は擴大されることとなるのである。

他方に於いて、資本制生産の根本條件たる賃銀勞働者階級の存在を齎らす事情は、又同時に、一切の商品生産をば資本制商品生産に轉化せしめる。資本制商品生産が發達するに從ひ、主として自家使用を目的とし單に過剩の生産物のみを商品に轉化する所の舊來の凡ゆる生産形態は分解的な壞滅的な影響を受ける。資本制商品生産は外見上先づ生産方法そのものの上には影響する所なきが如くであつて、生産物の販賣といふ事を主たる利害問題にしてゐる。これ

は例へば、資本主義的世界貿易が支那人、インド人、アラビア人等の如き諸民族に及ぼした最初の影響に於いて見られる所である。第二に又、資本制生産が根を張つた所に於いては、生産者の自家勞働なり、過剰の生産物のみを商品として販賣するといふ事實なりに立脚した一切の商品生産形態は破壞されることとなる。資本制生産は先づ商品生産を普遍化し、次いで次第に一切の商品生産をば資本制商品生産に轉化するのである(三)。

(三) 以上第七稿、以下第六稿。

生產の社會的形態の如何を問はず、勞働者と生產機關とは常に生產上の因子たるを失はない。然しそれが相互に分離された狀態について言へば、此等の物はただ可能的にのみ生產の因子たるに過ぎぬのであつて(一)、苟くも生產が行はれる爲には兩者の結合を必要とするのである。この結合が行はれる特殊の樣式に從つて社會構造の種々異なつた經濟的時期の上に區別が與へられる。玆に考察する所の場合について言へば、自由勞働者が彼れの生產機關から分離されるといふ事實は出發點として前提されるのであつて、此等の兩者が資本家の手に依り如何にして如何なる條件のもとに結合されるかは、我々の既に見た通りである。即ちそれは、彼れの資本の生產的な存在樣式として結合されるのである。隨つて斯く結合された商品形成の人的竝びに物的要素が相互に通過する所の現實的行程たる生產行程は、それ自身資本の一機能となり資本制生產行程となるのであつて、この行程の性質は本書第一卷に詳述した所である。商品生產の如何なる經營も、同時に又勞働力搾取の經營となるものであるが、それが劃時代的の搾取樣式となることは、資本制商品生產のもとに初めて見られる所である。蓋し資本制度のもとに行はれる搾取は、その歷史的發展の進行中勞働行程の組織と生產技術の異常なる發達とに依つて社會の全經濟的構造を革命するものであつて、この點に於いて比較すべからざるまでに從前の凡ゆる時代を凌駕するからである。

前貸資本價値の存在形態として見た生產機關と勞働力とは、それが生產行程に於いて價値形成上隨つて又餘剩價値の生產上に演ずる役割の差異に依り、一方は不變資本、他方は可變資本として區別される。更らに此等の兩者は、生產資本の異なれる成分として見るとき左の事實に依つて區別される。即ち生產機關の方は、資本家の所有に屬する限り生產行程の外部に於いても彼れの資本となるのであるが、勞働力の方は、生產行程の內部に於いてのみ個別的資本の存在形態となるに過ぎないといふ事實がそれである。勞働力なるものは、その販賣者たる賃銀勞働者の手に在る時にのみ商品であり、反對にその購買者たり一時的使用の保有者たる資本家の手に在る時にのみ資本となるのである。而して生產機關それ自身が生產資本の對象的形態となり生產資本となるのは、この資本の人的存在形態としての勞働力が生產機關に合體し得るものとなつた瞬間から初めて行はれる事である。人間勞働力が本來資本ではないのと同じく、生產機關も亦本來に於いて資本たるものではない。生產機關は一定の歷史的に發達した條件のもとにのみ斯かる特殊の社會的性質を受けるのであつて、これ恰も、かくの如き條件のもとにのみ貴金屬が貨幣なる性質を印刻され、更らに貨幣が貨幣資本なる性質を印刻される如くである。

生產資本はそれが作用しつつある間に、己れ自身の諸成分をばヨリ高き價値の生產物量に轉化せしめる爲に消費する。勞働力は生產資本の一器官として作用するに過ぎぬものであるから、勞働力に依つて與へられる所の餘剩勞働に基く、生產資本成素の價値以上に出づる生產物價値分も亦、資本に屬すべき果實となるのである。勞働力の餘剩勞働は資本から見れば無償の勞働であつて、資本家の爲に餘剩價値を、何等の等價をも要せざる價値を形成することとなるのである。即ち生產物なるものは單に商品たるのみではなく、また餘剩價値を孕んだ商品ともなるのである。「この商品の價値は P+M（その生產に消費した生產資本の價値Pと、それを以つて生產された餘剩價値Mとの和）に等

しい。いま此商品が一萬斤の絲より成るものとし、三百七十二磅の價値ある生産機關と、五十磅の價値ある勞働力とが、その生産上に消費されたものと假定しよう。紡績行程の持續中、紡績工は彼等の勞働に依つて消費した生産機關の價値三百七十二磅を絲に移轉せしめると共に、また彼等の勞働支出に從つて例へば一百二十八磅なる新價値を造り出した。即ち一萬斤の絲は、五百磅なる一價値を負擔するものとなるのである。

(三) 第三段階 W′—G′

既に價値增殖を遂げた資本價値が採る所の、生産行程それ自身から直接生じ來たつた機能的存在形態たる資格に於いて、商品は商品資本となるのである。商品生産がその社會的範圍の全部に亙つて資本主義的に經營されるとすれば、一切の商品はそれが鑛鐵から成るにしろ、又はブリュッセル・レース、硫酸、葉卷莨等の何づれから成るにしろ、いづれにしても最初より商品資本の要素となるであらう。如何なる種類の商品群がその構性上資本たる位置を占むべきであり、如何なる種類のものが普通の商品として使用さるべきであるかとの問題は、畢竟するところ煩瑣哲學的の經濟學自身に依つて造り出された享樂的苦難の一つに過ぎないのである。

商品形態のもとにある資本は、商品機能を盡さなければならない。この資本を構成する所の物品は、最初より市場の爲に生産されたものであつて、販賣され貨幣に轉化されなければならない。即ち W′—G′ なる運動段階を通過しなければならないのである。

いま、資本家の商品が一萬斤の綿絲から成ると假定しよう。紡績行程に於いて三百七十二磅の價値ある生産機關が消費され、一百二十八磅といふ新たなる價値が造り出されたとすれば、綿絲は五百磅なる價値を有することとなる。これは同じ額面の價格に依つて言ひ現はされる。而してこの價格は、販賣たる W′—G′ に依つて實現されるものと見るのである。然る場合、凡ゆる商品流通の斯かる單純な行程を資本機能たらしむるものは、果して何であるか？　それはこの行程の內部に於いて、綿絲なる商品の使用性質なり價値なりの上に生ずる變化ではない。なぜならば、この商品は使用對象として購買者の手に移轉するものであり、またその價値は何等の量的變化をも受けず、ただ形態變化を受くるに過ぎないからである。この價値は最初綿絲として存在し今や貨幣として存在する。かくて最初の段階たる W′—G′ と、最終の段階たる W′—G′ との間には、本質的の一區別が生ずることとなる。前者に於いては、前貸貨幣は流通に依つて特殊の使用價値を有する商品に轉化されるが故に貨幣資本として作用するのであるが、後者に於いては、商品はその流通の開始に先だつて既に生産行程の內部から資本性質を具備して出て來るが故にのみ、資本として作用し得るのである。紡績行程の持續中、紡績工は一百二十八磅なる綿絲價値を造り出した。その中、例へば五十磅は資本家が勞働力のために支出した額の等價に該當し、一五六パーセントなる勞働力の搾取程度を代表する所の七十八磅は餘剩價値に該當するのである。

かくの如く、一萬斤の綿絲は第一に、消費された生産資本Pの價値を含む。その不變分は三百七十二磅、可變分は五十磅であつて、合計四百二十二磅（＝綿絲八千四百四十斤）となる。然るにこの生産資本Pの價値は、その形成要素の價値Wに等しきものであつて、此等の成素は G—W なる段階に在るとき、販賣者の手に存する商品として資本家に對立してゐたものである。

綿絲の價値は第二に又、七十八磅（＝綿絲一千五百六十斤）なる餘剩價値を含む。故に一萬斤の綿絲の價値表章としてのWは、W＋ΔW（即ちWとその增加分たる七十八磅との和）に等しいものとなる。この增加分は、原價値Wが

現在に於いて存する所と同一の商品形態を採つて存在するものであるから、これをwと呼ぶことにする。一萬斤の綿絲の價値は五百磅に等しく、隨つて W+w=W′ に等しいものとなる。一萬斤の綿絲の價値表章たるWをW′たらしむるものは、その絶對的價値量（五百磅）ではない。なぜならばこの絶對的價値量は、他の何等かの商品量の價値表章としての他の一切のWにおけると同じく、商品量に對象化されてゐる勞働の大小に依つて決定されるからである。Wをw′たらしむるものは寧ろ、Wの相對的價値量（卽ちその生産に消費された資本Pの價値と比較したWの價値量）である。この價値は生産資本に依つて供給された餘剩價値と合して、Wの價値量に含まれてゐる。Wの價値は、資本價値に比してこの餘剩價値wだけ大であり超過してゐるのである。一萬斤の綿絲は、價値增殖を遂げ餘剩價値を附加された資本價値を負擔する。而してこれが斯樣な負擔者となるのは、資本制生産行程の生産物たる資格に基くものである。

W′は一つの價値關係を、商品生産物の價値と此生産物の生産に支出された資本價値との關係を、換言すれば商品生産物の價値が資本價値と餘剩價値とから成るといふ事實を言ひ現はすものである。一萬斤の綿絲は、生産資本Pの轉化した形態としてのみ、換言すれば先づ此個別的資本の循環の內部以外の所には存在しない關係に依つてのみ、又は自己の資本を以つて綿絲を生産した資本家にとつてのみ、商品資本W′となるのである。價値負擔者としての一萬斤の綿絲を商品資本たらしめるものは、謂はば內部的の關係のみであつて、外部的の關係ではない。この綿絲はその價値の絶對量ではなく相對量の裡に、換言すれば、それに含まれる生産資本が商品に轉化される以前有してゐた所の價値量と比較せるそれ自身の價値量の裡に、資本主義的の母斑を帶びてゐる。隨つて一萬斤の綿絲が五百磅なる價値通りに販賣される限り、この流通取引は單獨に觀察すれば W—G（不變の價値が單に商品形態から貨幣形態に轉化されるといふだけの行程）に等しきものとなる。然しながら、この取引は個別的一資本の循環における一段階として見れば、商品に依つて負擔される資本價値四百二十二磅と餘剩價値七十八磅との和を實現するものとなる。卽ち W′—G′（商品資本が商品形態から貨幣形態に轉化される行程）に等しきものとなるのである（四）。

（四）以上第六稿、以下第五稿。

Wの機能は、今やあらゆる商品生産物に共通した機能となつてゐる。卽ちそれは、貨幣に轉化されるといふ機能であり、販賣されるといふ機能であり、W—G なる流通段階を通過するといふ機能である。かく價値增殖を遂げた資本が商品資本なる形態を保持し、市場に在留する限り、生産行程は休止して、この資本は生産物形成者としても價値形成者としても、作用しないことになるのである。資本が商品形態を棄てて貨幣形態を採る速度の如何に從ひ、換言すれば販賣の速度の如何に從つて、同一の資本價値が生産物形成者及び價値形成者として役立つ程度には種々なる差異を生じ、再生産の規模は大となつたり、小となつたりする。與へられたる一資本の作用程度が、それ自身の價値量からは或程度まで獨立した生産行程の諸要素に依つて決定される事は、第一卷に述べた所である。流通行程は今や資本の作用程度を形成し資本の伸張及び收縮を形成する所の、資本價値の大小から獨立した新たなる要素を運轉するに至つたことを示してゐる[3]。

價値增殖を遂げた資本の負擔者たる商品量W′は、更らにその全般に亙つて W′—G′ なる轉形を通過しなければならない。この轉形に於いては、販賣品の分量が本質的の決定條件となるのである。個々の商品は今や總量の組成分として作用するに過ぎない。五百磅なる價値は、一萬斤の綿絲として存在してゐる。若し資本家が七千四百四十斤を三百七十二磅といふ價値通りに販賣し得るのみであるとすれば、彼れの不變資本たる支出生産機關の價値が回收されるの

みに止まるが、八千四百四十斤を販賣し得るとすれば、前貸總資本の價値量が回收されることとなる。餘剩價値を實現するためには、更らに多く販賣しなければならない。而して七十八磅（＝一千五百六十斤）なる全餘剩價値を實現するには、一萬斤なる綿絲の全部を販賣しなければならないのである。即ち資本家の受くる五百磅なる貨幣は、その販賣商品の價値と等額の價値を代表するに過ぎぬのであつて、流通内部における彼れの取引は單純な W—G である。若し五十磅の代りに六十四磅を勞働者に支拂ふとすれば、資本家の得る餘剩價値は七十八磅でなく六十四磅のみとなり、搾取程度は一五六パーセントでなく一〇〇パーセントのみとなつてしまふであらう。然し彼れの綿絲の價値は變化を受くることなく、ただ其異なつた部分間の關係が變化するのみであつて、流通取引 W—G は依然として一萬斤の綿絲を五百磅なる價値で販賣することを意味するであらう。

W′は W+w（即ち四百二十二磅と七十八磅との和）に等しい。Wは生産資本Pの價値に等しく、而してこの價値は又、G—W（即ち生産諸要素の購買）に前貸されたGの價値に等しい。即ち上例について言へば、四百二十二磅である。商品量が若しその價値通りに販賣されるとすれば、Wは四百二十二磅に等しく、wは七十八磅（一千五百六十斤の綿絲に依つて代表される餘剩生産物の價値）に等しくなる。いま、貨幣に言ひ現はされたwをgと呼ぶとすれば、W′—G′＝(W+w)—(G+g) となり、明細的な形態における循環 G—W……P……W′—G′ は $G—W\begin{smallmatrix}A\\Pm\end{smallmatrix}……P……(W+w)—(G+g)$ となる。

第一段階に於いては、資本家は嚴密の意義における商品市場及び勞働市場から使用物品を得て來たのであるが、第三段階に於いては商品を市場に、而もただ一つだけの市場に、嚴密の意義における商品市場に投げ返すのである。然し彼れがその商品に依つて、最初市場に投入した所よりも多額の價値を市場から再取するといふ事は、畢竟するに最初市場から引き上げた所よりも多額の商品價値を市場に投入する結果に外ならないのである。彼れはGなる價値を投入して、同じ價値のWを再取した。今や彼れは W+w を投入して、同じ價値の G+g を再取するのである。

囊の假定に依れば、Gは八千四百四十斤の綿絲の價値に等しかつた。然るに彼れは一萬斤を市場に投入する。即ち引き上げたる額よりも大なる價値を投入する譯である。他方に、彼れがこの增大せる價値を市場に投入し得るのは、生産行程に於いて勞働力の搾取に依り餘剩價値（餘剩生産物に言ひ現はされた生産物部分としての）を産出した結果に外ならない。この行程の産物としてのみ、商品量は商品資本となり、增殖を遂げた資本價値の負擔者となるのである。W′—G′ の執行に依つて、前貸資本價値と餘剩價値との雙方が實現される。この兩者の實現は W′—G′ に依つて言ひ現はされる所の、商品總量の販賣——それは幾回にも亙つて行はれることがあり、また一度に行はれてしまふこともある——に於いて相一致する(4)。けれどもこの W′—G′ なる同一の流通行程は、次の意味に於いて資本價値と餘剩價値との上に差異を來たすのである。即ちこの行程は、資本價値と餘剩價値との各に對して異なつた流通段階を、兩者が流通の内部に於いて通過すべき轉形列における異なつた段落を言ひ現はすといふことがそれである。餘剩價値wは生産行程の内部に初めて生成するものであつて、それが商品形態を採つて商品市場に現はれて來るのは最初になされる經驗である。即ち商品形態なるものは、餘剩價値の最初の流通形態であり、隨つて又 w—g なる取引はそれが初めて經驗する所の流通取引であり、轉形である。この轉形は尙ほ、反對の流通取引たり逆轉形たる g—w に依つて補充されねばならない(5)。

(5) この事實は、資本價値と餘剩價値とを如何なる具合に分離しても、均しく行はれるところである。一萬斤の綿絲には一千五百六十斤（＝七十八磅）なる餘剩價値が含まれてゐるが、一斤の綿絲（＝一志）にも同樣に二・四九六オンス（＝一・七二八

片）なる餘剰價値が含まれてゐる。

然るに、同一の流通取引 W—G' に於いて資本價値Wの經驗する流通については趣きが異なつて來る。この流通取引は、資本價値の立場から見れば W—G（WはP即ち最初に前貸したGに等しい）なる流通取引である。資本價値はGとして、貨幣資本として、最初の流通取引を開始した。それは W—G なる取引に依つて、同じ形態に復歸するのである。即ち資本價値は（一）G—W（二）W—G なる相對立した二つの流通段階を通過して、新らたに同一の循環行程を開始し得べき形態に復歸する。餘剰價値にとつて最初の經驗である所の、商品形態から貨幣形態への轉化は、資本價値から見れば本來の貨幣形態への復歸であり再轉化である。

「G—W へ $^{A}_{P_m}$ に依つて、貨幣資本は同じ價値の商品量A及P_mに換へられた。此等の商品は最早商品として、販賣品として作用するものではない。その價値は今や購買者たる資本家の手に、彼れの生產資本Pの價値として存在してゐる。而して此等の商品は、Pの機能たる生產的消費に依り、生產機關とは素材的に異なる所の商品種類なる綿絲に轉化されるのであつて、その價値はこの綿絲を通して保存されるのみではなく、また增大することにもなるのである。即ちそれは四百二十二磅から五百磅に增大する。かかる現實的の轉形に依り、第一段階 G—W に於いて市場から引き上げられた諸商品は素材の點から見ても價値の點から見ても己れ自身とは異なつた商品に依つて代位される。而してこの商品は今や、商品たる機能を盡さなければならない。即ち貨幣に轉化し販賣されねばならないのである。要するに、生產行程なるものは、資本價値の流通行程の中絕として現はれるに過ぎない。蓋し生產行程の開始される當時に於いては、資本價値は尙いまだ第一段階たる G—W を通過したのみであつて、Wが素材と價値との兩方面に互つて變化を遂げた後に、第二の結了的な段階を通過することとなるからである。けれども單獨に考へた資本價値について言へば、それは生產行程に於いて使用形態の變化を受けたのみである。この資本價値はA及P_mに依つて代表される四百二十二磅なる價値として存在してゐたが、今や八千四百四十斤の綿絲に依つて代表される所の四百二十二磅なる價値として存在してゐる。故に餘剰價値から分離されたものとして考へた資本價値の流通行程の兩段階のみについて觀察すれば、この資本價値は（一）G—W（二）W—G を通過することとなる。この第二のWを第一のWと比較して見るに、使用形態は變化してゐるが價値は同一である。要するに、右の資本價値は G—W—G なる流通形態を通過することとなるのである。この流通形態に依つて、商品は方向の反對した二重轉位、換言すれば貨幣より商品への轉化と、商品より貨幣への轉化とを遂げる結果、貨幣として前貸された價値は必然その貨幣形態に復歸し、貨幣に再轉化されねばならぬこととなる。

貨幣として前貸された資本價値からいへば、第二の結了的な轉形であり貨幣形態への復歸である流通取引 W'—G' は、商品資本に依り資本價値と一括して負擔され、又商品資本が貨幣形態に轉化する結果一括して實現される所の餘剰價値から見れば、商品形態より貨幣形態への轉化（即ち W—G）なる最初の轉形となり、最初の流通段階となるのである。

これに就いて注意を要する事實が二つある。第一に、資本價値が其本來の貨幣形態に向つてする終結的の再轉化は商品資本の一機能であるといふ事、第二に、この機能は餘剰價値が本來の商品形態から貨幣形態に向つてする最初の形態轉化を含むといふ事。要するに貨幣形態なるものは、この場合二重の役割を演ずる。即ちそれは一方に、本來貨幣として前貸された價値の復歸的形態であり、換言すれば流通行程を開始すべき價値形態への復歸であると同時に、他方には又、本來商品形態を以つて流通に入る一價値の最初の轉化した形態である。商品資本を構成する所の諸商品

が、玆に假定する如く價値通りに販賣されるとすれば、W+w は同じ價値の G+g に轉化され、實現された商品資本は今やこの G+g（422 磅+78 磅=500 磅）といふ形態を採つて資本家の手に存在することとなる。資本價値と餘剰價値とは今や貨幣として、卽ち普遍的の等價形態を採つて存在するのである。

かくの如く、循環行程の終末に於ける資本價値は、循環行程に入つた當時の形態を再び採るのである。かくして資本價値は、新たに又貨幣資本として同一の行程を開始し通過することが出來る。この行程の開始形態と終末形態とが貨幣資本（G）なる形態であればこそ、我々は斯かる形態の循環行程をば貨幣資本の循環と呼ぶのである。この行程の終末に於いて變化を受けたものは、前貸價値の形態ではなく大小のみである。

G+g は一定量（上例に依れば五百磅）の貨幣額に外ならない。けれども資本循環の結果として見れば、實現された商品資本として見れば、この貨幣額は資本價値と餘剰價値とを含む。而して此等の兩者は最早、綿絲に體現されてゐた場合の如く相互に融合するものではなく、別個に相竝んで存在するのである。資本價値と餘剰價値との各は、商品資本の實現に依つて相獨立した貨幣形態を與へられる。右の貨幣額の二百五十分の二百十一は四百二十二磅なる資本價値であり、二百五十分の三十九は、七十八磅なる餘剰價値である。商品資本の實現に依つて生ずる斯くの如き分離は、單に以下述ぶる如き形式的の意義を有するのみではなく、又 g の全部が G に追加されるか、一部分しか追加されないか、それとも全然追加されないかに從つて、換言すれば g が前貸資本價値の組成分として作用するか否かに從つて、資本の再生產行程に重大なる影響を及ぼすものである。g と G とは、全く異なつた流通を通過することも出來るのである。

資本は G′ を通して本來の形態たる G（貨幣形態）に復歸する。だがこの場合、それは資本として實現された形態を採るのである。

第一に分量上の差異が存在してゐる。資本は最初 G 四百二十二磅であつたが、今や G′ 五百磅である。而してこの雙方の差は、循環の兩極たる G……G′ に依つて言ひ現はされる。この場合、循環の運動そのものは點線に依つて示されてゐる。G′ は G よりも大であり、而して G′−G は M（餘剰價値）に等しい。然しこの G……G′ なる循環の結果として今存在してゐるものは G′ のみである。G′ は形成要素の消滅した生產物であつて、今や己れ自身を生ぜしめた運動から引き離され、それ自身獨立して存在してゐる。かかる運動は消滅し去り、それに代つて G′ が存在することとなつたのである。

けれども G+g（前貸資本四百二十二磅とその增加分七十八磅との和）としての G′ は、同時に又一つの質的關係をも表現する。尤もこの質的關係は、一つの貨幣額を構成する部分と部分との間の關係としてのみ、卽ち量的關係としてのみ存在するものである。前貸資本 G はその本來の形態（四百二十二磅）に復歸したものではあるが、今や實現された資本として存在してゐる。それは自己を保存したのみではなく、更らに資本として實現されたものともなるのである。かくの如き實現された資本として、G は g（七十八磅）から區別される。それは g に對して母體たる關係に立つのであつて、g はその產物であり、果實であり、この母體に依つて生み出された增殖分である。G は斯かる價値を生む價値として實現されたればこそ、資本としても實現されたのである。G′ は資本關係として存在する。G は最早單なる貨幣として現はれるものではなく、明かに貨幣資本たる地位に置かれ、自己增殖を遂げた價値として自己を增殖し、自己に含まれる所よりも大なる價値を生ずべき特性を有する所の價値として言ひ現はされる(3)。それは自己から移轉された部分以外の G′ の殘餘分（卽ち G の結果たり產物たる部分）に對する關係に依つて、資本たる地位に置かれ

るのである。かくしてG′は、機能上（概念上）相異なつた諸部分に分化せる價値として、資本關係を言ひ現はす所の價値量として現はれるやうになるのである。

けれども此事實は、その原因たる行程の媒介を示すことなく、單に結果として言ひ現はされるに過ぎないのである。諸種の價値部分は相異なつた物品（具體物）の價値として、相異なつた使用形態における價値として、換言すれば相異なつた商品體の價値として觀察される場合を除き、それ自體としては質的に相互區別されるものではない。右の如く見た場合の區別は、諸種の價値部分が價値部分として有する性質それ自身に基因するものではないのである。貨幣なるものは凡ゆる商品に共通した等價形態であるから、諸商品の間に存する一切の區別は貨幣に於いて消滅する。五百磅なる貨幣額は、一磅といふ全く同一額面の多數要素から成つてゐる。この貨幣額の存在といふ單純な事實に於いて、五百磅の由來の形跡は消滅に歸し、相異なつた資本成分が生產行程の內部に有してゐる特殊の差異は跡かたもなく消え失せてしまふものであるから、今や四百二十二磅なる前貸資本に等しき元本と七十八磅なる餘剩價値額との概念的形態以外の點には區別は存しないこととなる。例へばG′は一百十磅に等しく、その中一百磅はG（元本）、十磅はM（餘剩價値）であるとしよう。一百十磅なる額の兩成分は、絕對的に同質のものであり隨つて概念上無差別的のものである。如何なる十磅も、それが一百磅なる前貸元本の十分の一であるにしろ、又は此元本に對する十磅なる超過分であるにしろ、いづれにしても常に一百十磅なる總額の十一分の一である。かくて元本と增殖分、資本と餘剩額とは、總額の分數的部分として言ひ現はされることとなる。上例に依れば、總額の十一分の十は元本即ち資本を構成し、十一分の一は餘剩額を構成する。かくの如く、實現され貨幣に言ひ現はされた資本は、その行程の結末に於いては資本關係の無內容的表章を以つて現はれることとなるのである。

勿論、これは W′（＝W＋w）についても同樣であるが、ただ次の一點に區別が見出される。即ちW′に於いてもWとwとは全體に互つて同質なる一商品量の價値比例分に過ぎないが、W′はその直接的起原たるPを指示してゐるに反し、流通から直接に生じて來た形態であるG′に於いては、Pとの直接的關係が消滅してゐるのである。

G′が G……G″ なる運動の結果を言ひ現はす限り、このG′に含まれてゐる元本と增殖分との無內容的な區別は、それが增殖を遂げ產業資本の貨幣表章として固定することなく、寧ろ能動的に貨幣資本として再作用するに至るや否や直ちに消滅する。貨幣資本の循環は決してG′より始まり得るものではなく（尤もG′は今やGとして作用するのであるが）、ただGのみから始まり得るのである。換言すれば、決して資本關係の表章として始まり得るものではなく、ただ資本價値の前貸形態としてのみ始まり得るのである。五百磅が新たに自己を增殖すべく、新たに資本として前貸されるや否や、それは最早復歸點ではなく出發點となる。四百二十二磅なる一資本の代りに、今や五百磅なる一資本が前貸される。即ち從前に比してヨリ多額の貨幣、ヨリ多額の資本價値が前貸されるのであるが、二成分間の關係は消滅に歸する。實際のところ、四百二十二磅の代りに五百磅なる額が原資本として作用したかも知れないのである。

貨幣資本がG′として表現されることは、貨幣資本自身の能動的機能ではなく、寧ろW′の一機能である。單純なる商品流通（一）$W—G$（二）$G—W_2$ に於いても、Gは第二取引 $G—W_2$ に入る迄は能動的に作用するものではない。それがGとして表現されることは、第一取引の結果に過ぎぬのであつて、この取引に依り初めてそれはW_1の轉化された形態となるのである。G′に含まれてゐる資本關係、即ち資本價値たる資格におけるG′の一部と價値增殖分たる資格における他の部分との關係は、G……G″ なる循環の間斷なき反復を通してG′が二つの流通に分割される限り、機能上の意義を與へられるものであることは言ふ迄もない。この場合、資本流通と餘剩價値流通、隨つて資本價値と價値增殖

分とは、單に量の上のみではなく質の上にも區別される所の機能を盡す。卽ちGはgに比して異なつた機能を盡すのである。然しそれ自體として觀察するならば、G……G′なる形態は資本家の消費を含むものではなく、明示的に言へばただ資本の自己增殖と蓄積とを言ひ現はすのみである。元來資本の蓄積なるものは、先づ、絕えず新たに前貸される貨幣資本の週期的增殖といふ事實に依つて言ひ現はされるものであつて、玆では專ら斯かる方面の蓄積のみについて謂ふのである。

G′＝G＋g は資本の無內容的な形態であるとはいへ、同時に又實現された形態における貨幣資本であり、貨幣を生んだ貨幣としての貨幣資本である。だがこれは、第一段階 G—W<A/Pm に於ける貨幣資本の機能からは區別さるべきものである。この第一段階におけるGは貨幣として流通する。それは貨幣狀態における場合を除く以外、貨幣機能を盡し得るものでなく、商品として自己に對するPの諸要素（A及びPm）に換へられ得るものでない故にのみ、貨幣資本として作用するのである。この流通取引に於いては、それはただ貨幣としての機能を盡すに過ぎない。けれども此取引は資本價値流通の第一段階であるから、同時に又、購買商品たるA及Pmの特殊使用形態を通して貨幣資本の機能となるのである。

反對に、資本價値Gとそれに依つて造られる餘剩價値gとから成るGは、自己增殖を遂げた資本價値を、資本の總循環行程の目的及結果を、機能を言ひ現はすものである。G′が此結果をば貨幣形態を以つて、換言すれば實現された貨幣資本として言ひ現はすといふ事實は、貨幣資本の貨幣形態に基くものではなく、反對にその資本性質に基くものである。換言すれば、資本が貨幣形態を以つて流通行程を開始し、貨幣形態を以つて前貸されたといふ事實に基くのである。既に說いた如く、貨幣形態への再轉化は、商品資本W′の一機能であつて貨幣資本の機能ではない。ところでG′とGとの差について言へば、この差gは、Wの增殖分たるwの貨幣形態に過ぎない。W′が W＋w に等しかつた故にのみ、G′は G＋g に等しいのである。卽ちこの差と、餘剩價値に對する資本價値（餘剩價値の母體）の關係とは、此等の兩價値分がG′（此等の價値分を各異なつたものとして相對立せしめ、かくしてまた獨立した別個の機能に使用し得べきものとする所の貨幣額）に轉化される以前、すでにW′の內に存在し且つ言ひ現はされてゐるのである。

G′はW′の實現された結果に外ならない。W′及G′は、自己增殖を遂げた資本價値の相異なつた形態（一方は商品形態、他方は貨幣形態）に過ぎぬものであつて、この自己增殖を遂げた資本價値たる點は雙方に共通してゐるのである。W′とG′とは、いづれも實現された資本である。なぜならば、資本價値そのものはこの場合、己れ自身とは異なつた果實としての餘剩價値と共に存在するからである。尤もこの關係は、一つの貨幣額又は商品價値を構成する二部分間の關係の無內容的形態に依つてのみ言ひ現はされることは事實である。けれども自己の產物たる餘剩價値に關係させ且つそれから區別して考へた資本の表章として、自己增殖を遂げた價値の表章として見れば、G′とW′はいづれも同一のものであり、同一の事物を言ひ現はすものであつて、ただそれを異なつた形態に言ひ現はす點が異なるのみである。一方は貨幣資本、他方は商品資本として區別されるものではなく、單に貨幣及び商品として區別されるに過ぎない(8)。G′とW′とは自己增殖を遂げた價値を表現する限り、資本たる實を示した資本を表現する限り、生產資本の機能の結果を言ひ現はすに止まる。卽ちそれは、資本價値が價値を生む唯一の機能の結果を言ひ現はすに過ぎないのである。G′とW′とに共通する所のものは、一方は貨幣資本、他方は商品資本として、いづれも資本の存在樣式になつてゐるといふ事實である。一方は貨幣形態を採つた資本であり、他方は商品形態を採つた資本である。卽ち兩者を區別する所の特殊の機能は、貨幣機能と商品機能との間の區別以外のものではあり得ない。商品資本なるものは、資本制生產行

程の産物であり、且つこの起原を指示してゐる。隨つてその形態は貨幣資本に比すればヨリ合理的であつて、しかく無內容的のものではないのである。蓋し總じて貨幣なるものは、商品の凡ゆる特殊使用形態を消滅せしむるものであるが、それと同樣に、貨幣資本に於いては資本制生產行程の一切の痕跡が消滅してゐるからである。G′がその奇怪なる形態を失ふに至るのは、G′そのものが商品資本として作用する所にのみ、即ちそれが一生產行程の直接的產物であつて、かかる產物の轉化した形態ではない所にのみ、換言すれば貨幣材料それ自身の生產に於いてのみ行はれる事である。例へば金の生產に於ける公式は、$G—W \begin{smallmatrix}A\\P_m\end{smallmatrix} \cdots\cdots P \cdots\cdots G'$ (G+g) となるであらう。この場合、G′は商品生產物たる機能を盡くす。蓋し貨幣資本たる最初のGとして金の生產要素の爲に前貸された額よりも多量の金が、Pに依つて供給されるからである。かくて、或る貨幣額の一部を同じ貨幣額の他の部分の母體として現はれしむる所の G……G′ (G+g) なる言ひ現はしの不合理は、玆に消滅することとなるのである。

(四) 總循環

流通行程がその第一段階 $G—W \begin{smallmatrix}A\\P_m\end{smallmatrix}$ の終了後、Pに依つて中絕され、而して市場で購買した商品A及P_mがこのPのもとに生產資本の素材的竝びに價値的成分として消費されることは、我々の既に見た所である。この消費の產物は素材の上にも價値の上にも變化を受けた新たなる商品W′である。中絕された流通行程 G—W は、W—G に依つて補充されねばならない。然るにこの第二の終結的流通段階の負擔者として現はれるものは、素材の上にも價値の上にも第一のWとは異なつた商品W′である。即ち流通列は (一) $G—W_1$ (二) $W'_2—G'$ なる形に現はれる。而してこの第二段階のもとにPの機能に依つて流通の中絕が生じ、生產資本Pの存在形態であるWの要素を以つてW′が生產される

結果、第一のW_1はヨリ大なる價値を有し、而して使用形態を異にした他の商品W'_2に依つて代位される。しかるに資本(第一卷、第四章、第一節)の採る第一の現象形態 G—W—G′(分解して言へば第一に G—W_1 第二に W_1—G′)に於いては、同一の商品が二回現はれて來るのであつて、第一段に於いて貨幣から轉化され、第二段に於いてヨリ多額の貨幣に再轉化されるものは、いづれも同一の商品である。かかる本質的の差異あるに拘らず、第一段に於いては貨幣が商品に轉化され、第二段に於いては商品が貨幣に轉化されるといふ事實、換言すれば第一段に支出された貨幣が第二段に回流して來るといふ事實は、兩流通に共通してゐる所である。一方には、貨幣が起點に回流するといふこと、他方には又、回流貨幣が前貸貨幣を超過するといふこと——此等の兩事實は、雙方に共通する所であつて、この意味に於いて G—W……W′—G′ は一般的公式 G—W—G′ の中に含まれてゐるのである。

更らに流通の兩轉形たる G—W に於いても W′—G′ に於いても、同時に與へられてゐる同じ大さの價値存在が相互對立し代位されるといふ結論が生じて來る。價値變化はただPなる轉形のもとにのみ、生產行程のもとにのみ生ずるのである。かくして生產行程なるものは形式上のみの流通轉形に對立した資本の現實的轉形として現はれることとなる。

所で總運動 $G—W \begin{smallmatrix}A\\P_m\end{smallmatrix} \cdots\cdots P \cdots\cdots W' (W+w)—G' (G+g)$ を考察して見よう。資本はこの場合、互ひに關係し制限する一列の諸轉化を、それ〴〵一つの總行程の各段階たるべき一列の諸轉形を通過する所の一價値として現はれる。此等の段階の中、二つは流通部面に屬し、一つは生產部面に屬する。いづれの段階に於いても、資本價値は異なつた特殊の機能を伴ふ所の異なつた狀態を採るのである。前貸價値は、この運動の內部に於いて單に保存されるのみではなく、また發育し增大する。最後に結末の段階に入つたとき、

この價値は總行程の開始當時に有してゐた形態に復歸する。かくして、この總行程は循環行程となるのである。

資本價値がその流通段階のもとに採る二つの形態は、貨幣資本及び商品資本なる形態であり、生産段階のもとに採る形態は生産資本なる形態である。總循環の經過中に此等の形態を採つては捨て、而して其一つを採る毎にそれに照應した機能を盡くす所の資本は、卽ち産業資本である。（玆に産業と謂ふのは、この資本が資本主義的に經營される一切の生産部門に亙るとの意味に解すべきである）。

されば、玆に謂ふ貨幣資本、商品資本、生産資本なる名稱は、相互獨立し分離した營業部門たるべき機能を盡くすところの、互ひに獨立した資本種類を示すものではない。此等の資本形態はただ産業資本が相次いで採る機能上の特殊の諸形態を示すに過ぎないのである。

資本の循環は、その各異なつた段階が滯りなく相互連交する場合にのみ順當に進行する。第一段 G—W に於いて資本が停滯するとすれば、貨幣資本は硬結して退藏貨幣となり、生産部面に於いて停滯するとすれば、一方には生産機關が作用せず、他方には勞働力が使用されないこととなる。また若し最終段階 W′—G′ に於いて資本が停滯するとすれば、商品は販賣されずして滯積し、かくして流通の進行を阻止するやうになる。

他方に於いて、循環それ自體の作用に依り、資本が一定の期間個々の循環部面に停滯することとなるは、當然の事實である。産業資本はその各段階に於いて或時は貨幣資本、或時は生産資本、或時は又商品資本なる一定の形態に拘束される。而して此等の各形態に照應した機能を盡くした後でなければ、それは新たなる轉化段階に入り得べき形態を受くるものではないのである。この事實を明瞭にする爲、上例に於いては生産段階のもとに造り出される商品量の資本價値が、最初貨幣として前貸された價値の總額に等しいと假定した。換言すれば、貨幣として前貸された資本價値は一時に全部、一つの段階から次ぎの段階に入るものと假定したのである。然るに、不變資本の一部たる嚴密の意義における勞働要具（例へば機械）は、同一の生産行程が幾回か反復される毎に絶えず新たに役立つものであり、隨つてその價値はただ斷片的にのみ生産物に移轉されることとなるは、曩に（第一卷、第四章）說いた通りである。この事實が如何なる程度まで資本の循環行程を變ぜしむるかは後に說くとして、玆には次の事實を述ぶれば十分である。

——上例に於いて、四百二十二磅なる生産資本の價値は、工場建物、機械等の平均的に計算した磨滅分を含むのみであつた。換言すれば、一萬六百斤の棉花を一萬斤の綿絲に轉化せしめる際、此等の建物や機械などが一週六十時間の紡績行程の生産物たるこの綿絲に移轉する所の價値分を含むのみであつた。隨つて三百七十二磅なる前貸不變資本が轉化されてゆく生産機關の中、勞働要具たる建物や、機械などは、週拂の賃料を以つて市場で賃借されたかの如く作用するに過ぎなかつたのである。だが、この事實は、問題の上に何等の影響をも及ぼすものではない。一定年間に消費される購買勞働要具の全價値を綿絲に移轉せしむるには、この期間に含まれる週の數を一週に生産される一萬斤の綿絲量に乘ずれば、それでいいのである。かかる場合、前貸貨幣資本は生産資本Pとして作用し得るに先だち、豫め勞働要具に轉化されて居らねばならず、隨つて G—W なる第一段階を通過して居らねばならぬことは明かである。同樣に上例に於いて、生産行程の持續中綿絲に合體した四百二十二磅なる額の資本價値は、一萬斤の綿絲の完成に先だちその價値成分として W′—G′ なる流通段階に入り得るものでないことも明かである。綿絲はそれが製造される前に販賣され得るものではないからである。

一般的公式についていへば、Pの生産物は生産資本の要素とは異なつた物質體と見做される。卽ちそれは生産行程から分離された存在を有し、生産要素の使用形態とは異なつた使用形態を有する對象物と見做されるのである。而し

て生産行程の結果が物の形を採つて現はれる限り、玆に說く事は常に行はれる所であつて、生産物の一部が更らに新たなる生産の要素となる場合でさへ、これが例外となるものではない。例へば、穀物は種子としてそれ自身の生産に役立つものであるが、生産物は穀物のみから成り、穀種と共に使用される勞働力や、器具や、肥料などの如き諸要素とは異なつた形態を有してゐる。然るに生産行程の結果が新たなる物的生産物となることなく、商品となることなき獨立した産業部門もある。かかる産業部門のうち經濟上重要なるものは、人と貨物との運搬を目的とする嚴密の意義における運輸業の如き、又は單に報知（書信、電信等）の傳達のみを目的とする通信業の如き、交通上の産業のみである。

アー・クブローヴは(六)これについて曰く、『製造業者は先づ物品を生産して然る後その消費者を求め得る。〔彼れの生産物は完成せるものとして生産行程から放出された後、この行程より分離された商品として流通に入るのである〕。かくの如く、生産と消費は空間的にも時間的にも分離された二つの行爲として現はれる。新たなる生産物を造り出すことなく、ただ人と物とを移動せしむるに止まる運輸業に於いては、この二つの行爲は同時に行はれることとなる。運輸業の奉仕〔場所の變更〕は、生産された瞬間に消費されなければならない。されば鐵道が顧客を求め得る範圍は、高々線路の兩側五十ヴェルスト（五十三粁）の所に限られてゐるのである。』

（六）アー・クブローヴ著『鐵道經濟』（モスクヴァ、一八七五年刊）第七五及七六頁(ラ)。

人の運搬と貨物の運搬とを問はず、いづれにしても結果として現はれるものは場所的存在の變更であつて、例へば綿絲がその生産地たるイギリスに保存されないでインドに輸送されるといふ如きである。

而して運輸業なるものは、かかる場所的變更そのものを販賣するのである。その齎らす利用效果は、運輸の行程（運輸業の生産行程）と不可分的に結合されてゐるものであつて、人と貨物は運輸機關と共に移動する。而して斯かる移動、斯かる場所的運動こそ、運輸機關に依つて作用する所の生産行程となるのである。その利用效果は生産行程の持續中にのみ消費し得るものであつて、この行程を離れた使用物として存在するものではない。換言すれば、生産後に初めて商業上の取引物件として作用し、商品として流通する所の使用物として存在するものではないのである。けれども この利用效果の交換價値は、他の總ての商品の交換價値と同樣に、消費された生産要素（勞働力及び生産機關）の價値と運輸業に使用された勞働者の餘剩勞働に基く餘剩價値との和に依つて決定される。更らにその消費についても他の商品におけると全く同樣である。若しそれが個人的に消費されるとすれば、その價値も同時に消滅する。また若し生産的に消費され、利用效果それ自身が運輸品生産上の一段階たるに至るとすれば、その價値は追加價値として運輸品そのものの上に移轉される。かくて運輸業の公式は $G—W\begin{cases}A\\P_m\end{cases}\cdots\cdots P—G'$ となる。蓋し運輸業に於いて購買され消費されるものは生産行程それ自身であつて、生産行程より分離し得べき生産物ではないからである。卽ちこの公式は、貴金屬生産の公式と殆んど同一の形態を有するのであつて、ただ運輸業における G' は生産行程に依つて生じた利用效果の轉化した形態であるに反し、貴金屬の生産に於ける G' は、生産行程に依つて生じ生産行程から放出された金又は銀の現物形態であるといふ一點が異なるだけである。」

餘剩價値又は餘剩勞働の占有のみではなく生産も同時に資本の機能であるとの方面から見れば、産業資本なるものは資本の唯一の存在樣式である。かくて産業資本なるものは、生産に資本制的の性質を附與するものとなり、その存在は資本家と賃銀勞働者との階級對立を含むこととなるのである。この資本が社會的生産を支配する程度に比例して勞働行程の技術と社會的組織とは革命され、かくして社會の經濟的歷史的類型も亦革命されることとなる。産業資本

の生ずる以前、すでに過去に屬し又は現に衰滅しつつあつた社會的生産狀態の眞中に出現した他の諸種の資本は、單に産業資本の下に從屬せしめられ、産業資本に從つてその機能の機構を變更するのみではなく、尙ほまた産業資本の基礎上にのみ運動するものであつて、この基礎と共に生滅し存亡するものとなるのである。特殊の營業部門の負擔者たる機能を以つて今日尙ほ産業資本と竝存してゐる所の貨幣資本及び商品資本は、産業資本が流通部面の內部に於いて或時は採り或時は棄てる種々異なつた機能形態の、社會的分業に依つて獨立化し偏面的に發達した存在樣式に外ならないものである。

G……G′なる循環は、一方に一般的の、商品流通と錯交してゐる。それは一般的の商品流通から出で、一般的の商品流通に入るものであつて、この流通の一部を成してゐるのである。他方に又、この循環は個々の資本家から見れば資本價値それ自身の獨立した一運動を構成するものである。この運動は、一部的には一般的商品流通の內部に行はれ、一部的にはその外部に行はれるものであつて、而も常に獨立した性質を保持してゐる。これ畢竟、左の諸理由に因る結果である。第一に、流通部面に行はれるこの運動の兩段階 G—W 及び W′—G′ は資本運動の異なつた段階として機能的に限定された性質を有してゐる。卽ち G—W に於いては、W は勞働力及び生産機關として素材的に決定されて居り、W′—G′ に於いては、資本價値に餘剩價値を加へた額が實現される。第二に、生産行程 P は生産的消費を含む。第三に、貨幣がその起點に復歸するといふ事實は、G……G′ なる運動をばそれ自身に於いて完結した一つの循環運動たらしめる。

かくの如く、個々の各資本は二つの流通段階 G—W 及び W′—G′ を通して一般的商品流通の一要素となり、貨幣又は商品としてこの流通の內部に作用し連結される。かくして、それは商品界における一般的轉形列の一節ともなるのである。他方に又、各個の資本は一般的流通の內部に於いて生産部面を一つの經過段階とする所のそれ自身の獨立した循環を通過する。この循環に依つて、各個の資本は出發當時におけると同一の形態を採つて起點に復歸するのである。かかる循環は生産行程における現實的の轉形を含むものであつて、これを通過しつつある間に、各個の資本は己が價値量を變更する。それは單に貨幣價値として復歸するのみではなく、更らに增大し發育した貨幣價値としても復歸するのである。

最後に、G—W……P……W′—G′ をば、後に攻究すべき資本の循環行程の他の諸形態とは異なつた特殊の形態として考察するならば、それは左の特徵を有するものであることが知られる。

（一）この循環は貨幣資本の循環として現はれる。なぜならば、貨幣形態における産業資本が、貨幣資本としての産業資本が、その總行程の起點となり復歸點となつてゐるからである。この場合、貨幣は貨幣として支出されるものではなく、前貸されるに過ぎず、換言すれば資本の貨幣形態たり貨幣資本たるに過ぎない事は、右の公式それ自身の上に示されてゐる所である。この公式は更らに、資本運動の決定的な自己目的となるものが交換價値であつて使用價値ではないといふ事實をも言ひ現はす。價値の貨幣形態は獨立した明瞭の現象形態であるから、起點も終點も共に現實的の貨幣から成る所の G……G′ なる流通形態は、資本制生産の起動動機たる貨殖をば極めて明白に言ひ現はしたものとなる。生産行程なるものは、貨殖上の不可避的な中間段階として、必然の惡として現はれるに過ぎない。「されば こそ資本制生産方法に立脚する所の如何なる國も、生産行程の媒介に依らずして貨殖を行はんとする詐僞的な計畫を以つて週期的に襲はれることとなるのである。」

（二）この循環に於いては、生産段階たる P の機能は G—W—G′ なる單純流通の媒節たるに過ぎぬ二つの流通段

階 G—W……W′—G′ の中絶を意味する。循環行程そのものの形態からいへば、生産行程なるものは、形式上明かに資本制生産方法に相應したものとして、前貸價値增殖上の單なる手段として、換言すれば生産の自己目的たる致富それ自身として現れるのである。

（三）段階列は G—W に依つて開始されるものであるから、流通の第二節は W′—G′ となる。換言すれば、起點は增殖さるべき貨幣資本Gであり、終點はG′に依つて示される增殖した貨幣資本 G+g である。Gは實現された資本として、その子體たるgと共にこの增殖した貨幣資本の中に位置を占めるのである。以上の點に於いて、Gの循環は他の二つの循環なるP及W′の循環から區別される。而してこの區別は、二つの方面から與へられるのである。第一にGの循環の兩極は貨幣形態であるといふ事。蓋し貨幣なるものは、價値の獨立した明瞭な存在形態であり、獨立した價値形態を採つた生産物の價値であつて、商品の使用價値の痕跡は玆に悉く消失してゐるからである。第三に、P…… P なる形態は必然的に P……P′ (P+p) となるものではなく、また WA……W′ なる形態に於いては、總じて兩極間の何等の價値差も認められない。かくの如く、G……G′ なる公式は、一方に、資本價値が起點となり、增殖した資本價値が復歸點となる結果、資本價値の前貸は全運動の手段として現はれ、その增殖は目的として現はれるといふ事實を特徴とし、他方に又、この關係は獨立した價値形態である所の貨幣形態に依つて言ひ現はされ、かくして貨幣資本なるものは貨幣を生む貨幣として言ひ現はされるといふ事實を特徴とするに至るのである。價値に依る餘剩價値の生産は、單に此行程のアルファ及びオメガとして言ひ現はされるのみではなく、また明かに光り輝く貨幣形態に依つても言ひ現はされるのである。

（四）G—W の補充的な結了的な段階 W′—G′ の結果たる實現された貨幣資本G′は、その第一循環の開始當時におけると同一の形態を採るものであるから、それは循環より出づるや否や、增大し蓄積された貨幣資本として、G+g に等しきG′として、同一の循環を再開始することが出來る。而して循環の反復中gの流通がGのそれから分離されるといふ事は、少なくとも G……G′ なる形態に依つては言ひ現はされるものではないのである。故に、貨幣資本の循環なるものは、その一回切りの形態について觀察すれば、價値增殖竝びに蓄積上の行程を言ひ現はすに過ぎない。其處に行はれる消費は $G—W \overset{A}{<} P_m$ の示す如く單に生産的消費として言ひ現はされるに過ぎないのであつて、かかる消費のみが個別的資本の右の循環中に含まれてゐるのである。G—A はこれを勞働者の側から見れば、A—G 若しくは W—G であつて、勞働者の個人的消費を媒介する流通 A—G—W（Wは生活資料）の第一段となるのである。第二段 G—W は最早、個別的資本の循環の領域に屬するものではない。而もそれは、この循環に依つて誘導されその前提條件となるのである。蓋し勞働者は、資本家の搾取し得べき材料として絶えず市場に存在するためには先づ生活することを要し、個人的消費に依つて生命を維持しなければならないからである。而も斯かる消費そのものは、この場合、資本に依る勞働力の生産的消費に對する條件としてのみ前提されるものであつて、勞働者が彼れの個人的消費に依り自己を勞働力として保存し再生産するといふ意味に於いてのみ問題となるのである。然るに右の循環に入る嚴密の商品P_mは、生産的消費の榮養料たるに過ぎない。A—G なる取引は、勞働者の個人的消費を媒介し、生活資料が彼れの血となり肉となる轉化を媒介するものである。勿論、資本家も亦、資本家たる機能を盡くすためには生存して居らねばならない。隨つて又、生活し消費することを要するのである。然し此目的のためには、實際の所ただ勞働者として消費しさへすればいいのであつて、それ以上の事は流通行程の斯かる形態に於いては假定されて居らないのである。否、形式上から見れば、それさへも言ひ現はされて居らない。蓋し右の公式は、增大した貨幣資本として即時に再作

用し得べき一結果たるG′を以つて終了してゐるからである。

W′—G′ は直接にW′の販賣を含む。だが一方の側における W—G、即ち販賣は、他方の側における G—W、即ち購買である。而して商品なるものは、究竟に於いてはただ使用價値を目的としてのみ購買されるものであつて、購買品の性質に從ひ個人的たると生産的たるとの差異はあるにしろ、いづれにしても結局は消費行程（中間的販賣のことは暫く措き）に入るのである。けれどもこの消費はW′を生産物とする個人的資本の循環に入るものではない。この生産物は販賣さるべき商品として、循環の内部から放出される。それは明かに、他人の消費を目的として生産されたものである。さればこそ、G—W……P……W′—G′ なる公式を根柢とするマーカンチリズムの代辯者たちは、次の主張について長々と說教を試みることが見出されるのである。即ち個々の資本家は、勞働者たる資格に於いてのみ消費すべきであり、資本主義國民はその商品の消費、總じてまた消費行程をば、他のヨリ愚かなる國民に一任し、反對に生産的消費の方を己が終生的の任務としなければならないといふ主張がそれである。この說教は形式上にも內容上にも、かの聖父たちに依つて與へられた類似の苦行的な訓戒を屢々想起せしめるものである。

かくの如く、資本の循環行程は、流通と生産との合成であつて、此等の兩者を含んでゐる。G—W 及 W′—G′ なる二つの段階が流通上の行程である限り、資本の流通は一般的商品流通の一部となるのである。だがこれを、流通部面と同時に生産部面をも含む資本循環の機能的に限定された分節として、段階として觀察するとき、資本は一般的商品流通の內部に於いてそれ自身の循環を行ふこととなる。一般的の商品流通は、その第一段に於いては、資本が生産資本として作用し得べき形態を與へることに役立ち、第二段に於いては、資本循環の更新を不可能ならしむる商品機能を削除する事に役立つ。それと同時に、資本は自己の循環をば增殖分たる餘剩價値の流通から分離すべき可能を與へられるのである。

要するに貨幣資本の循環なるものは、産業資本の循環の最も偏面的な、隨つて最も顯著にして特徵的な現象形態となるものであつて、産業資本の目的たり起動動機たる價値の增殖（貨殖及び蓄積）は、かくして一目瞭然的に表現される。即ちヨリ價高く賣る爲に買ふといふ形態に表現されるのである。第一段階が G—W であるため、生産資本の成分は商品市場に由來することとなるといふ事實、總じてまた資本制生産行程なるものは流通即ち商業に依存するといふ事實も、同樣に明かとなつて來る。貨幣資本の循環は單に、商品生産を意味するのみではない。この循環それ自身は寧ろ流通に依つてのみ成立し、流通を前提するものであつて、この點は流通に屬すべきGなる形態が、前貸資本價値の最初の純粹な形として現はれるといふ事實の中に既に含まれてゐる。かかる事實は、他の二つの循環形態に於いては行はれざる所である。

貨幣資本の循環は絕えず前貸價値の增殖を含む限り、常に産業資本の普遍的表章となつてゐる。P……P に於いては、資本の貨幣表章は生産要素の價格としてのみ、計算貨幣に言ひ現はされた價値としてのみ示されるものであつて、それはこの形態を以つて帳簿に記入されるのである。

一つの營業部門から他の營業部門に移動する場合にしろ、又は産業資本が營業から引上げられる場合にしろ、いづれにしても新たに出現した資本が先づ貨幣として前貸され、然る後同じ形態を以つて回收される限り、G……G′は産業資本の循環の特殊形態となる。この形態は最初貨幣形態を以つて前貸された餘剩價値の資本機能をも含むものであつて、餘剩價値がその産源以外の營業に於いて作用する場合、最も顯著に現はれることとなるのである。G……G′は

一資本の最初の循環ともなり最終の循環ともなり得るものである。それは社會的總資本の形態と見做され得る。それは又、新たに放下さるべき――貨幣形態を以つて新たに蓄積された資本としてにしろ、又は一つの生産部門から他の生産部門に移轉する目的を以つて全く貨幣に轉化される所の舊資本としてにしろ――資本の形態ともなるのである。

貨幣資本なるものは絶えず凡ゆる循環に含まれてゐる形態であるが、かかる形態としてそれは餘剰價値を生産する所の資本分たる可變資本のために右の循環を行ふのである。勞銀前貸の通例の形態となるものは、即ち貨幣を以つてする支拂である。この行程は短期の間斷を以つて絶えず更新されねばならない。なぜならば、勞働者はその日暮し的の生活をしてゐるからである。かくて資本家は絶えず貨幣資本家として、また彼れの資本は貨幣資本として、勞働者に對立せねばならなくなつて來る。この場合には、生産機關の購買や生産上に充用すべき商品の販賣におけるとは異なり、直接又は間接の差引計算を行ひ得ないのである。(此等の場合に於いては、貨幣資本の大部分は事實上ただ商品形態のもとにのみ存在し、貨幣はただ計算貨幣なる形態のもとにのみ存在するものであり、而して最後に、差引計算についてのみ貨幣は現金として使用されるのである)。他方に、資本家は可變資本に基く餘剰價値の一部を個人的消費のために支出する。この消費は小賣商業に關聯するものであつて、如何なる迂路を經るにしても結局は現金で、餘剰價値の貨幣形態を以つて行はれるものである。この餘剰價値部分の大小如何は、問題の上に何等の變更をも與へるものではない。可變資本は絶えず新らたに、勞銀に投じた貨幣資本（G―A）として現はれ、gは資本家の個人的欲望の充足に支出さるべき餘剰價値として現はれる。即ち前貸可變資本價値としてのGと、その增殖分としてのgとは、いづれも貨幣形態のもとに支出さるべきものであつて、この目的上必然的に貨幣形態を固守することとなるのである。

G′（＝G＋g）なる結果を伴ふ公式 G―W……P……W′―G′ は、その形態の中に欺瞞を含み、幻惑的性質を有してゐる。この性質は、前貸價値と價値增殖分とが、その普遍的等價形態(8)たる貨幣として存在するといふ事實に基くものである。右の公式に於いて重きを置かれる點は、價値の增殖といふ事實ではなく、寧ろ價値增殖行程の貨幣形態である。換言すれば、最初前貸されたものよりも多額の貨幣價値が終極に於いて流通内から引き上げられるといふ事實即ち資本家の所有に屬する金銀量の增殖といふ事實が强調されてゐるのである。謂ゆる貨幣制度說なるものは、專ら流通内にのみ行はれる一運動である無内容的の形態 G―W―G′ を言ひ現はしたものに過ぎない。隨つてこの說に依る時は、(一) G―W (二) W―G′ なる兩取引は、後ちの取引に於いてWは價値以上に販賣され、これがためその購買に依つて投入されたよりも多額の貨幣が流通の内部から引き上げられると見るの外は說明し得ないのである。反對に、流通の唯一の形態として固定した G―W……P……W′―G′ は、發達したマーカンチリズムの根柢となつてゐる。蓋しこの說に於いては、單に商品流通のみではなく、商品生産も亦必要なる要素と認められるからである。

G―W …. P……W′―G′ の幻惑的な性質と、それに伴ふ幻惑的な解釋とは、この形態が流動的な不斷に更新さるべきものと見做されず、一回切りのものとして固定され、かくして循環の諸形態の一つではなく唯一の形態と見做されるとき、存在するやうになるのである。だがこの形態は、他の諸形態をも指示してゐるのである。

第一に、この全循環は生産行程そのものの資本制的性質を前提するものであつて、かかる生産行程と、それに依つて決定される特殊の社會狀態とを基礎とするものである。G―W は $G—W \leftarrow \begin{matrix} A \\ P_m \end{matrix}$ に等しい。けれども G―A は賃銀勞働者の存在を假定する。隨つてそれは、生産機關が資本の一部として存在する事、かくして又、勞働行程と價値增殖行程との合成たる生産行程が既に資本の機能として存在する事を假定するものである。

第二に、G……G′ が反復されるとき、貨幣形態への復歸は、第一段階における貨幣形態と同樣に消失的のものとなる。G—W は消失してPに位置を讓る。貨幣前貸の間斷なき反復と、前貸貨幣の間斷なき復歸とは、循環の消失的な段階として現はれるに過ぎない。

第三に、循環公式は次の如く反復される。

$$\overbrace{\overbrace{G—W\ldots\ldots P\ldots\ldots W'—G'}.\ \overbrace{G—W\ldots\ldots P\ldots\ldots W'—G'}.\ \overbrace{G—W\ldots\ldots P}}\ldots\ldots etc.$$

循環の第二次反復の際、Gの第二循環が完了するに先だつて既に P……W′—G′. G—W……P なる循環が出現してゐるのである。隨つてその後に生ずる循環は、すべて P……W′—G—W ……P なる形態を採るものと考へ得るのであつて、第一循環の第一段 G—W は、生產資本の不斷反復的な循環の消失的準備となるに過ぎない。而して此事實は實際のところ、初めて貨幣資本の形で放下された產業資本の場合に見受けられる所である。

他方に又、Pの第二循環が完了する以前に W′—G′. G—W……P……W′ (略して W′……W) なる第一循環が、商品資本の循環が通過される。かくして第一の形態は既に他の二形態を含むこととなり、單なる價値表章といふ意味ではなく、普遍的等價形態たる貨幣に依る價値表章といふ意味に解した貨幣形態は消え失せてしまふのである。

最後に、初めて G—W …… P……W′—G′ なる循環を通過するところの、新たに生じた個別的の一資本を採つて見るに、G—W はこの資本の通過すべき最初の生產行程に對する準備段階となり、先驅となるものである。即ちこの G—W なる段階は豫め存在するものではなく、寧ろ生產行程に依つて與へられ又は條件づけられるのである。だがこれは、かかる個別的資本についてのみ言ひ得る事である。資本制生產方法の存在を假定する限り、隨つて資本制生產に依つて決定される社會狀態の內部について言へば、產業資本の循環の普遍的形態となるものは卽ち貨幣資本の循環である。要するに資本制生產行程が先行條件として前提されるのであつて、この事は新たに放下された一つの產業資本が貨幣資本として通過する第一循環の內部については言ひ得ないとしても、その外部に於いては確かに行はれる所である。而して斯かる生產行程の不斷の存在は、P……P なる循環の不斷の更新を豫想する。かく資本制生產行程が先行條件として前提されるといふ事は、第一段階 G—W$^{A}_{P_m}$ の內部にも既に現はれてゐる。蓋しこの段階は、一方に賃銀勞働者階級の存在を前提すると同時に、他方に生產機關の購買者にとつて G—W である所のものは、その販賣者から見れば W′—G′ であるから、W′は商品資本を、隨つて又資本制生產の結果としての商品そのものを前提し、かくして更らに生產資本の機能をも前提することとなるからである。

第二章　生産資本の循環

生産資本の循環は P……W′—G′—W……P なる一般的公式を有するものである。この公式は生産資本の週期的に更新される所の機能たる再生産を意味する。換言すれば、價値増殖上の再生産行程としての生産行程を意味するものである。それは生産たるのみではなく、また餘剰價値の週期的再生産でもある。それは生産形態を採つた産業資本の機能である。而してこの機能は一回切りのものではなく、週期的に反復されるものであつて、同じ起點からの再開始を假定するものである。W′の一部は、それが商品として出で來た同じ勞働行程の中にまた直接生産機關として入り得るものであつて、これは産業資本の若干の放下部門に行はれる所である。だが此事實は單に、かかる商品部分の價値が貨幣又は貨幣表章に轉化されることを省約するに止まる。或はこの轉化に對して、計算貨幣としての獨立した表章を附與するに過ぎないのである。かかる價値分は流通の内部に入るものではない。かくして、流通行程に入ることなくして生産行程に入るところの價値が存することとなるのである。資本家が餘剰生産物の一部として現物のまま消費する所のW′部分についても、矢張り同樣である。けれどもこの事實は、資本制生産にとつては些々たる問題であつて、高々農業についてのみ考慮に入る所である。

この形態については、一目瞭然たる二つの事實がある。

（一）第一形態 G……G′ に於いては、Pの機能たる生産行程は貨幣資本の流通を中絶せしむるものであつて、その兩段階たる G—W と W′—G′ との媒介者として現はれるのみであるに反し、この場合に中絶を與ふるものは、寧ろ産業資本の總流通行程であり、この資本が流通部面に經驗する所の全運動である。かくてこの運動は、起點として循環を開始する生産資本と、終點として同一の形態（再開始なる形態）のもとにこれを結了する所の生産資本との間の媒介たるに止まるのである。嚴密の意義に於ける流通は、週期的に更新され以つて不斷に連續する所の再生産の媒介として現はれるに過ぎない。

（二）總流通は、貨幣資本の循環の場合有してゐた形態とは反對の形に表現される。價値決定のことは暫く措き、貨幣資本の循環における總流通は、G—W—G（G—W. W—G）であつた。今やそれは、價値決定のことは同樣に暫く措くとして、W—G—W（W—G. G—W）となり、隨つて單純なる商品流通の形態となるのである。

（一）單純なる再生産

所で先づ、流通部面に於いて兩極 P……P 間に進行する所の行程 W′—G′—W を考察して見よう。

この流通の起點となるものは商品資本W′（＝W＋w＝P＋w）である。商品資本の機能 W′—G′（卽ちW′の中に含まれ、今や商品部分Wとして存在する所の資本價値Pと、このW′の中に含まれ、同一なる商品量の部分として存在する所の、wなる價値を有する餘剰價値との實現）は、循環の第一形態について述べた際攻究した通りである。けれどもこの攻究に於いては、如上の機能は中絶した流通の第二段を構成し、全循環の終末階段を構成してゐた。今やそれは循環の第二段たると同時に第一段ともなるのである。第一循環はG′を以つて終了し、而して此G′は最初のGと同じく新らたに貨幣資本として第二循環を開始し得るものであるから、G′の中に含まれるGとg（餘剰價値）とが共に同一の軌路を辿るか、それとも各別個の軌路を進むかといふことは、差當り考察する必要がなかつたのである。かかる考

察は、進んで第一循環の更新を究める場合にのみ必要とされる所であつた。然るに生産資本の循環の攻究に於いてはこの問題の確定が必要となつて來るのである。なぜならば、生産資本の第一循環の決定といふ事が既にこの點に懸つて居り、且つ生産資本に於ける W′—G′ は G—W に依つて補充さるべき、流通の第一段として現はれるからである。上記の公式が單純なる再生産を代表するか、それとも規模の擴大された再生産を代表するかといふ事は、この問題の決定の如何に懸ることであつて、その如何に從ひ循環の性質が異なつて來るのである。

そこで先づ、生産資本の單純再生産を採つて見よう。この場合、條件は第一章に假定したところと異なることなく商品は價値通りに賣買されると假定するのである。かく假定するとき、餘剩價値の全部は資本家に依つて個人的に消費されることとなる。商品資本W′が貨幣に轉化するや否や、資本價値を代表する所の貨幣分は引續き產業資本の循環内部に流通し、他の貨幣分たる金に轉化した餘剩價値は一般商品流通の領域に入る。この餘剩價値の流通は、資本家から出發する貨幣流通であるとはいへ、而も彼れの個人的資本が經驗する流通の外部に行はれるのである。

上例に於いては、一萬斤の綿絲から成る商品資本W′なるものを假定し、その價値を五百磅と見た。この中、四百二十二磅は生産資本の價値である。而してこれは綿絲八千四百四十斤の貨幣形態として、Wを以つて開始された資本流通を更らに續ける。然るに七十八磅なる餘剩價値（商品生産物の過剩分たる綿絲一千五百六斤の貨幣形態）は、この流通から脫出して一般的商品流通の内部に於ける分離した軌道を歩むのである。

$$W' \begin{cases} W \\ + \\ w \end{cases} - \begin{cases} - \\ - \\ - \end{cases} \begin{cases} G \\ + \\ g \end{cases} - \begin{cases} W \\ - \\ w \end{cases} \begin{cases} \nearrow A \\ \searrow P_m \end{cases}$$

g—w は、資本家が嚴密の意義における商品なり、彼れ自身の尊體又は彼れの一家の爲の勞務なりに支出すべき貨幣を以つてする一列の諸購買を代表するものである。此等の購買は分散して種々異なつた時期に行はれる。隨つて貨幣は一時、當座の消費に充用すべき準備貨幣たり退藏貨幣たる形態を採ることとなる。蓋し流通の中絶した貨幣は、退藏貨幣なる形態を以つて存在することとなるからである。この貨幣が流通要具——これも同樣に、退藏貨幣たる暫行的形態を含むものであるが——として盡す機能は、貨幣形態（G）における資本の流通に入るものではない。かかる貨幣は前貸されるものではなく、支出されることとなるからである。

前貸總資本は常に全部的に、一つの段階から他の段階に移動するものと假定したのであるが、今やPの商品生産物は、生産資本Pの總價値四百二十二磅と、生産行程中に造り出された餘剩價値七十八磅との和を含むものと假定する。上例に於いては、可分的の商品生産物を取扱つたのであるが、その場合餘剩價値は一千五百六十斤の綿絲といふ形態を採つてゐた。即ち一斤の綿絲について言へば、その中に含まれてゐる餘剩價値は二・四九六オンスの綿絲といふ形態を採つたのである。然るに商品生産物が例へば五百磅の一機械であつて、その價値組成は綿絲の場合と同一であるとすれば、この機械の價値の一部は七十八磅の餘剩價値に等しいことは事實である。けれどもこの七十八磅は、總機械以外の所には存在しない。機械そのものを粉碎して、その使用價値と同時に價値をも破壞することなしに、これを資本價値と餘剩價値とに分割することは不可能である。即ち此等の兩價値分は、ただ觀念的にのみ商品體の諸部分を以つて代表せしめ得るのであつて、商品W′の獨立した要素として表現され得るものではない。この點は各一斤の綿絲が一萬斤に對する可分的な獨立した商品要素として表現され得るのとは異なる所である。機械の場合には、gがその特殊の流通を開始し得るに至る以前、商品資本たる總商品は全部販賣されて居らねばならない。反對に、資本家が八千

四百四十斤の綿絲を販賣する場合には、それ以上に出づる一千五百六十斤の販賣は、w（一千五百六十斤の綿絲）—g（七十八磅）＝w（消費品）といふ形態を採る所の、全く分離した餘剰價値流通を代表することとなるであらう。更らに一萬斤なる綿絲生産物の個々量の價値要素も亦、總生産物に於けると同じく生産物の各部分を以つて代表せしめ得る。即ち總生産物たる一萬斤の綿絲が、三百七十二磅（七千四百四十斤）なる不變資本價値cと、五十磅（一千斤）なる可變資本價値vと、七十八磅（一千五百六十斤）なる餘剰價値mとに分割される如く、各一斤の綿絲も亦、八・九二八斤（一一・九〇四オンス）なるcと、一・二〇〇片（一・六〇〇オンス）なるvと、一・八七二片（二・四九六オンス）なるmとに分割される。資本家はまた、一萬斤の各部分を逐次的に販賣しつつ、この各部分に含まれてゐる餘剰價値要素を逐次的に消費し、かくして c＋v の總額を逐次的に實現することも出來るであらう。だが此行程は終極に於いて、一萬斤の全部が販賣される事、隨つて八千四百四十斤の販賣に依りc及vの價値が回收される事を豫想するのである（第一卷、第七章、第二節）。

そは兎もかく、W′—G′ に依つてW′の中に含まれてゐる資本價値も餘剰價値も、共に分離し得べき存在を、各別個の貨幣額たる存在を與へられることは事實である。右のいづれの場合にも、Gとgとは最初商品の價格としてのみW′の内にそれ自身の單なる觀念的表章を有してゐた價値の現實的に轉化された形態である。

w—g—w は單純なる商品流通であつて、その第一段 w—g は商品資本の流通 W′—G′ の中に含まれ、隨つて資本循環の中にも含まれてゐる。反對に、その補充段階たる g—w はこの循環の外部に屬するものであつて、それから分離された一般的商品流通の行程となるのである。Wとw（即ち資本價値と餘剰價値）との流通は、W′がG′に轉化した後ち互ひに分立することとなる。この事實から左の結論が生じて來る。

第一に、W′—G′＝W′—(G＋g) を通して商品資本が實現される結果、W′—G′ に於いては尙いまだ相互結合し同一の商品量に依つて負擔されてゐた資本價値と餘剰價値との運動は、互ひに分割され得るものとなる。これらの兩價値は今や、貨幣額としての獨立した形態を有することとなるからである。

第二に、この分割が行はれ、gは資本家の收入として支出され、Gは資本價値の機能的形態として引きつづき循環の軌道を進行するに至るとすれば、第一の取引 W′—G′ は次いで行はるべき取引 G—W 及 g—w と結合して、W—G—W 及び w—g—w なる二つの異なつた流通に依つて表現し得るものとなる。此等の兩流通は、一般的形態の上から見れば、いづれも通例の商品流通の領域に屬すべき循環列である。

尙また、分割し得ざる連續的の商品體についていへば、その各價値分を觀念的に分離して考へることが實際上の習慣となつてゐる。例へば、ロンドンの建築營業は概して信用經營にかかるものであるが、これに從事する建築請負師は家屋建築進行上の種々異なつた段階に準じて前貸を受ける。此等の段階はいづれも一家屋全體を代表するものではなく、建築中にある將來完成すべき一家屋の現實的に存在する所の一部に過ぎない。それは現實的のものであるに拘らず、全家屋の上から見れば觀念的な斷片に過ぎないのである。而も此等の斷片的部分は、追加前借に對する抵當として役立つには十分現實的のものとなつてゐる。（この問題については第一二章を見よ）。

第三に、資本價値と餘剰價値との運動は、W及Gなる形態のもとに於いては尙ほ結合して行はれてゐるものであるが、若しこの運動が一部的に分離するのみであつて、餘剰價値の一部が收入として支出されることなきか、又は右の運動が毫も分離しないとすれば、資本價値の循環が未だ完了せざるに先だち、かかる循環の内部に於いて資本價値そのものの上に一つの變化が生じて來る。上例に依れば、生産資本の價値は四百二十二磅に等しい。故にこの資本が例

へば四百八十磅又は五百磅として G—W を繼續するとすれば、それは原價値よりも五十八磅又は七十八磅だけ大きな一價値として、その後における循環諸段階を通過することとなる。而してこの事實はまた、資本の價値組成の變化をも伴ひ得るのである。

流通の第二段であり、第一循環（G……G′）の終末段階である W′—G′ は、生產資本の循環の第二段階であつて、且つ商品流通の第一段階である。されば流通が問題となる限り、W′—G′ は G′—W′ に依つて補充されなければならない。然るに W′—G′ は既に價値增殖行程（この場合で言へば、第一段階たるPの機能）を通過してゐるのみではなく、更らにその結果たる商品生產物W′を實現してもゐるのである。かくて資本の價値增殖行程と增殖を遂げた資本價値を代表する商品生產物の實現とは、W′—G′ に依つて完了されたこととなる。

以上の說明は、單純なる再生產を前提したものである。換言すれば、g—w が G—W より全く分離されるといふ前提から出發したものである w—g—w 及び W—G—W なる二つの流通は、一般的形態の上から見れば、商品流通の領域に屬するものであつて、兩極間の何等の價値差をも示すものでないから、資本制生產行程なるものは、兎もすれば、かの俗學的經濟學のなす所に倣つて、單なる商品生產、卽ち何等かの種類の消費に充つべき使用價値の生產と見做され易いのである。俗學的經濟學の錯誤的見解に依れば、資本家が斯かる使用價値を生產するのは、これを異なつた使用價値の商品と代位し交換しようとする目的にのみ出づるものである。

W′は最初より商品資本として作用する。而して全行程の目的たる致富（價値增殖）は、餘剩價値（隨つて資本）が增殖するにつれて資本家の消費も亦增大するといふ事實を決して除外するものではなく、寧ろ包含するのである。

資本家の收入の流通について言へば、生產商品 w（又は觀念上それに照應すべき、商品生產物W′の部分）なるものは、實際のところ先づ貨幣に轉化され、貨幣から更らに個人的消費に歸すべき他の一列の諸商品に轉化されることに役立つのみである。だがこれについては、左の小事實を看過すべきでない。卽ちwは餘剩勞働の體化したものであつて、資本家にとつては何等の費用をも要せざる商品價値である。さればこそ、それは本來商品資本W′の一成分として登場して來るのである。卽ちこのwはその存在の上から見ても既に流通資本價値の循環と結びつけられてゐるのであつて、この循環が停頓するか、又は其他の形で攪亂されるかすると、wの消費が制限され、或は全く停止してしまふのみではなく、同時にまたwと代位さるべき諸商品の捌け口も同樣の運命に遭遇することとなる。W′—G′ が成功せず、又はW′の一部のみが販賣可能となるに過ぎない場合にも、矢張り同樣である。

既に見た如く、資本家の收入の流通としての w—g—w が資本流通に入るのは、wがW′（卽ち商品資本たる機能形態を盡くす資本）の價値部分たる限りに於いてのみ行はれる所であつて、この流通は g—w に依つて w—g—w なる全形態を通して獨立化するに至るや否や、もはや資本家の手で前貸された資本の運動に入るものではない。（尤もそれは本來この運動から生じて來たものである）。かくて資本の存在が資本家の存在を前提し、而して資本家の存在が又資本家に依る餘剩價値の消費を條件とする限りに於いてのみ、右の流通は資本の運動と關聯することとなるのである。

一般的流通の內部に於いては、W′例へば綿絲は單に商品として作用するのみである。然し資本流通の要素といふ點から見れば、それは資本價値が採つては捨つる一形態である所の商品資本として作用する。綿絲は商人の手に販賣された後、それを生產した資本の循環行程から遠ざかるのであるが、それにも拘らず絕えず商品として一般的流通の領域內に止まつてゐる。一つの商品量は、それが紡績業者の資本の獨立した循環における一要素でなくなつた後にも流通を續ける。されば資本家に依つて流通に投入された商品量の現實的な終極的の轉形 W—G 卽ちこの商品量が終極

に於いて消費に歸するといふ事實は、それが商品資本として作用する所の轉形からは時間的にも空間的にも全く分離され得る。資本流通の上に行はれた同一の轉形は、一般的流通の部面に移つた後にも引きつづき行はれる。

綿絲が更らに他の產業資本の循環に入るとしても、問題の上には何等の變化も生ずるものではない。一般的流通なるものは、資本として市場に投ぜられることなき價値、又は個人的消費に歸すべき價値の流通を包括すると同樣に、また社會的資本の種々異なつた獨立部分の循環の錯綜、換言すれば個別的諸資本の總體をも包括するからである。

一般的流通の部分としての資本循環と、獨立した一循環の分節としての資本循環との關係は、更らに G′=G+g なる流通を考察するとき明かになつて來る。貨幣資本としてのGは資本の循環を續ける。反對に、收入の支出（g—w）としてのgは、一般的流通の內部に入るとはいへ、資本の循環からは脫出し、單に追加的貨幣資本として作用する部分のみが資本循環の內に入るのである。w—g—w に於いては、貨幣はただ鑄貨として作用するのみである。この流通の目的は、資本家に依る個人的消費に外ならないからである。資本循環の內部に入ることなき、收入として消費さるべき價値生產物部分の斯かる流通を以つて、資本の特徵的循環とすることは、これ實に俗學的經濟學の痴愚の特徵たるものである。

第二段 G—W に於いては、P（この場合產業資本の循環を開始する生產資本の價値）に等しき資本價値Gは餘剩價値から分離され、かくして貨幣資本循環の第一段階たる G—W における場合と同一の價値量を以つて再存在することとなる。今や商品資本が貨幣資本に轉化されるのであつて、貨幣資本の位置は斯く異なることとなるが、機能は變化する所なく、依然として P_m 及びAに、生產機關及び勞働力に轉化されるといふ機能を有してゐるのである。

かくの如く、資本價値は W′—G′ なる商品資本の機能を通して w—g と同時に又 W—G なる段階を通過して來たものであるが、今やその補充段階たる $G—W<^{A}_{P_m}$ に入るのである。かくて資本價値の總循環は $W—G—W<^{A}_{P_m}$ となる。

第一に、循環の第一形態（G……G′）に於いては、貨幣資本Gは資本價値前貸の本來的形態として現はれた。今やそれは最初より、商品資本が流通の第一段階 W′—G′ を通して轉化された貨幣額の一部として、換言すれば商品生產物の販賣に依り貨幣形態に轉化された生產資本Pとして現はれるのである。それは今や最初より、本來的にもあらず終極的にもあらざる資本價値形態として存在する。なぜならば、更らに貨幣形態を脫却することなくしては、W—G の結了段階たる G—W は通過せられ得ないからである。かくて G—A を兼ねてゐる G—W の部分も亦、もはや勞働力の購買といふだけの意味の前貸として現はれるものではなく、寧ろ勞働力に依つて造り出された商品價値の一部たる一千斤の綿絲（價値五十磅）が貨幣形態を以つて勞働力の購買に投ぜられるといふ意味の前貸として現はれることとなる。この場合勞働者の手に前貸される貨幣は、勞働者自身に依つて生產された商品價値の一部の轉化された等價形態に過ぎない。さればこそ G—A を代表する方面から見た取引 G—W は、決して貨幣形態における商品に代ふるに使用價値形態における商品を以つてすることを意味するのみではなく、また一般的商品流行それ自身から獨立した他の諸要素をも含むのである。

GはW′の轉化された形態として現はれ、而してこのW′それ自身はまた生產行程Pが過去に盡くした機能の產物である。故に總貨幣G′は、過去勞働の貨幣表章として現はれる。上例に依れば、一萬斤の綿絲（五百磅）は紡績行程の產物である。この中、七千四百四十斤は前貸不變資本c（三百七十二磅）を代表し、一千斤は前貸可變資本v（五十磅）を、一千五百六十斤は餘剩價値m（八十八磅）を代表する。いまG′の中から原資本に等しき四百二十二磅のみが新た

に前貸され、而して他の事情に變化がないとすれば、勞働者が G—A を通して受ける前貸なるものは、畢竟するところ前の週に生産された綿絲一萬斤の一部（卽ち綿絲一千斤の貨幣價値）に外ならない。W—G の結果として見れば、貨幣は常に過去勞働の表章たるものである。その補充取引たる G—W が卽時商品市場に執り行はれ、G が其處に存在する所の商品と換へられるとすれば、これまた過去勞働が一つの形態（貨幣）から他の形態（商品）に轉化される事を意味する。けれども時間的に言へば、G—W は W—G から區別されるものである。尤も例外的には、雙方が同時に行はれる場合もあり得る。例へば、G—W を執り行ふ資本家と、この取引が W—G を意味する他の資本家とが、同時にその商品を相互に積み出して、G はただ殘高の清算にのみ役立つといふ場合がそれである。W—G の執行と G—W の執行との間における時間の差は極めて著しき場合もあり、左程でない場合もあり得る。G は W—G の結果としては過去勞働を代表するが、G—W なる取引の上から言へば、尙ほいまだ毫も市場に存在せず將來初めて其處に出現すべき商品の轉化された形態を代表し得る。蓋し G—W なる取引は、W が新たに生産される迄は執り行はれることを必要とするものではないからである。同樣に G は、それを貨幣表章とする所の W と同時に生産される商品をも代表することが出來る。例へば、G—W なる取引（生産機關の購買）に於いて、石炭はその採掘前に購買され得るのである。收入として支出されることなく、貨幣蓄積として作用する所の g は、翌年初めて生産さるべき棉花を代表し得る。これは、資本家に依る收入の支出 $g_{\text{—}w}$ についても、また五十磅なる勞銀 A についても同樣である。この五十磅なる貨幣は、單に勞働者の過去勞働の貨幣形態たるのみではなく、更らにいまだ實現されず又は將來實現さるべき、同時に行はれ若しくは將來行はるべき勞働の支拂命令書ともなるのである。勞働者はこの貨幣を以つて、來週初めて製造さるべき上衣を購買し得る。これは特に、惡化させまいとすれば生産されると殆んど同時に消費せねばならぬ幾多の生活必需品について言ひ得る事である。かくの如く、勞働者は彼れの賃銀を代表する所の貨幣を通して、將來における彼れ自身の勞働又は他の勞働者の勞働の轉化された形態を與へられるのである。彼れはその過去勞働の一部に依り、將來における自己勞働の支拂命令書を資本家から與へられる譯であつて、彼れの過去勞働は、いまだ存在せざる在庫品を構成する所の、同時に行はれ又は將來行はるべき彼れ自身の勞働を以つて支拂はれることとなる。この場合には在庫品の準備といふ觀念は全く消滅してしまふ譯である。

第二に、$W—G—W \begin{smallmatrix} A \\ P_m \end{smallmatrix}$ なる流通に於いては、同一の貨幣が二度位置を換へる。資本家は先づ販賣者として貨幣を受け、次に購買者としてそれを手放す。商品を貨幣形態に轉化せしむることは、それを更らに貨幣形態から商品形態に轉化せしむることに役立つのみである。故にこの運動の上から言へば、資本の貨幣形態、卽ち資本が貨幣資本として有する存在は、消失的の一段階たるに過ぎない。又はこの運動が流暢に進行する限り、貨幣資本は購買要具として役立つとき流通要具として現はれるに過ぎない。而して資本家が相互に購買し合ひ、隨つて支拂殘高のみを清算すればいい場合には、それは嚴密の意義における支拂要具として現はれるのである。

第三に、貨幣資本が單なる流通要具として役立つ場合にしろ、支拂要具として役立つ場合にしろ、その機能は畢竟するところ W に代ふる A 及び P_m を以つてすること、換言すれば生産資本に基く商品生産物たる綿絲（收入として使用さるべき餘剩價値を控除した殘餘の）に代ふるに、その生産諸要素を以つてすること以外には出でない。卽ち貨幣資本の機能なるものは、商品としての形態における資本價値をばこの商品を形成する所の諸要素に再轉化せしめることに外ならないのであつて、それは終極に於いて商品資本の生産資本への再轉化を媒介するに過ぎないのである。

循環が順當に行はれる爲には W′ はその價値を以つて餘す所なく販賣されることを要する。更らに W—G—W は一

つの商品に代ふるに他の商品を以つてする事を含むのみではなく、又それが同一の價値比例を以つて行はれる事をも含む　玆には斯く假定するのであるが、然し事實の上から言へば、生産機關の價値は種々變化するものである。蓋し勞働生産力が不斷に變動するといふ事は、資本制生産の特徴であつて、單にこの事實のみに依つても、價値比例が間斷なく變化する事は資本制生産獨特の事象となるからである。生産諸因子の斯かる價値變動についての攻究は後段に讓り、玆にはただ其事實だけを指示するに止める。

生産諸要素の商品生産物への轉化、即ちPのW′への轉化は、生産部面の内部に行はれ、W′のPへの再轉化は、流通部面の内部に行はれる。この再轉化は單純なる商品轉形に依つて媒介されるものであるが、その内容は全く一體として見た再生産行程の一段階となるのである。資本の流通形態としての W—G—W は、機能的に限定された一つの代謝機能を含む。W—G—W なる取引は更らに、WがW′なる商品量の生産諸要素に等しく、而して此等の諸要素は相互に本來の價値比例を維持するものであることを必要とする。即ち商品はその價値を以つて購買されると假定するのみではなく、更らに循環の持續中何等の價値變化をも蒙むるものでないと假定することになるのである。然らずんば、この行程は順當には進行し得なくなる。

G……G′ におけるGは、資本價値の本來の形態であつて、それは再び採られんが爲に捨てられるのである。然るにP……W′—G′—W……P におけるGはこの行程の内部に於いてのみ採られる形態であつて、この行程が結了しないうちに捨てられてしまふ。この行程に於いては、貨幣形態なるものは資本の消失的な獨立した價値形態として現はれるに過ぎない。W′としての資本は斯かる形態を採らうと切望してゐるものであるが、一度びこの形態を採つてG′となるや否や、資本は更らにそれを捨てて生産資本なる形態に轉化されようと切望するやうになる。資本は貨幣形態を採つて存在する限り、資本として作用するものではなく、隨つて價値增殖は行はれないこととなるのである。即ち資本は休用狀態に置かれることとなる。Gはこの場合、流通要具として作用するが、然しそれは資本の流通要具としてである。資本價値の貨幣形態が貨幣資本の循環の第一形態のもとに有する獨立といふ外觀は、この第二形態のもとには消滅してしまふ。かくてこの第二形態は第一形態の否定となり、それを特殊の一形態に過ぎぬものとしてしまふのである。第二の轉形 G—W が、例へば市場に生産機關が存在しないといふ如き障碍に逢著するとすれば、資本の循環、即ち再生産行程の流動は、資本が商品資本なる形態のもとに拘束される場合と同樣に中絶を來たすこととなる。然し兩者の間には次の區別がある。即ち資本は消失的な商品形態よりも、寧ろ貨幣形態の方をヨリ久しく固執し得るといふ事がそれである。資本は貨幣として作用せずとも、貨幣たることをやめるものではない。然し商品資本としての機能を阻止されること餘りに久しきに及ぶとき、資本はもはや商品ではなく、總じてまた使用價値ではなくなる。第二に、貨幣形態のもとにおける資本は、本來の生産資本なる形態に代へて他の形態をも採り得るのであるが、W′として存在する間は總じて他の形態を採らないのである。

W′—G′—W は、形態の上から言へばW′についてのみ流通上の取引を含むものであつて、かかる流通取引はW′の再生産における各段階となるのである。然し W′—G′—W を遂行するには、W′が轉化されて成るWの現實的な再生産を必要とする。而もこの再生産は、W′に依つて代表される個別的資本の再生産行程の外部に行はれる再生産上の諸行程を以つて條件とするものである。

第一形態に於いては、$G—W \begin{smallmatrix} A \\ \nearrow \\ \searrow \\ P_m \end{smallmatrix}$ なる行程は貨幣資本から生産資本への第一轉化を準備するに過ぎず、第二形態に於いては、商品資本から生産資本への再轉化、即ち——産業資本の結構に變化なき限り——商品資本がその源泉た

る生産諸要素に向つてする所の再轉化を準備するのである。かくの如く、この $G—W<^{A}_{P_m}$ なる行程は、第二形態においても、第一形態におけると同様に、生産行程の準備段階として現はれるのであるが、同時に又それは、同一行程への復歸、同一行程の更新として、換言すれば再生産行程の先驅、隨つてまた價値增殖行程の反復の先驅として現はれるのである。

茲に再び注意を要することは、G—A は單純なる商品交換ではなく、餘剩價値の生産に役立つべきAなる商品の購買であり、而して $G—P_m$ なる行程は、この目的の遂行上素材的に必要缺くべからざるものであるといふ一事である。$G—W<^{A}_{P_m}$ が行はれると同時に、Gは生産資本即ちPに再轉化される。かくして循環は新たに開始されるのである。

そこで P…… W′—G′—W……P の明細的な形態は次の如くになる。

$$P\ldots\ldots W'\left\{\begin{matrix} W \\ + \\ w \end{matrix}\right\} — \left\{\begin{matrix} G \\ + \\ g \end{matrix}\right\} — W<^{A}_{P_m}\ldots\ldots P \quad —w$$

貨幣資本の生産資本化は、商品生産を目的とする所の商品購買を意味する。かかる生産的消費たる限りに於てのみ消費なるものは資本それ自身の循環の領域に屬する。この生産的消費の條件となるものは、かく消費される商品に依つて餘剩價値が生産されるといふ事實である。而してこの事實は、單なる生産とは著しく異なるものであり、生産者の生存を目的とする商品生産とも極めて異なるのである。かく餘剩價値の生産を目的として一つの商品を他の商品に換へることは、貨幣に依つてのみ媒介さるべき生産物交換それ自身とは全く異つた事實である。然るに經濟學者は此意味の交換を以つて、過剩生産なるものは行はれ得ないといふ主張の論證たらしめてゐる。

A及び P_m に轉化されるGの生産的消費の外にも、右の循環は G—A なる第一段階を含む。この段階は、勞働者の側から見れば A—G であり W—G である。勞働者の側における流通 A—G—W は、勞働者に依る消費を含むものであつて、この流通の中、第一段のみは G—A の結果として資本循環の領域に屬する。第二段 G—W は個別的資本の流通から生ずるとはいへ、その領域に屬するものではない。けれども勞働者階級が不斷に存在し、隨つて又勞働者が G—W に依つて消費をなすといふ事は、資本家階級にとつて必要な條件である。

資本價値の循環の繼續といふ點から見ても、また資本家に依る餘剩價値の消費といふ點から見ても、W′—G′ なる取引はただW′がGに轉化されることを、販賣されることを含むのみである。W′が購買されるのは、それが使用價値であり、生産的たると個人的たるとを問はず何等かの種類の消費に役立つが故のみであることは言ふ迄もない。然ともW′が例へば綿絲を購買した商人の手に依つて更らに流通を續けるとしても、かかる事實は綿絲を生産して之れを商人に販賣した紡績業者の個別的資本の循環の繼續には差當り影響するところがない。この循環の全行程はそれに關係なく進行を續け、かかる行程を條件とする資本家及び勞働者の個人的消費も同様に進行を續ける。これは恐慌の研究上に重要な事實となるのである。

蓋しW′はそれが販賣されて貨幣に轉化されるや否や、勞働行程隨つてまた再生産行程の現實的因子に再轉化され得るのであつて、この商品が終極的の消費者に依つて購買されるか、又はこれを再販賣せんとする商人に依つて購買されるかといふ事は、問題の上に何等直接の影響をも及ぼすものではない。資本制生産に依つて造り出される商品量の大小は、此生産の規模とそれを不斷に擴大せんとする欲求とに依つて決定されるものであつて、需要供給の、充足す

べき欲望の豫定範圍に依つて決定されるものではない。大規模なる生産の直接的購買者たり得るものは、他の産業資本家を除いては卸賣商人のみである。再生産行程から放出される商品が現實に於いて個人的又は生産的消費に歸せざる場合にも、この行程は一定の限界内について言へば、同一又はヨリ大なる規模を以つて進行し得るのである。」商品の消費は、これを生産した資本の循環中に含まれるものではない。例へば綿絲が販賣されるや否や、差當りその販賣された綿絲が如何になるかといふことに頓着なく、それに依つて代表された資本價値の循環は新たに開始され得る。生産物が販賣される限り、資本家たる生産者の立場から見れば萬事順當に進行してゐるのであつて、彼れに依つて代表される資本價値の循環は中絶を來たすものではない。而してこの行程が擴大される時（かかる擴大は生産機關の生産的消費の擴大を含む）、資本の斯かる再生産は勞働者の側における個人的消費（卽ち需要）の擴大をも伴ひ得る。なぜならばこの個人的消費(i)は生産的消費に依つて誘發され媒介されるからである。かくて餘剩價値の生産、それと共に又資本家の個人的消費は增大し、全再生産行程は旺盛に赴くと同時に、商品の大なる部分は消費に歸したかの如く見えるのみであつて、現實に於いては販賣されることなく、再販賣者の手に保有され、隨つて事實上尙ほ市場に止まつてゐるといふ場合が生じ得る。」今や商品は相次いで市場に流入し來たり」、先きに流入した商品はただ消費に依つて吸收されたやうに見えたに過ぎないことが遂に明かとなる。」各商品資本は、市場に位置を占めんとして互ひに爭ふ。」販賣の目的を以つて後から流入して來た商品は、價値以下に販賣される。」先きに流入した商品がいまだ捌けない中に、その支拂期限は到來してしまふ。」かくてその所有者は支拂不能を宣言するか、」然らずんば支拂義務を盡すべく如何なる價格を以つても販賣しなければならなくなる。」かかる販賣は、現實における需要狀態とは些かも關係する所なく、ただ支拂についての需要（換言すれば商品を貨幣に轉化すべき絶對的必要）と關係する所あるのみである。次いで恐慌が襲來する。」この恐慌は、消費的需要（個人的消費上の需要）が直接減退するといふ事實ではなく、寧ろ資本對資本の交換が、資本の再生産行程が減退するといふ事實を通して認め得るものとなるのである。」

貨幣資本たる機能を盡す目的で、生産資本に再轉化さるべく定められた資本價値としての機能を盡す目的で、Gの轉化されてゆく商品Pm及びAが、種々異なつた時期に購買され又は代價を支拂はるべきであり、かくして G—W が相次いで行はれる一列の諸購買及び諸支拂を代表することになるとすれば、Gの一部が G—W なる段階を通過しつつあるとき、他の部分はいまだ貨幣狀態を脫却せず、この行程それ自體の條件に依つて決定された時期が到來するに及んで初めて、同時又は逐次的に通過さるべき段階 G—W に役立つといふ結果が生じて來る。」Gの斯かる部分は、一定の時期に作用を開始し機能を盡す目的を以つて、暫らく流通部面から引上げられたものに過ぎない。それが斯く貯藏されるといふ事實こそ、流通に依つて決定され流通を目的とする所の一機能たるものである。換言すれば、それが購買上及び支拂上の基金として存在する事、その運動が停止される事、その流通が中絶した狀態のもとに在る事——かかる事實は、貨幣が貨幣資本として有する諸機能の一つを盡すについての狀態となるのである。」それは貨幣資本としての機能でなければならない。」蓋しこの場合、暫時休止狀態のもとに置かれてゐる貨幣はそれ自身貨幣資本G（卽ちG—g）の一部であり、循環の起點たる生産資本の價値Pに等しき商品資本價値分の一部となつてゐるからである。

他方に流通部面から引き上げられた一切の貨幣は、退藏貨幣といふ形態を採る。かくしてこの場合、貨幣の退藏貨幣形態は貨幣資本の機能となる。これ恰も G—W における購買要具又は支拂要具としての貨幣機能が、貨幣資本の機能となるが如くである。」蓋し資本價値はこの場合、貨幣形態を以つて存在するものであり、而して貨幣狀態なるものは、産業資本がその諸段階の一つに置かれたとき採る所の、循環の聯絡に依つて定められた一狀態に外ならないか

らである。同時にこの場合にも亦、貨幣資本なるものは産業資本の循環内部に於いては貨幣機能以外の何等の機能をも盡すものでなく、而してこの貨幣機能は又、かかる循環の他の諸段階との聯絡に依つてのみ、資本機能たる意義を有するものであることが明かとなつて來る。

G′を以つてGに對するgの關係といふ形に、資本關係といふ形に表現することは、直接的にいへば貨幣資本の機能ではなく、寧ろ商品資本W′の機能たるものである。而してこの商品資本は又、w對Wの關係として單に生産行程の結果を、生産行程の内部で資本價値が經驗する自己增殖の結果を言ひ現はすに過ぎないのである。

流通行程の運動が障碍に逢著し、市況その他の外部的事情に依りGが G—W なる機能を停止しなければならなくなり、かくして大なり小なりの期間その貨幣狀態を脫却し得なくなるとすれば、この場合にも亦、單純なる商品流通において W—G から G—W への推轉が外部的の事情に依つて中絶するとき生ずる如き、貨幣の退藏貨幣狀態が生ずることとなる。即ち非任意的な退藏貨幣が形成されることとなるのである。玆に貨幣は休用的な潛伏的な貨幣資本といふ形態を採ることとなるのであるが、この問題については今のところ之れ以上立ち入つた考察を與へない。

だが以上兩場合のいづれに於いても、貨幣資本が貨幣形態に止まることは、運動中絶——それが目的に合致したものであると背反したものであると、任意的のものであると非任意的のものであると、貨幣資本の機能に一致したものであると反對したものであるとを問はず——の結果として現はれるのである。

(二)　蓄積及び規模の擴大された再生産

生産行程の擴大され得る比率は專擅的のものではなく、技術的に決定されたものであるから、資本化を目的とする實現せられた餘剩價値と雖も、種々なる循環が反復された後でなければ、現實に於いて追加資本として作用し、流通資本價値の循環に入るに十分な範圍に達することが出來ず、隨つて斯かる時期の到る迄は蓄積されて置かれなければならないといふ場合が屢々生じ得る。かくして餘剩價値は退藏貨幣に硬結し、この形態のもとに潛伏的な貨幣資本となるのである。何故それが潛伏的かといへば、貨幣形態を固執する限りそれは資本として作用し得るものではないからである(六)。さればこの場合に行はれる退藏貨幣形成なるものは、資本制蓄積行程の内部に含まれ、それに伴ふものであるとはいへ、同時に又、本質的にそれから區別さるべき一要素として現はれるのである。蓋し潛伏的な貨幣資本の成立は、再生産行程そのものを擴大せしめるものではないからである。寧ろ反對に、この場合潛伏的な貨幣資本が成立するのは、資本家が直接その生産の規模を擴大し得ない結果である。いま、彼れが餘剩生産物をば金又は銀の生産者に販賣し、これに對して後者が新たなる金又は銀を流通の内部に投入するとするか、或は畢竟同じ事に歸するが、國民的餘剩生産物の此一部の代價を支拂ふため外國から追加の金又は銀を輸入する所の商人に之れを販賣するとすれば、かかる場合には彼れの潛伏的貨幣資本は國民的の退藏金又は退藏銀に對する一つの增加量となるのである。これ以外の如何なる場合にも、商人の手に在るとき流通要具であつた例へば七十八磅といふ貨幣は、資本家の手に入るとき退藏貨幣なる形態を採るに過ぎず、要するに國民的の退藏金又は退藏銀の配分を變化せしめるに過ぎないのである。

(六)『潛伏的』(2)といふ言葉は、物理學上の潛熱といふ觀念から得たものである。この觀念は今や、エネルギー轉化の學說に依つて殆んど廢除された。そこでマルクスは後に書いた第三編に於いては、『ポーテンチエレ・エネルギー』(3)なる觀念から得た『ポーテンチエルな資本』といふ言葉を以つてこれに換へ、又はダランベールの提唱した『可能速度』(4)に倣つて『可能資本』といふ言葉を用ゐてゐる。——F・E・

大なり小なりの期限を定めて商品の代價が購買者から支拂はれるといふ風に資本家の取引上貨幣が支拂要具として作用する場合には、資本化を目的とする餘剰生産物は貨幣に轉化されずして、購買者が既に所有してゐるか、又は將來所有すべき見込ある等價についての債務請求權に、所有名義に轉化される。かかる餘剰價値は、利附證券などに放下された貨幣と同じく、循環の再生産行程に入るものではない。尤もそれは、他の個別的産業資本の循環には入り得るのである。

資本制生産の全性質は、前貸資本價値の增殖に依つて、直接的にいへば出來得る限り多量なる餘剰價値の生産に依つて決定され、第二に又（第一卷、第二二章を見よ）資本の生産、換言すれば餘剰價値の資本化に依つて決定される。資本の蓄積又は規模の擴大された再生産は、餘剰價値の生産を、資本家の富を不斷に擴大する所の手段として、資本家自身の目的として現はれるものであつて、資本制生産の一般的傾向の中に含まれるものであるが、それが更らに發達するに及び、各個の資本家にとつての必要事となるに至ることは、第一卷に說いた通りである。彼れの資本を不斷に增大せしめる事は、資本保存の條件となるのである。然し此問題は既に說いた所であるから、玆には之れ以上立ち入つて考へる必要はない。

曩には先づ單純なる再生産について考察したのであるが、その場合、我々は餘剰價値の全部が收入として支出されるものと假定した。然し現實に於いては、通例の事情を假定する限り、餘剰價値の一部が常に收入として支出されるのみであつて、他の部分は資本化されるのである。一定の期間に生産される餘剰價値が全部消費されるか、それとも全部資本化されるかといふことは、この場合關係する所なき問題である。運動の平均——一般的公式なるものは、この平均のみを代表し得るに過ぎない——について言へば、雙方とも行はれるのであるが、然し公式を複雜ならしめない爲には、餘剰價値の全部が蓄積されると假定した方がいい。P……W′—G′—W′<A<Pm……P′ なる公式は、擴大された規模のもとにヨリ大なる價値を以つて再生産される所の、且つ增大した生産資本として第二循環を開始し、又は畢竟同じ事に歸するが第一循環を更新する所の生産資本を言ひ現はすものである。第二循環が開始されるや否や、再びPが起點となるのであるが、この場合に於けるPは最初のPよりもヨリ大なる生産資本であるといふ點だけは異なつてゐる。故に G……G′ なる公式の第二循環はG′から始まるとはいへ、このG′はGとして、卽ち一定の大さを有する前貸貨幣資本として作用する。それは第一循環の起點であつた貨幣資本よりも大である。然しこのG′が前貸貨幣資本たる機能を開始するや否や、餘剰價値の資本化に基いてそれが增大した事實を示す一切の聯絡は消滅することとなる。その起原は、循環を開始すべき貨幣資本なるG′の形態に依つて打ち消されてしまふ。これは新たなる循環の起點として作用する場合のP′についても、同樣に言ひ得る事である。

P……P′ をG……G′ と比較する時、兩者は決して同一の意義を有するものでないことが知られる。G……G′ は單獨に個別的な循環として見れば、貨幣資本（又は貨幣資本として循環を遂げつつある産業資本）たるGが貨幣を生む貨幣であり、價値を生む價値であつて、餘剰價値を齎らすものであるとの事實を言ひ現はすに過ぎない。然るにPの循環に於いては、第一段階たる生産行程の經過と同時に價値增殖行程それ自身が既に完了されてしまふのであつて、第二段階（流通の第一段階）たる W′—G′ の終了後すでに資本價値と餘剰價値との和は實現された貨幣資本として、第一循環の終末の極であつたG′として存在することとなる。餘剰價値が生産されたといふ事實は、最初に考察したP……P の形態（第六六頁に揭げた明細的な公式を見よ）に於いては w—g—w′ に依つて表現される。この循環はその第二段階に依つて資本流通の外部に遠ざけられ、收入としての餘剰價値の流通を表現するものとなる。卽ち全運動

がP……Pに依つて代表され、隨つて兩極點の間に何等の價値差も生ぜざることを示す右の形態に於いては、前貸價値の增殖卽ち餘剩價値の生產は、G……G′におけると同樣に表現されるものであつて、ただG……G′における最終の段階であり、循環の第二段であるW′—G′がP……Pに於いては流通の第一段として現はれるといふ一點が異なるだけである。

P……P′におけるP′の言ひ現はす所は、餘剩價値が生產されたといふ事實ではなく、生產された餘剩價値が資本化され、隨つて資本が蓄積されたといふ事實である。換言すれば、P′はPとは異なり、原資本價値とその運動に依つて蓄積された資本の價値との和より成るといふ事實である。」

G……G′の單なる結末としてのG′と、此等の凡ゆる循環の內部に現はれるW′とは、これを單獨に觀察すれば運動を言ひ現はすものではなく、寧ろ運動の結果を言ひ現はすものである。卽ち商品形態又は貨幣形態に實現されたる價値增殖を遂げた資本價値、隨つてG+g又はW+wとしての資本價値、換言すれば資本價値とその子體たる餘剩價値との關係としての資本價値を言ひ現はす譯である。然しW′なる形態を採る場合にしろ、G′なる形態を採る場合にしろ行はれたる價値增殖そのものは、貨幣資本なり商品資本なりの機能ではない。產業資本の特殊の機能に照應した特殊の異なつた形態として、存在樣式として見れば、貨幣資本なるものは單に貨幣機能を盡し得るに過ぎず、商品資本は單に商品機能を盡し得るに過ぎないものであつて、兩者の區別は要するに貨幣と商品との區別に外ならない。同樣に、生產資本なる形態に於ける產業資本も亦、生產物を生ずる他の總ての勞働行程における同一の要素に依つてのみ構成され得る。卽ちそれは、一方における對象的勞働條件（生產機關）と他方における生產的（計畫的）に作用する所の勞働力とのみから成り得るに過ぎないのである。產業資本なるものは、生產部面の內部に於いては生產行程一般に（隨つて又資本制以外の生產行程にも）照應した組成を以つてのみ存在し得るものであるが、同樣に流通部面の內部に於いては、それに照應する所の兩形態たる商品形態及び貨幣形態を以つてのみ存在し得るのである。」

然るに生產諸要素の總和は、最初から次の事實に依つて生產資本たる性質を示してゐる。卽ち勞働力なるものは元來、他人の所有に屬するものであつて、資本家は生產機關を他の商品所有者の手から購買する如くにして、之れをその所有者たる勞働者から購買したといふ事實がそれである。かくして生產行程そのものは、產業資本の生產的機能として現はれることになるのであるが、それと同樣に、貨幣及び商品も同じ產業資本の流通形態として現はれ、貨幣及び商品の機能はこの產業資本の流通機能として現はれる。かかる流通機能は、或時は生產資本の機能を誘導し、或時はまたこの機能に依つて生ずるものである。貨幣機能及び商品機能は、この場合同時にまた貨幣資本及び商品資本の機能となるのであるが、それは要するに此等の機能が循環行程の種々異なつた段階に於いて產業資本の盡すべき諸種の機能形態として關聯する結果である。されば貨幣を貨幣として特徵づけ、商品を商品として特徵づくる特殊の性質及び機能を貨幣及び商品の資本性質から推論せんとすることは不條理であり、反對に生產資本の特質を生產機關としての存在樣式から推論することも、同樣に不條理となるのである。

G′又はW′がG+g又はW+wとして、換言すれば資本價値とその子體たる餘剩價値との關係として確立されるや否や、この關係はG′及びW′の雙方に依つて、卽ち一方には貨幣形態、他方には商品形態として言ひ現はされることとなる。而もこの事實は、問題それ自身の上には何等影響する所がない。かくの如き關係は、貨幣そのものの特質及び機能から生ずるものではなく、また商品そのものの特質及び機能から生ずるものでもないのである。G′の場合にもW′の場合にも、資本を特徵づくる性質、卽ち價値を生む價値たる性質は、單に結果として言ひ現はされるのみである。

W′は常にPの機能の産物であり、而してG′は常に産業資本の循環中に轉化されたW′の形態たるに過ぎない。されば實現された貨幣資本が貨幣資本たる特殊の機能を再開始するや否や、それは最早G′卽ち G+g の中に含まれる資本關係を言ひ現はすものではなくなる。G……G′ が結了してG′が新たに循環を開始するやうになると、その中に含まれてゐる餘剩價値の全部が資本化されるとしても、G′は最早G′として作用するものではなく、寧ろGとして作用するものとなるのである。

上例に於いて、第一循環は四百二十二磅なる貨幣資本を以つて開始されたが、第二循環は五百磅を以つて開始される。卽ち第二循環の起點たるべき貨幣資本は、第一循環の場合に比し七十八磅だけ大きいのである。この區別は一つの循環を他の循環と比較する場合に見出されるものであつて、かかる比較は個々の各循環の內部には行はれないのである。曩に餘剩價値として存在してゐた七十八磅を含む所の、貨幣資本として前貸される五百磅は、他の資本家における第一循環の起點たるべき五百磅に依つて演ぜられるところ以外の役割を演ずるものではない。生産資本の循環についても同樣であつて、增大したP′はPとして新たなる循環を開始すること、恰も單純なる再生産 P…… P′ における Pの如くである。

$G'-W'\begin{cases}A\\P_m\end{cases}$ なる段階に於ける增大量は、ただW′に依つてのみ指示されるものであつて、A′及びP_mに依つて指示されるものではない。WはAとP_mとの總計であるから、W′の中に含まれるA及びP_mが本來のPよりも大であることを示すにはW′以外のものを要しない。第二にまたA′及びP_m'なる記號は不當となるであらう。蓋し我々の旣に知る如く、資本の增大は價値組成の變動を伴ふものであつて、この變動が進むにつれてP_mの價値は增大するが、Aの價値は常に相對的に減少し、甚しきは絕對的にも減少する場合すら屢々見られるからである。

(三) 貨幣の蓄積

金に轉形した餘剩價値gが忽ちにして流通資本價値に追加され、かくして資本Gと結合し、G′なる大さとなつて循環行程に入り得るか否かは、gの單なる存在からは獨立した事情に懸るものである。第一の營業と竝んで開始さるべき第二の獨立した營業における貨幣資本としてgを使用せんとする場合には、それが斯かる營業に要すべき最低限度の大さを有せざる限り、この目的の爲に使用し得るものでないことは明かである。」またこれを最初の營業の擴張に使用せんとする場合にも、Pの素材的な諸因子間の關係とその相互の價値比例とは、gに對する一定の最低限量を必要ならしめる。「この營業に作用する一切の生産機關は、單に質的の相互比例を有するのみではなく、また一定の量的相互比例、換言すれば一つの比例量を有するものである。」生産資本を構成する諸因子の斯かる素材的比例と、この比例に依つて負擔される價値比例とは、gが生産資本の增殖分として、追加的の生産機關及び勞働力の雙方(又は生産機關のみ)に轉化され得る目的上有して居らねばならぬ最低限量を決定する。」例へば綿紡業者は、梳刷子と豫紡機との相當量を新調することなくして、紡錘の數のみを增加することは出來ない。更らに棉花及び勞銀の支出增大も、かかる營業擴張にとつて必要であることは言ふ迄もない。」卽ちこの營業擴張を遂行するには、餘剩價値が豫め可なりな額に達してゐることを必要とするのである。(通常、紡錘一個の新調に要する費用は一磅とされてゐる)。gがこの最低限量に達せざる限り、資本の循環は逐次的に産出されたgの總額がGと結合して $G'-W'\begin{cases}A\\P_m\end{cases}$ なる機能を盡し得るに至るまで、幾度びか反復されなければならない。」

例へば紡績機械の上に部分的の變化が生ずるのみであつても、それが此機械の生産力を增進せしむる限り、紡績材

料や豫紡機の擴張などに充用すべき支出の增加が必要となる。これがため所要の最低限量に達する迄の間、gは蓄積されることとなる。而してこの蓄積はg自身の機能たるものではなく、寧ろ P……P′ が反復される結果なのである。g自身の機能は寧ろ、價値增殖循環の反復に依つてgが己れ自身の能動的な機能に必要とする最低限量に達するまでの追加を外部から受けてゐる間、貨幣狀態に止まつてゐるといふ點に存する。蓋しこの最低限量に達した時にのみ、gは現實的に貨幣資本として、また――原資本が擴大されるといふ當面の場合について言へば――既に機能を盡しつつある貨幣資本Gの蓄積部分として、Gと共にその機能に關與し得るからである。だがその時期に達する迄の間、gは蓄積されて、形成行程中に在り發育を遂げつつある退藏貨幣といふ形態を以つてのみ存在するのである。かくして貨幣蓄積卽ち退藏貨幣形成なるものは、この場合、現實的の蓄積に、產業資本の作用規模の擴大に暫行的に伴ふところの一行程として現はれることとなる。何故暫行的に伴ふかといへば、貨幣なるものは退藏貨幣狀態に止まる限り資本として作用することなく、價値增殖行程に關與することはないからである。語を換へていへば、かかる狀態を脫せざる限り、それは自己の關與なくして存在する他の貨幣が同一の金庫に投入される故にのみ增殖するところの貨幣額となつてゐるからである。

退藏貨幣なる形態は、流通の內部に存在する事なき貨幣卽ち流通を中絕され貨幣形態のまま貯藏された貨幣の採る形態に外ならない。退藏貨幣の形成行程そのものは、凡ゆる商品生產に共通する所であるが、それが自己目的として一つの役割を演ずるのは、資本制前期の發達幼稚な商品生產形態のもとにのみ見られる。けれども玆に問題となる所の場合について言へば、貨幣は潛伏的の貨幣資本として作用するものであるから、その限りに於いて退藏貨幣なるものは貨幣資本の形態として現はれ、退藏貨幣の形成は資本の蓄積に暫行的に伴ふ一行程として現はれることとなる。蓋しこの場合における退藏貨幣形成、換言すれば貨幣形態を以つて存在する餘剩價値の退藏貨幣狀態は、餘剩價値が現實的に作用する所の資本に轉化される場合通過すべき、資本循環の外部に行はれる機能的に限定された豫備段階となるからである。この目的あるが故に、退藏貨幣は潛伏的の貨幣資本となるのであつて、さればこそそれが資本行程に入る以前達成して居らねばならぬ大さは、各場合における生產資本の價値組成に依つて決定されるのである。けれどもそれは、退藏貨幣なる狀態に止まつてゐる限り尙いまだ貨幣資本たる機能を盡すものではなく、休用狀態に置かれた貨幣資本たるに過ぎない。それは囊の場合における如き機能を中絕された貨幣資本ではなく、尙いまだ機能を盡し得ない所の貨幣資本となつてゐるのである。

以上は本來の現實的な形態における貨幣蓄積、卽ち現實的の貨幣退藏としての貨幣蓄積について言つたのであるが、貨幣蓄積なるものは更らに單なる未拂金といふ形態、換言すればW′を販賣した資本家の債務請求權なる形態をも採り得るのである。更らにこの潛伏的な貨幣資本は、所要の最低限量に達する迄の間、例へば一銀行における利附預金として、或は爲替手形なり其他何等かの種類の有價證券なりとして、貨幣を生む貨幣なる形態をも採り得るものであるが、かかる形態は玆に論究しないこととする。蓋しかかる形態の貨幣に實現された餘剩價値は、その源泉たる產業資本の循環圈外に屬する特殊の資本機能を盡すものであつて、この機能は第一に產業資本の循環それ自體とは何等關係する所なく、第二に產業資本の機能から區別さるべき、尙いまだ本書に說明せざる資本機能の存在を假定することとなるからである。

（四）準備金

上述の如き形態を採つた、餘剰價値の存在樣式たる退藏貨幣は、これ卽ち蓄積された貨幣基金である。換言すれば資本蓄積に依つて暫行的に通過され、その意味に於いて又、資本蓄積の條件ともなる所の貨幣形態である。だがこの蓄積基金は又、特殊の副機能をも盡すことが出來る。卽ちそれは、資本の循環行程に P……P′ なる形態を與へることなく　換言すれば資本制再生產を擴大せしむることなくして、この循環行程の中に入り得るのである。

W′—G′ なる行程がその通例の限度以上に延長され、かくして商品資本の貨幣形態化が異常に遲滯せしめられ、又はこの轉化が行はれた後、例へば貨幣資本の轉形さるべき生產機關の價格が循環開始の當時における水準以上に昂騰するに至るとすれば、蓄積基金として作用する所の退藏貨幣は貨幣資本の全部若しくは一部に代用せられ得るのである。貨幣蓄積基金なるものは、かくして循環の攪亂に對抗する爲の準備金として役立つこととなる。」

かくの如き準備金として使用される時、この蓄積基金は P……P′ なる循環を攻究せる際考察した所の、購買要具又は支拂要具の基金とは異なつたものとなる。後者は作用中なる貨幣資本の一部であり、隨つて又行程を通過しつつある全般的に見た資本價値の一部の存在形態たるものであつて、この貨幣資本の各部分は、種々異なつた時期に相次いで機能を盡すのである。生產行程の持續中に絕えず準備貨幣資本なるものが形成される。なぜならば、後日初めて支拂はるべき購買契約でありながら今日締結されるものがあり、今日多額の商品を販賣して、而も同樣に多額なる商品の購買は後日初めて爲されるといふ場合もあるからである。かかる期間に、流通資本の一部は絕えず貨幣形態を以つて存在することとなる。

他方に又、準備金なるものは作用中の資本（嚴密に言へば貨幣資本）の一部ではなく、蓄積の豫備段階を通過しつつある資本の一部である。換言すれば、尙いまだ現實的の資本に轉化せられざる餘剩價値の一部である。尙また、基金逼迫の場合には、資本家は己れの手に存在する貨幣の一定の機能に毫も頓著する所なく、資本の循環行程を中絕せしめないため、保有してゐる一切の貨幣を充用するに至ることは言ふ迄もない。たとへば上例に於いて、Gは四百二十二磅であり、G′は五百磅であつた。いま、四百二十二磅なる資本の一部が、支拂要具及び購買要具の基金として、貨幣準備として、存在するものとすれば、他の事情に變化なき限り、この資本部分は全部循環の中に入り、循環の目的上十分のものであると豫期されてゐるのである。然るに準備金の方は、七十八磅なる餘剩價値の一部であつて、四百二十二磅なる資本の循環が變化した事情のもとに行はれざる限り、この循環の行程に入り得るものではない。なぜならば、それは蓄積基金の一部であつて、この場合、再生產の規模が擴大されないといふ條件のもとに存在するからである。

貨幣蓄積基金それ自身がすでに、潛伏的な貨幣資本の存在を意味し、貨幣の貨幣資本化を意味するものである。

單純なる再生產と規模の擴大された再生產との雙方を包括する所の、生產資本循環の一般的公式は左の通りである。

$$P\ldots\ldots\overset{1}{W'—G'}\ \overset{2}{G—W}\begin{cases}A\\P_m\end{cases}\ldots\ldots P(P')$$

PがPに等しいとすれば、（2）のGは G′—g に等しく、またPがP′に等しいとすれば、（2）のGは G′—g′ よりも大である。卽ちこの後ちの場合には、gの全部若しくは一部が貨幣資本に轉化されたこととなるのである。

生產資本の循環こそ、正統派經濟學が依つて產業資本の循環行程を攻究する所の形態となつてゐるのである。

第三章　商品資本の循環

商品資本の循環を示す一般的公式は左の通りである。

W′—G′—W……P……W′

W′は嚢に説いた兩循環の結果としてのみ現はれるものではなく、更らにその前提條件としても現はれるのである。蓋し生産機關それ自身の少なくとも一部が循環を遂げつつある他の個別的資本の商品生産物である限り、一方の資本にとつてG—Wの含む所のものは、他方の資本におけるW′—G′の内に既に含まれてゐることとなるからである。たとへば、上例における石炭、機械等は採鑛業者や資本家的機械製造業者などの商品資本である。尙また第一章第四節に示した如く、G……G′が最初に反復される際、貨幣資本のこの第二循環が結了する以前すでにP……Pなる循環のみではなく、更らにW′……W′なる循環も假定されてゐるのである。

規模の擴大された再生産が行はれるとすれば、終點のW′は起點のW′よりも大となる。隨つて之れを示すにはW′を以つてすべきである。

この第三形態と第一及び第二形態との區別は次の點に存する。第一に、第三形態に於ける總流通は相對立した二つの段階を以つて循環を開始するものであるが、第一形態に於ける流通は生産行程に依つて中絶され、第二形態に於ける總流通は相互補充的なる二つの段階を有するものであつて、再生産行程の媒介として現はれるに過ぎず、かくしてそれはP……P間の媒介的運動となるのである。G……G′に於ける流通形態は、G—W……W′—G′=G—W—Gであるが、P……Pに於ける流通形態は其反對なるW′—G′、G—W=W—G—Wである。W′……W′に於ける流通も、この後者と同一の形態を有してゐる。

第二に、第一及び第二循環の反復されるとき、終點たるG′及びP′が新たに開始される循環の起點となるにしても、此等雙方の造り出された形態は消滅してしまふ。即ちG′（=G+g）とP′（P+p）とは、G及びPとして新たなる行程を開始するのである。然るに第三形態の起點Wは循環が同一の規模で更新される場合にもW′を以つて示されねばならない。それは左の理由に依るのである。第一形態におけるG′は、それがG′として新たなる循環を開始するや否や、貨幣資本Gとして、增殖すべき資本價値の、貨幣形態を以つてする前貸として作用する。前貸貨幣資本の量は、第一循環中に行はれた蓄積に依つて發育しヨリ大となる。されど前貸貨幣資本の大さが四百二十二磅であるにしろ、五百磅であるにしろ、この貨幣資本が單なる資本價値として現はれるといふ事實の上には何等の變化も生ずるものでない。G′は最早價値增殖を遂げた（即ち餘剩價値を含む所の）資本として、資本關係として存在するものではない。それは之より漸く行程の内部で自己增殖を遂げようとするのである。P……P′についても同樣である。P′は常にPとして、餘剩價値を產出すべき資本價値として、更らに作用を續け循環を更新しなければならない。

然るに商品資本の循環は、單なる資本價値を以つて開始されるものではなく、商品形態のもとに增殖した資本價値を以つて開始されるのである。隨つてそれは最初より、商品形態を以つて存在する所の資本價値のみではなく、また餘剩價値の循環をも含む譯である。そこでこの形態を以つて單純なる再生産が行はれるとすれば、起點にも終點にも同じ大さのW′が出現することとなる。餘剩價値の一部が資本循環の中に入るとすれば、終點に現はれるものはW′でなくてW″（即ち增大したるW′）であることは事實であるが、續いて行はれる所の循環は矢張りW′を以つて開始される。

これは曩の循環におけるものよりも大なるW′に外ならないものであつて、ヨリ大なる蓄積資本價値、隨つて又それに比例した程度でヨリ大なる新たに生じた餘剩價値を以つて新たに循環を開始する。いづれの場合にもW′は常に資本價値と餘剩價値との和に等しき商品資本として循環を開始するのである。

各個の産業資本の循環について見るに、WとしてのW′はこの資本の形態として現はれるものではなく、その生産機關を産出する他の産業資本の形態として現はれる。この第一の資本における G—W（卽ち G—Pm）なる取引は、第二の資本から見れば W′—G′ である。

G—W ⋀Pm なる流通行程に於いては、AとPmとはいづれもその販賣者（一方には自己の勞働力を販賣する所の勞働者、他方には生産機關を所有し販賣する所の人）の手に在る限り商品であるとの意味に於いて、同一の位置を占めてゐる。此等の商品の購買者たる人の貨幣は、この場合、貨幣資本として作用するものであるが、彼れから見れば、AとPmとは尙いまだ彼れに依つて購買せられざる限りに於いてのみ、隨つてまた貨幣形態のもとに存在する彼れの資本に對し他人の所有に屬する所の商品たる關係に立つ限りに於いてのみ、商品となるのである。この場合AとPmとは左の一點に於いてのみ區別される。卽ちPmはその販賣者の資本の商品形態である限り、彼れにとつてW′たり資本たるを得るものであるが、Aの方は勞働者から見れば常に商品であつて、購買者の手に移つたとき初めてPの一部となり資本となるといふ事がそれである。

「故にW′は單なるW（卽ち資本價値の單なる商品形態）たる資格に於いては、決して循環を開始し得るものではない。商品資本として見れば、それは常に二重の性質を有してゐる。卽ち使用價値たる見地からすれば、それはPの機能の産物（上例について言へば綿絲）であつて、商品として流通部面から出て來た要素である所のA及びPmは、今やこの生産物の形成要素として作用したことになる。次に價値の見地からすれば、それは資本價値Pとその機能に依つて生じた餘剩價値mとの和に等しいのである。」

Wそれ自身の循環に於いてのみ、W（卽ちP）に依つて代表される資本價値は、餘剩價値を含むW′部分（餘剩價値を代表する所の餘剩生産物）から分離され得るものであり、且つ分離されねばならぬものである。尤も此等の兩者が綿絲の場合における如く事實上分離し得るものであるか、それとも機械の場合における如く分離し得ざるものであるかといふことは敢て問はない。いづれにしても、それはWがG′に轉化されるや否や分離し得るものとなるのである。」

若し商品生産物の總體が曩に掲げた一萬斤の綿絲における如く、相互獨立した同質の部分生産物に分割され、かくして W′—G′ なる取引が逐次的に行はれる各販賣の總和に依つて代表され得るに至るとすれば、餘剩價値が實現され換言すれば全體としてのW′が實現されるに先だち、商品形態における資本價値はWとして作用しW′から分離され得るものとなるのである。

五百磅の價値を有する一萬斤の綿絲のうち、八千四百四十斤の價値四百二十二磅は、餘剩價値から分離された資本價値に等しい　資本家が先づこの八千四百四十斤の綿絲を四百二十二磅で販賣するとすれば、八千四百四十斤なる綿絲は商品形態における資本價値Wを代表することとなる。尙これ以上W′の中に含まれてゐる一千五百六十斤なる餘剩生産物（卽ち七十八磅なる餘剩價値）は、後に至つて初めて流通することとなるであらう。かくて資本家は、餘剩生産物の流通 w—g—w の行はれる以前すでに W—G—W ⋀Pm を執り行ふことが出來る。

或は最初に七千四百四十斤の綿絲を三百七十二磅なる價値で販賣し、次に一千斤を五十磅なる價値で販賣するとすれば、Wの第一部分を以つて生産機關（不變資本分c）が回收され、Wの第二部分を以つて勞働力（可變資本分v）が

回收され得ることとなり、それ以後の行程は上述通りに進行するであらう。」

けれども斯樣な逐次的の各販賣が行はれると假定し、且つ循環の條件が之れを許すとすれば、資本家はW′をc+v+mに分割することに代へてW′の可除部分につき同一の分割を應用することも出來るのである。

例へばW′（綿絲一萬斤＝五萬磅）の部分として不變資本を代表する所の七四四〇斤（＝三七二磅）は、それ自身また不變部分（綿絲七四四〇斤の生産に消費された生産機關の價値）を回收するのみに止まる五五三五・三六〇斤（＝二七六・七六八磅）と、可變資本を回收するのみに止まる七四四斤（＝三七・二〇〇磅）と、餘剩生産物として餘剩價値を負擔する所の一一六〇・六四〇斤（＝五八・〇三二磅）とに分割され得る。即ち七四四〇斤を販賣する時は、その中六二七九・三六〇斤の販賣價格三一三・九六八磅を以つてこの七四四〇斤の中に含まれてゐる資本價値を回收し、餘剩生産物一一六〇・六四〇斤の價値五八・〇三二磅をば收入として支出することが出來るのである。

更らに可變資本に等しき一〇〇〇斤の綿絲（＝五〇磅）も亦、同樣に分割して順次に販賣され得る。即ちそれは綿絲一〇〇〇斤の中に含まれる不變資本の價値を回收すべき七四四斤（＝三七・二〇〇磅）と、この綿絲の中に含まれる可變資本分を回收すべき一〇〇斤（＝五磅）との和一〇〇〇斤の中に含まれる資本價値を回收すべき合計八四四斤（＝四二・二〇〇磅）と、最後にこの綿絲の中に含まれる餘剩生産物を代表し、かかる物として消費され得るところの一五六斤（＝七・八〇〇磅）とに分割し得るのである。」

最後に殘餘の綿絲一五六〇斤（＝七八磅）も、販賣が首尾よく行はれた場合には、これを次の如く分割することが出來る。――一一六〇・六四〇斤の販賣價格五八・〇三二磅は、綿絲一五六〇斤の中に含まれる生産機關の價値を回收し、一五六斤の販賣價格七・八〇〇磅は可變資本の價値を回收する。即ち合計一三一六・六四〇斤の販賣價格六五・八三二磅は、資本價値の總額を回收する譯である。かくして最後に、餘剩生産物一四三・三六〇片（＝一二・一六八磅）といふものが支出すべき收入として殘ることとなるのである。」

綿絲の中に含まれてゐる要素c v及mは、それ〴〵また同じ三要素に分割し得る。一志（＝一二斤）の價値ある各一斤の綿絲についても同樣であつて、左の如くになる。

c　＝綿絲〇・七四四斤＝　八・九二八片
v　＝綿絲〇・一〇〇斤＝　一・二〇〇片
m　＝綿絲〇・一五六斤＝　一・八七二片
c+v+m＝綿絲一・〇〇〇斤＝一二・〇〇〇片

嚢に揭げた三つの部分販賣の結果を總計すれば、一萬斤の綿絲が一括的に販賣される場合と同一の結果が得られる。」

不變資本の場合

第一販賣――綿絲五五三五・三六〇斤＝二七六・七六八磅
第二販賣――綿絲　七四四・〇〇〇斤＝　三七・二〇〇磅
第三販賣――綿絲一一六〇・六四〇斤＝　五八・〇三二磅
合計　綿絲　七四四〇・〇〇〇斤＝三七二・〇〇〇磅

可變資本の場合

第一販賣――綿絲　七四四・〇〇〇斤＝　三七・二〇〇磅

第二販賣——綿絲　一〇〇・〇〇〇斤＝　五・〇〇〇磅
第三販賣——綿絲　一五六・〇〇〇斤＝　七・八〇〇磅
合計　綿絲　一〇〇〇・〇〇〇斤＝　五〇・〇〇〇磅

餘剩價値の場合

第一販賣——綿絲一一六〇・七四〇斤＝　五八・〇三二磅
第二販賣——綿絲　一五六・〇〇〇斤＝　七・八〇〇磅
第三販賣——綿絲　三四三・三六〇斤＝　一二・一六八磅
合計　綿絲　一五六〇・〇〇〇斤＝　七八・〇〇〇磅

總計

不變資本——綿絲七四五〇・〇〇〇斤＝三七二・〇〇〇磅
可變資本——綿絲一〇〇〇・〇〇〇斤＝　五〇・〇〇〇磅
餘剩價値——綿絲一五六〇・〇〇〇斤＝　七八・〇〇〇磅
合計　綿絲一〇〇〇〇・〇〇〇斤＝五〇〇・〇〇〇磅

W′—G′は之れをそれ自體として觀察すれば、綿絲一萬斤の販賣を意味するに過ぎない。一萬斤の綿絲は、他の總べての綿絲と同樣に商品である。購買者の利害に關係する所のものは、一斤當り一志、又は一萬斤當り五百磅といふ價格である。彼れは購買の交渉中價値組成について云爲することがあるとしても、それは畢竟するところ一斤當り一志以下に綿絲を販賣し得べき事、而して斯く販賣しても販賣者は尙ほ可なりな利益を得るであらう事を證明せんとの狡猾な考を以つて爲されるに過ぎない。だが彼れの購買する綿絲の量は、彼れの要求の如何に依つて決定される。假りに彼れが機織工場の所有者であるとすれば、彼れの購買する綿絲の量はこの工場に運用される彼れ自身の資本の組成の如何に懸るのであつて、彼れに綿絲を販賣する紡績業者の資本の組成に懸るものではない。W′が一方にはその生產に消費された資本（又はこの資本の種々なる部分）を回收するに役立ち、他方に又、餘剩生產物として餘剩價値の支出なり資本蓄積なりの目的に役立たねばならぬといふ事情は、綿絲一萬斤といふ商品形態を有する資本の循環內部にのみ存在し、販賣それ自體とは何等關係する所なきものである。」尙ほ又これらについては、W′が價値通りに販賣され、隨つてその商品形態から貨幣形態への轉化のみが問題になると假定した。販賣の際、價格と價値とが互ひに一致しないかどうか、また一致しないとすれば如何なる程度まで一致しないかといふ事は、この個別的資本の循環中に生產資本を回收するといふ機能を盡す所のW′にとつては、極めて重大な問題であることは言ふまでもない。然し玆には單なる形態上の區別のみを考察しようとするのであるから、この問題については顧慮する必要はないのである。」

第一形態 G……G′に於いては、生產行程は互ひに補充し對抗する二つの資本流通段階の中間に現はれる。それは終末段階 W′—G′に入る以前既に終了してゐるのである。貨幣は資本として前貸され、先づ生產諸要素に轉化されて此等の要素から更らに商品生產物に轉化される。而してこの生產物は又、貨幣に再轉化されるのである。結果として何人にも使用し得べき貨幣を生ずるものは、實に完了した取引循環である。かくて循環の更新は、可能的にのみ與へられることとなる。G……P……G′は、取引から引き上げられた個別的一資本の機能を結了する所の最終循環ともなり、また新たに機能を開始する一資本の最初の循環ともなり得る。この場合における一般的の運動は G……G′（卽ち貨幣がヨリ多額なる貨幣に轉化される所の運動）である。

第二形態 P……W′—G′—W……P (P′) に於いては、總流通行程は第一のPに伴ひ第二のPに先だつものであつて第一形態の場合とは反對の順序に行はれる。最初のPは生產資本であり、次いで生ずべき流通行程の豫備條件たる生產行程はその機能となるのである。然るに結末のPは生產行程ではない。それは生產資本といふ形態のもとに再存在する所の產業資本を意味するに過ぎない。而してそれが斯かる形態を採るのは、最終の流通段階に於いて資本價値が A+Pm に、卽ち合して生產資本の存在形態を構成する所の主觀的因子と客觀的因子とに轉化される結果である。この第二形態の結末における資本は、それがPであるにしろP′であるにしろ、新たに生產資本として作用し生產行程を通過せねばならぬ形態のもとに完成されてゐるのである。「P……P なる運動の一般的形態となるものは卽ち再生產の形態であつて、この形態は G……G′ とは異なり行程の目的としての價値增殖を指示するものではない。」この形態はそれだけ容易に正統派經濟學をして、生產行程の一定の資本制形態を閑却せしめ、生產行程の目的は生產そのものであると主張するに至らしめたのである。」かくて正統派經濟學に於いては、出來得る限り多量に且つ價安く生產して、一部分は生產の更新(G—W)のため、一部分は又消費(g—w)のために、生產物をば出來得る限り多種に亙つた他の生產物と交換することが問題の中心となる。」この場合G及びgは消失的なる流通要具として現はれるのみであるから、貨幣竝びに貨幣資本の特質は看過され得るのである。」かくて全行程は、單純な自然的なものとなつて現はれる。語を換へていへば、淺薄なる唯理主義について言ひ得る如き自然的なものとなるのである。同樣に商品資本についても、利潤は時折り忘れられ、この資本は全體としての生產循環が問題となる場合、單に商品として言及されるに過ぎないものとなる。然るにその價値成分が問題となるや否や、それは商品資本として取扱はれる。蓄積は言ふ迄もなく、生產と同樣に取扱はれてゐる。」

第三形態 W′—G′—W……P……W′ に於いては、流通行程の兩段階に依つて循環が開始される。而してその順序は第二形態 P……P におけると同樣である。かくして循環の開始された後にPが生ずる。それは第一形態に於けるPと同樣に、生產行程を機能とするものである。」この生產行程の結果なるW′を以つて循環は終了することとなる。第二形態に於けるPは、生產資本の單なる再存在に過ぎぬものであるが、それと同樣に、この第三形態の終點たるW′は商品資本の再存在として現はれる。」第二形態に於いては、Pなる終末形態を採つた資本が生產行程としてその行程を再開始せねばならないのであるが、同樣に第三形態に於いても、產業資本が商品資本の形態に再現した後、循環は流通段階 W′—G′ を以つて新たに開始されねばならない。この二つの循環形態は未完成のものである。なぜならば、それはいづれも、貨幣に再轉化された所の、增殖を遂げた資本價値G′を以つて結了するものではないからである。隨つて此等の兩形態は更らに繼續して行はれねばならず、いづれも再生產行程を含むこととなるのである。第三形態における總循環は W′……W′ である。

第三形態をば第一及び第二形態から區別する所のものは、卽ち、この第三循環に於いてのみ、將來增殖さるべき本來の資本價値ではなく、既に增殖を遂げた資本價値が增殖の起點として現はれるといふ事實である。」この場合起點となるものは、資本關係としての′Wである。それは斯樣な資本關係として、全循環の上に決定的の影響を與へるのである。蓋し′Wの第一段階の中には既に資本價値と餘剩價値との循環が含まれてゐるのであつて、個別的の各循環は兎にかく、その平均について言へば、餘剩價値は一部的には收入として支出され w—g—w なる流通を通過すべきであり、一部的にはまた資本蓄積の要素として作用せねばならないからである。」

W′……W′ なる形態に於いては、商品生產物總體の消費が、資本循環そのものの順當な進行の條件として前提され

てゐる。勞働者に依る個人的の消費と蓄積されざる餘剩生產物部分の個人的消費とは、個人的消費の總體を包括するものである。かくして消費の全部、卽ち個人的消費と生產的消費との總體がW′の循環の條件となるのである。生產的消費（それは當然に勞働者に依る個人的消費をも含む。蓋し勞働力なるものは、一定の限界內について言へば、勞働者に依る個人的消費の不斷の產物であるから）は、個々の各資本それ自體に依つて爲される。個々の資本家の生存に必要であるといふ意味の消費以外の個人的消費は、社會的の行爲としてのみ假定されるものであつて、決して個々の資本家の行爲として假定されるものではないのである。

第一及び第二形態における總運動は、前貸資本價値の運動として表現される。第三形態に於いては、商品生產物の總體といふ姿容を採つた增殖せる資本が起點となるのであつて、この資本は自ら運動する所の資本といふ形態を、商品資本といふ形態を有してゐる。それが貨幣に轉化された後、初めてこの運動は資本運動と收入運動とに分割されるのである。社會的の總生產物と、各個の商品資本に依る特殊の生產物とが、一方には個人的の消費基金、他方には再生產基金に配分されるといふ事實は、この第三形態に於いては資本循環の中に包含されてゐるのである。

G……G′ の中には、循環の可能的擴大が含まれてゐる。而してこの擴大の程度は、更新された循環の內部に入るgの大小に依つて決定されるのである。

P……P に於いては、Pは同一又は恐らくヨリ小なる價値を以つて新たなる循環を開始し、而も規模の擴大された再生產を代表することが出來る。例へば勞働生產力が增進する結果、商品諸要素の價が安くなる場合の如きそれである。反對に、例へば生產諸要素の價が高くなる場合には、價値の增大した生產資本は素材的規模の縮小された再生產を代表することが出來る。これは W′……W′ についても言ひ得る事である。

個人的消費と生產的消費と積極的W′の循環の條件となる？

W′……W′ に於いては、商品形態における資本が生產の前提條件となつてゐる。それはこの循環の內部に於いて、かかる前提條件として第二のWに再現するのである。このWが尙いまだ生產されず再生產されて居らないとすれば、循環は阻止される。このWは、大抵みな他の產業資本のW′として再生產されねばならぬものである。この循環に於いては、W′は運動の起點ともなり、經過點ともなり、終點ともなり、かくして不斷に存在することとなる。それは再生產行程の不斷の條件となるのである。

W′……W′ は又、他の一要素に依つても第一及び第二形態から區別される。資本がその循環行程を開始する形態は、同時に又それを結了せしめる所の形態でもあるといふ事實、隨つて資本が同一の循環を新たに開始すべき發端形態を再び採るやうになるといふ事實は、三つの循環のいづれにも共通する所である。發端形態たるGとPとW′は常に、資本價値の（第三形態に於いては、その增殖分たる餘剩價値と合して）前貸さるべき形態となるものであり、換言すれば、循環上における資本價値の本來の形態となるものである。而して終末形態たるG′とPとW′は常に、循環の內部に於いて先行する所の、本來の形態とは異なつた一つの機能的形態の轉化されたものである。

卽ち第一循環におけるG′はW′の轉化された形態であり、第二循環における終點PはGの轉化された形態であり（而して第一及び第二循環における此等の轉化は、商品流通といふ單純な行程に、換言すれば、商品と貨幣との形式的な位置轉換に基因するものである）、第三形態におけるW′は生產資本Pの轉化された形態である。だが、この第三循環における轉化は、先づ資本の機能的形態について行はれるのみではなく、又その價値量についても行はれる。次にこの轉化は、流通行程の領域に屬すべき單なる形式的な位置轉換の結果たるのみではなく、また生產資本の商品諸成素の使用價値と價値とが生產行程の內部に經驗するところの現實的轉化の結果ともなつてゐる。

發端形態たるGとPとW′は、第一、第二及び第三循環の各の前提となるものであり、終點に於いて再現する所の形態は循環そのものの轉形列に依つて與へられ、隨つてこの轉形列を條件とするものである。個別的な一産業資本の循環の終點たるW′は、その源泉たる同じ産業資本が流通の外部に於いて採る所の形態Pを前提するのみである。第一循環の終點であり、W′（W′—G′）の轉化された形態であるG′は、購買者の手に在るGを前提する。このGはG……G′なる循環の外部に存在するものであるが、W′の販賣に依つてこの循環の内部に引き入れられ、その終末形態たらしめられるのである。同様に第二循環における終點Pは、循環の外部に存在する所の、而してG—Wに依つて循環と合體しその終末形態となる所のA及びPm（W）を前提する。けれどもこの終點を問題外に置いて考へるならば、個別的貨幣資本の循環はその内部における貨幣資本一般の存在を前提するものではなく、また個別的生産資本の循環はその内部における生産資本の存在を前提するものではない。第一循環に於いては、Gが歴史的の舞臺に登る最初の貨幣資本たることを得るものであり、第二循環に於いては、Pが斯くの如き最初の生産資本たることを得るものであるが、

$$\left.\begin{matrix} W— \\ W' \\ w— \end{matrix}\right\}\begin{matrix} G—W\begin{matrix}A\\P_m\end{matrix}\cdots\cdots P\cdots\cdots W' \\ —G' \\ g—w \end{matrix}$$

なる第三循環に於いては、循環の外部に存在するWが二重に假定されることとなるのである。それは先づ、W′—G′—W$\begin{matrix}A\\P_m\end{matrix}$なる循環に於いて假定されてゐる。このWはPから成るものとして見れば、販賣者の手に存在する限り商品である。それは資本制生産行程の生産物である限り、それ自身商品資本であるが、然らざる場合にも商人の手に在る間は商品資本として現はれるのである。次に w—g—w の第二のwに於いても、循環の外部に存在するWが假定されてゐる。このwも亦、購買され得るためには商品として存在して居らねばならない。商品資本であるにしろ、ないにしろ、兎にかくA及びPmはW′と同様に商品であつて、互ひに商品として關係してゐる。w—g—w における第二のwについても同様である。卽ちW′は W(A+Pm) に等しき限り商品を形成要素とするものであつて、流通の内部に於いて同一の商品に依つて代位されねばならない。同様に w—g—w に於いても、第二のwは流通の内部に於いて同一の商品に依つて代位されることを要するのである。」

尙また、資本制生産方法が專ら行はれてゐる社會に於いては、販賣者の手に在る一切の商品は商品資本でなければならない。それは商人の手に移つた後にも尙この性質を維持してゐる。或は最初商品資本でなかつたとすれば、商人の手に移つたとき初めて商品資本となる。或はまた本來の商品資本に取つて代り、かくして異なつた存在形態をそれに與へるといふに過ぎない商品（例へば輸入品）でなければならない。

生産資本を構成する所の商品要素A及びPmは、これをPの存在形態として見れば、もはやそれが蒐集される異なつた商品市場に在る場合と同一の姿容を有するものではない。それは今や互ひに結合されて居り、かく結合されたものとして生産資本たる機能を盡し得るのである。」

斯くの如く、この第三形態を以つてのみWは循環それ自身の内部にWの前提條件として現はれるのであるが、それは畢竟するところ商品形態における資本が循環の起點となつてゐる結果である。この循環はW′が（餘剩價値の追加に依つて增大せると否とを問はず、兎にかく資本價値として作用する限り）その生産諸要素たるべき商品に轉形することに依つて開始される。然るにこの轉形は W—G—W（=A+Pm）なる流通行程の全部を包括すると同時に、その結果ともなるのである。この流通行程の兩極にはWが置かれてある。けれども第二の極は、外部における商品市場から

G—W を通してWなる形態を受けるのであつて、それは循環の終末の極ではなく、寧ろ循環の最初の二段階——流通行程を包括する所の——の終末の極となるのである。その結果として現はれるものは、次いで機能を開始すべき生産行程Pである。W′は流通行程の結果としてではなく、この生産行程の結果たる資格に於いて初めて循環の終點となり、起點のW′と同一の形態を採つて現はれるのである。

然るに G……G′ 及び P……P の終末の極たるG′及びPは、流通行程の直接の結果である。即ちこの場合には終末の極に於いてのみ、一方のG′と他方のPとは他人の手に存在するものと假定されるのである。兩極間に循環が行はれるといふ點から見れば、一方のGも、他方のPも、即ち他人の貨幣としてのGの存在も、他人の生産行程としてのPの存在も、この循環の前提條件として現はれるものではない。反對に W′…… W′ なる循環は、他人の手に所有される商品としてのW（＝A+Pm）の存在を前提する。このWは發端の流通行程に依り循環の內部に引き入れられて、生産資本に轉化され、かかる生産資本の機能の結果として今やまたW′が循環の終末形態となるのである。

W′…W′ なる循環は、その進行の內部に於いて、W（＝A+Pm）なる形態を採つた他の資本の存在を前提し、且つPmは他の樣々な種類の資本（即ち上例について言へば機械、石炭等）を包括するものであればこそ、また當然にこの循環は一般的の循環形態として、換言すれば最初に放下される場合を除き各個の產業資本が考察され得る社會的な一形態として、隨つて又すべての個別的產業資本に共通した運動形態としてのみ觀察すべきではなく、更らに個別的諸資本の總計（即ち資本家階級の總資本）の運動形態としても觀察すべきものとなつて來る。この總資本の運動のもとに於いては、個々の產業資本の運動は相互に錯交し相互に條件となる所の部分運動として現はれるに過ぎないのである。例へば一國に於いて一年間に產出される商品生產物の總額を考察して、その一部が凡ゆる個別的營業における生產資本に取つて代り、他の一部が種々なる階級の個人的消費に歸する運動を分析するとき、W′……W′ は社會的資本及びそれに依つて生產される餘剩價値又は餘剩生產物の形態として觀察されることとなる。社會的資本なるものは個別的諸資本（株式資本、竝びに政府が鑛山、鐵道等に生產上の賃銀勞働を充用し、產業資本家たる職分を盡す場合について言へば國家資本をも含む）の總額に等しく、而して社會的資本の總運動は個別的諸資本の運動の代數的總和に等しいといふことは、決して左の事實を除外することにはならない。即ち相隔絕した個別的諸資本の運動として見たこの運動は、これを社會的資本の總運動の一部といふ見地のもとに觀察した場合、隨つてまた社會的資本の他の各部分の運動と關聯させて觀察した場合見出される所とは異なつた現象を呈するものであり、且つ又かく觀察した運動は、個別的資本の循環の考察に依つて與へられる解決ではなく、寧ろその前提たるべき解決を要する諸種の問題を解決せしめるといふ事がそれである。

W′……W′ は本來前貸された資本價値を運動の起點たる價値の一部たらしめ、かくしてこの運動を最初から產業資本の總運動として示す所の唯一の循環である。この運動は生產資本を償ふべき生產物部分の運動と、平均的に言へば一部分は收入として支出され、一部分は又蓄積の要素として役立つべき餘剩生產物部分の運動との雙方を含むものである。收入として爲される餘剩價値の支出が、この循環の中に含まれてゐる限り、個人的消費も亦その中に含まれることとなる。この個人的消費は更らに起點のW（商品）が何等かの使用品として存在するといふ理由に依つても右の循環中に含まれるのである。然るに資本制生產方法のもとに生產された物品は、その使用形態の上から見て生產的消費に充てらるべきものであるにしろ、個人的消費に充てらるべきものであるにしろ、或は又その雙方に充てらるべきものであるにしろ、いづれにしても商品資本たることに變りはない。G……G′ は價値方面を、換言すれば全行程の目

的として行はれる前貸資本價値の增殖を指示するのみであり、P……P(P′)は生産資本量の不變又は增大(蓄積)を伴ふ再生産行程としての資本の生産行程を指示するのみであるが、W′……W″はその起點に於いて既に資本制商品生産なる姿容を示すものであつて、最初から生産的消費と個人的消費との雙方を含み、生産的消費とそれに含まれる價値增殖とはこの循環の運動の分枝として現はれるに過ぎない。最後に、W″はもはや何等の生産行程にも入り得ざる使用形態を採り得るものであるから、各生産物部分に依つて言ひ現はされたW″の種々なる價値部分はW″……W″が社會的總資本の運動形態と見做されるか、それとも個々の産業資本の獨立した運動と見做されるかに從つて、種々異なつた位置を占めねばならぬことは最初から明かな事實である。此等すべての特質に依つて、この第三循環は單なる個別的資本の相互隔絶した循環以上のものを含むことが推知される。」

商品資本（換言すれば、資本制生産方法に依つて産出される總生産物）の運動は W′……W″ なる公式に於いては、個別的資本の獨立した循環の前提條件としても結果としても現はれる。さればこの公式の特質を捕捉するには最早、W′…… G′ 及び G—W なる轉形が一方には資本轉形の機能的に限定された部分であり、他方には一般的商品流通の分節であるとの理解を以つて滿足するのみでは十分でない。更らに個々の資本の轉形が、相互に總生産物中の個人的消費に充てらるべき部分と錯綜する事實をも明かにすることが必要になつて來る。そこで個別的な産業資本の循環を分析するには、主として最初の兩形態を基礎とするのである。

W′……W″ なる循環は、例へば收穫毎に計算を行ふ農業の如きに於いては、個別的な單一資本の形態として現はれる。第二の公式に於いては播種が起點となり、第三の公式に於いては收穫が起點となる。又はフォジオクラットの言葉を借りていへば、前者は前貸から出發し、後者は回收から出發するのである。第三の公式に於いては、資本價値の運動は最初から一般的な生産物量の運動の一部として現はれるのみであるが、第一及び第二の公式に於いては、W′の運動は單一資本の運動の一段階となるに過ぎない。」

第三の公式に於いては、市場に存在する商品は生産行程並びに再生産行程の不斷の前提條件となる。故にこの公式を固定したものとして考へれば、生産行程の凡ゆる要素は商品流通から生じ、專ら商品のみより成るものの如く見えて來る。かかる片手落な見解は、商品要素から獨立した生産行程上の諸要素を看過する所以となるのである。」

W′…… W″ に於いては總生産物(總價値)が起點となるのであるから、生産力に變化なきものとして、規模の擴大された再生産（外國貿易のことは暫く措き）が行はれ得るのは、餘剩生産物中の資本化さるべき部分が既に追加生産資本の素材的要素を含んでゐる場合にのみ限られるといふ結論が生じ、隨つて或る一年の生産が翌年の生産の基礎となるに役立ち、又はこの生産が同一年間に於ける單純なる再生産と同時に行はれ得る限り、餘剩生産物は之れを追加資本として作用することを可能ならしむる形態のもとに即時に生産されるといふ結論が生じて來る。」生産力の增進なるものは、資本の價値を增加することなくして資本の素材を增大し得るに過ぎないのであるが、それと同時に又、價値增殖の追加的材料ともなるのである。」

W′…… W″ はケネーの『經濟表』の基礎となつたものであつて、彼れが G…… G″（マーカンチリズムに依つて隔絶的に樹立された公式）の對立公式として寧ろこの形態を採り P…… P を採らなかつたといふ事は、彼れの眼識の偉大にして且つ正確であつた所以を證明するものである。」

第四章　循環行程の三公式

總流通行程を示すにCkを以つてするとすれば、上記の三公式は左の如く表現せられ得る。

(I)　G—W……P……W'—G'

(II)　P……Ck……P

(III)　Ck……P (W')

此等三つの形態を總括して考へるならば、循環行程の前提は總べてその結果として、循環行程それ自身に依つて造られる前提として現はれることが知られる。いづれの要素も起點、經過點及び復歸點として現はれ、總行程は生產行程と流通行程との合成として表現される。生產行程は流通行程の媒介となり、また反對に流通行程は生產行程の媒介となる。」

價値の增殖が決定的の目的であり起動動機であることは、三循環のいづれにも共通する所である。この事實は第一公式の場合には、形態の上に言ひ現はされてゐる。第二公式はPに依つて代表される所の價値增殖行程其ものを以つて始まり、第三公式に於いては、運動が同一の規模で反復される場合にも、循環は增殖を遂げた價値を以つて開始され、新たに增殖した價値を以つて終了するのである。」

W—G は購買者から見れば G—W であり、G—W は販賣者から見れば W—G である限り、資本の流通は通例の商品轉形を表現するに過ぎず、商品轉形の攻究の際（第一卷、第三章、第二節）明かにした流通貨幣量の法則が行はれることとなるのである。」けれども斯かる形式的方面に拘泥することなく、種々異なつた個別的資本の轉形の現實的聯絡を考察し、かくして實際のところ、社會的總資本の再生產行程の部分運動として見た個別的資本の循環の聯絡を攻究する段になると、貨幣と商品との間に行はれる單なる形態變化を以つてしては、何等の說明も與へられないこととなる。

絕えず旋轉する圓線の如何なる點も、起點たると同時に復歸點ともなるものである。若しこの旋轉を中絕するとすれば、如何なる起點も同時に復歸點となることはない。そこで特殊の各循環は他の循環の存在を（含蓄的に）前提することとなるが、單にそれのみではなく、一つの形態における循環の反復は他の形態における循環の進行を含むことも、我々の既に見た所である。」かくて全區別は、單なる形式上の區別、又は單なる主觀的の、ただ觀察者の側にのみ存在する所の區別として表現されることとなる。」

此等の循環の各が、種々異なつた個別的產業資本の運動の特殊形態と見做される限り、その相互間の差異も亦つねに個別的の差異として存在するのみである。」けれども現實に於いては、如何なる個別的產業資本も三循環の總べての中に同時に含まれてゐるのである。」三つの資本形態の再生產形態たる此等の三循環は、互ひに竝行して連續的に行はれる。」例へば、現在商品資本として作用しつつある資本價値部分が貨幣資本に轉化されると同時に、資本價値の他の一部は生產行程を出で新たなる商品資本として流通の內部に入る。」かくして W'……W' なる循環形態が不斷に通過されることとなるのである。」他の兩形態についても同樣である。」如何なる形態、如何なる段階における資本の再生產も、各資本形態の轉形及び各資本形態が三段階を通過する逐次的の運動と同樣に連續的のものである。」かくて總循環は、三つの循環形態を現實的に合一したものとなるのである。」

我々の考察に於いては、資本價値の總量が貨幣資本なり、生産資本なり、又は商品資本なりとして作用すると假定した。たとへば上例の四百二十二磅は、最初悉く貨幣資本として存在してゐた。然る後、その全部は生産資本に轉化され、最後に商品資本たる五百磅（七十八磅なる餘剰價値を含む）といふ價値の綿絲として存在することとなつた。この場合、種々なる段階はそれ〴〵行程の中絶を意味するものである。たとへば、右の四百二十二磅が貨幣形態を保持する限り、換言すれば購買 G—W(A+Pm) が完了するに至る迄の間、總資本は單に貨幣資本として存在し作用するに過ぎない。それは生産資本に轉化されるや否や、もはや貨幣資本としても商品資本としても作用せず、その流通行程總體が中絶することとなる。」同様に、總資本が兩流通段階の一つに於いてGなりW′なりとして作用するに至つた場合にも、流通行程總體は中絶することとなるのである。かくて P……P なる循環は單に生産資本の週期的更新として表現されるのみではなく、また流通行程を通過する迄の間は、生産資本の機能なる生産行程の中絶としても表現されるのである。生産は連續的ではなく間歇的に行はれる。而してそれは、流通行程の兩段階が急激に通過されるか緩漫に通過されるかに從つて差異を生ずる所の偶然的な持續期間を通過した後にのみ、更新されることとなるのである。これは例へば、私顧客のためにのみ勞働し、新たなる註文を受くる迄は生産行程を中絶しなければならぬ支那の手工業者について見られる所である。」

左に述ぶる所は實際、運動を行つてゐる各個の資本部分について言ひ得ることであつて、資本の如何なる部分も順次に斯かる運動を通過するのである。例へば上記の綿絲一萬斤は、一紡績業者に依る一週間の生産物である。この一萬斤の綿絲は全部生産部面から流通部面に移轉されるものであつて、その中に含まれてゐる資本價値は悉く貨幣資本に轉化されなければならない。而してこの資本價値は、貨幣資本なる形態を保持する限り、新たに生産行程に入ることは不可能である。それは豫め流通の内部に入り、生産資本の要素 A+Pm に再轉化されることを要する。」資本の循環行程は不斷の中絶を意味する。」それは一つの段階を去つて、次の段階に入ることを意味し、一つの形態を捨てて、他の形態を採ることを意味するのである。」而して此等の段階はいづれも次に來たるべき段階の條件となるのみではなく、又それを除外するものともなるのである。」

けれども連續は資本制生産の特徴たるものであつて、資本制生産の技術的基礎に依つて必要とされるものである。尤もこれは必ずしも、無條件的に達成され得るとは限らない。そこで、この事實が現實上には如何に行はれてゐるかを見よう。例へば一萬斤の綿絲が商品資本として市場に入り、貨幣（それが支拂要具であるか、購買要具であるか、それともまた單なる計算貨幣であるかを問はず）に轉化されつつあるとき、新たなる棉花、石炭などが生産行程においてこれに代るのである。即ち此等の物は、貨幣形態及び商品形態から生産資本たる形態に再轉化されて、生産資本たる機能を開始するのである。」また右の一萬斤が貨幣に轉化されつつあるとき、それ以前の一萬斤は既に流通の第二段階を通過し、貨幣から生産資本の諸要素に再轉化されてゐるのである。」資本の一切部分は順次に循環行程を通過するものであつて、いづれも同時に種々異なつた段階を占めてゐる。」かくて産業資本なるものは、その連續した總べての流通段階の下に、それに照應した各種の機能形態を以つて、同時に存在することとなるのである。」初めて商品資本から貨幣に轉化される所の産業資本部分が W′……W′ なる循環を開始しつつあるとき、全一的な運動體としての産業資本は既にこの循環を通過してゐる。」貨幣は一方の手を以つて前貸され、他方の手を以つて收納されるのである。」或る一點における G……G′ なる循環の開始は、同時に又、他の一點における同一循環の復歸を意味する。」これは生産資本についても、同様に言ひ得る事である。

されば、産業資本の現實的な循環を連續したものとして見るとき、それは單に流通行程と生産行程との合成たるのみではなく、また三循環の總べてを合成したものともなるのである。然しそれが斯かる合成を意味し得るといふ事は、資本の各異なつた部分が相互連續した循環段階を逐次的に通過し、一つの段階、一つの機能形態から、他の段階他の機能形態に推轉することができ、かくして此等の部分の總合體としての産業資本が各種の段階及び機能のもとに同時に存在し、同時に三循環の總べてを通過する限りに於いてのみ行はれるのである。この場合における各部分の連繫は、その竝存に依つて、換言すれば資本の分割に依つて條件づけられる。故に組織的な工場制度のもとに於いては生産物は一つの生産部面から他の生産部面へ移動しつつ、同樣に又絶えずその形成行程の各段階を占めることとなるのである。個別的の産業資本は、資本家の資力から獨立した一定の大小を表現し、而してこの大小はまた各産業部面に於いて一定の最低限界を與へられてゐるものであるから、かかる産業資本の分割は一定の比率に從つて行はれねばならぬこととなる。與へられたる資本の大小は生産行程の範圍を決定し、生産行程の範圍はまた生産行程と同時に作用するといふ方面から見た商品資本竝びに貨幣資本の大小を決定する。生産の連續を可能ならしむる機能の竝存は、逐次的に各種の段階を通過する資本部分の運動に依つてのみ與へられる。竝存それ自身が連續の結果に外ならないのである。

例へば、資本の一部にとつて W'……G' が停頓し、商品が販賣不可能となつたとすれば、この資本部分の循環は中絶して生産機關への轉化は行はれず、續いて W' なる形態を以つて生産行程から生じて來る各資本部分は、かかる先行部分に依つて機能の轉化を阻止されることとなる。斯種の現象が若干の期間持續するとき、生産は制限されて全行程は休止してしまふ。連續の上に停頓が生ずる毎に、竝存は混亂に陷り、一つの段階が停頓を來たす毎に、單に斯かる停頓を受けた資本部分の循環のみではなく、また個別的資本部分全體の總循環の上にも大なり小なりの停頓が生ずることとなるのである。

この行程を表現する所の直接的形態となるものは即ち、資本が新たなる一段階に入るのは他の段階を脱却した結果であるといふ風に、各種の段階が相互連繫するといふ形態これである。隨つて特殊の各循環は、資本の機能形態の一つを起點とし復歸點とするやうになる。他方にまた、總行程は實際のところ、行程の連續を言ひ現はす相異つた形態となる所の三循環を合成するものであつて、資本の各機能形態から見れば、總循環は特殊の循環として表現される。而して又、此等の循環の各は總行程の連續の條件となり、一つの機能形態の循環は他の機能形態の循環を必要とするものである。總生産行程が同時に再生産行程であり、隨つてその各要素の循環であるといふ事は、總生産行程それ自身特にまた社會的資本にとつて必要な條件となるものである。資本の各部分は各種の段階及び機能形態を逐次的に通過するものであつて、これがため各種の機能形態はつねに資本の他の部分を表現するとはいへ、いづれも時を同じうして自己の循環を通過することとなる。然るに絶えず變動し絶えず再生産される資本の一部は、貨幣に轉化さるべき商品資本として存在し、他の一部は生産資本に轉化さるべき貨幣資本として、第三の部分は又商品資本に轉化さるべき生産資本として存在してゐる。三つの形態の總べてが不斷に存在するといふ事は、總資本が正に此等の三段階を通じて循環するといふ事實に依つて媒介されるのである。

即ち全一體として見た資本は、空間的に相竝んで同時に各段階を占めるのである。けれども各部分は絶えず順次に、一つの段階、一つの機能形態から、他の段階、他の機能形態に移動し、隨つて順次に總べての段階の下に作用することとなる。要するに此等の形態は流動的な形態であつて、その同時竝存は逐次連續に依つて媒介されるのである。各

形態は相互に隨伴し先行するものであつて、一つの資本部分が一つの形態に復歸することは、他の資本部分が他の形態に復歸することと相須つのである。各部分は絶えずそれ自身の流通を通過してゐる。けれども斯くの如き一定の形態を採るものは常に他の資本部分であつて、此等特殊の諸流通は總經過の同時的にして且つ逐次的な要素となるに過ぎないものである。」

三循環が合一した場合にのみ、總行程の上述の如き中絶が行はれないで連續が實現される。社會的の總資本は常にこの連續性を有し、その行程は常に三循環の合一を基礎とするものである。」

個々の資本について言へば、再生産の連續は、此處彼處に多かれ少なかれ中絶を與へられる。第一に、價値量が種種異なつた時期に、不等の比率を以つて、各種の段階及び機能形態に配分されることは屢々見受けられる所である。第二に、生産さるべき商品の性質、隨つてまた資本が放下される特殊生産部面の如何に從つて(1)、此等の比率の配分は種々異なり得るのである。第三に、自然條件に基く場合（農業、鰊漁等）にしろ、傳習的の事情に基く場合（一例を擧ぐれば、謂ゆる季節勞働なるもの）にしろ、兎にかく季節に依存する所の生産部面に於いては、生産の連續は多かれ少なかれ中絶することとなる。この行程が最も規則正しく劃一的に進行する所は即ち工場と採鑛業とである。然し生産部面における斯くの如き差異は、循環行程の一般的形態の上には何等の差異をも生ぜしめるものではない。」

自己增殖を遂ぐる價値として見た資本は、賃銀勞働なる形態を採つた勞働の存在に基く一定の社會的性質である所の階級關係を含むのみではない。それは更らに、各種の段階を通過する所の運動であり、循環行程たるものであつてこの行程はそれ自身また循環行程の相異なつた三段階を含むものである。故に右の資本は、運動とのみ見做し得るものであつて、靜止物とは見做し得ないのである。價値の獨立化をば單なる抽象に過ぎないと見る人々は、産業資本の運動が抽象を實現したものである事を忘れてゐるのである。價値はこの場合、自己を保存せしむると同時に又發展し增大せしむる所の種々なる形態、種々なる運動を通過する。」この場合先づ問題となる事は、單なる運動形態に過ぎないのであるから、資本價値がその循環行程中に受くる諸種の革命は考慮されないこととなる。」然し如何なる價値革命が行はれるにしても、資本價値が自己增殖を遂げ、換言すれば獨立した價値(2)として循環行程を通過するといふ條件を離れ、隨つて價値革命が如何やうにか克服され均衡に歸せしめられるといふ條件を離れては、資本制生産なるものは存在し得ず持續し得ない事は明かである。資本の諸運動は、個々の産業資本家が商品及び勞働の購買者としての機能及び商品販賣者竝びに生産資本家としての機能を盡す場合における行爲、換言すれば己れ自身の活動に依つて循環を媒介する所の行爲として現はれる。」社會的の資本價値が一つの價値革命を受けるとすれば、個々の資本はその犧牲となつて目的を達することが出來なくなる。」なぜならば個々の資本は、かかる價値運動の條件を充たし得るものではないからである。」價値革命が急性となり頻繁となるに從つて、獨立した價値が元素的な自然行程の如き强力を以つて作用する自動的の運動はます〳〵個別的資本家の先見と打算とに對抗し、生産の順當な進行はます〳〵變則的な投機のもとに屈服することとなり、」個別的資本の存在に對する危險はます〳〵大となるのである。」かくてこの週期的な價値革命は、それに依つて否定されると見られてゐる事實をば却つて確證することとなる。」その事實とは即ち、資本としての價値が經驗し且つ己れの運動に依つて維持增進する所の獨立化を謂ふのである。」

循環資本の斯かる轉形順列は、原價値と循環中に變化する資本の價値量との不斷の比較を含むものである。價値形成力たる勞働力に對立して行はれる價値の獨立化は、G—A（勞働力の購買）なる取引に依つて誘起され、生産行程の持續中勞働力の搾取として實現されるものであるが、斯かる價値獨立化は此循環の內部に再現するものではない。蓋

し此循環の内部に於いては、貨幣と商品と生産要素とは循環する資本價値の交互的形態たるに止まり、而して過去における價値量が現在における變化した資本價値量と比較されるに過ぎないからである。」

ベーリーは資本制生産方法の特徴たる價値獨立化を以つて、若干の經濟學者の幻想となし、これに反對して次の如く言つてゐる。――『價値とは同時に存在する商品と商品との間の關係である。なぜならば斯くの如き商品に限つて相互に交換され得るからである』と。彼れは異つた時期における商品價値を相互比較する事に反對して斯く言つたのであるが、かかる比較は、各時期の貨幣價値を固定したものと假定する限り、同一種類の商品の生産に必要な各時期に行はれる勞働支出間の比較を意味するに過ぎない。かくの如き比較は、交換價値を以つて價値に等しきものとなし、價値の形態を價値それ自身と同一視する彼れの一般的な錯誤的見解に基くものである。この見解に依れば、商品價値なるものは、それが能動的に交換價値たる機能を盡くすことなく、現實に於いて相互交換し得ざるものとなるとき、相互に比較し得なくなるのである。要するに價値なるものは、同時に存在することなく寧ろ相次いで生ずる所の種々なる循環段階を通じて價値たる性質を維持し、價値として相互比較される限りに於いてのみ、資本價値又は資本として作用するといふ事實については、彼れは些かも氣づいて居らなかつたのである。

循環の公式を純粋の形に考察するには、商品が價値通りに販賣されると假定するのみでは十分でない。更らに此販賣は、他の事情が不變であるといふ條件のもとに行はれると假定しなければならない。例へば P……P なる形態を採り、而して一定の資本家の手に存する生産資本の價値を低減せしめ得べき、生産行程の内部に生ずる一切の技術的革命と、生産資本の價値要素の上に生ずる變化が既に與へられてゐる商品資本の價値に及ぼす一切の反應作用（商品資本の在庫品が存する場合、その價値は斯かる變化に依つて、或は昂騰し、或は低減することを得るのであるが）とを問題外に置いて考へて見よう。一萬斤の綿絲W′は、その價値五百磅を以つて販賣されるものと假定する。その中の八千四百四十斤卽ち四百二十二磅を以つて、W′に含まれてゐる資本價値は回收されることとなる。然るに棉花、石炭などの價値が昂騰するとすれば（この場合、單なる價格變動のことは問題外に置く故、かく假定するのである）、右の四百二十二磅を以つてしては生産資本の諸要素を全部回收するには恐らく十分でなくなるであらう。かくて追加の貨幣資本が必要となり、貨幣資本は拘束されることとなる。棉花、石炭などの價格が下落する場合には、反對の結果が生じて、貨幣資本は遊離することとなるのである。價値關係が不變なる場合にのみ、この行程は全く順當に行はれる。循環の反復中に生ずる諸種の攪亂が相互平均に歸する限り、この行程は事實に於いて行はれるのである。かかる攪亂が大なれば大なる程、その平均化の生ずるまで維持し得る爲に産業資本家の所有せねばならぬ貨幣資本はます〳〵大となる。而して資本制生産の發達中個別的なる各生産行程の規模は擴大し、隨つて前貸すべき資本の最低限量は增加を來たすものであるから、産業資本家の諸機能をば、ます〳〵個人的又は結合的の大なる貨幣資本家の獨占に轉化せしめる事情は、右の事實に依つて更らに新たなる一因子を加へられることとなるのである。」

茲についでながら一言して置きたいことは、生産要素の價値が變化を受けるとき、一方における G……G′ と、他方における P……P 及び W′……W′ との間に一つの區別が生ずるといふ事である。

初めて貨幣資本なる機能を盡す新たに放下された資本の公式としての G……G′ に於いて、若し生産機關（例へば原料、助成材など）の價値が低落するとすれば、一定の規模の營業を開始するに必要な貨幣資本の支出は、この價値低落が行はれる以前に比して減少することとなるであらう。蓋し生産力に變化なき限り、生産行程の規模の大小は一定量の勞働力に依つて取扱はれ得る生産機關の分量及び範圍の大小に懸るものであつて、生産機關の價値にも勞働力

の價値にも倚存するものではないからである。後者は價値增殖の大小に影響を及ぼすのみである。反對に、生產資本の要素たるべき商品の生產要素に價値騰貴が生ずるとすれば、一定規模の營業を開始するに必要な貨幣資本はヨリ大となる。此等の兩場合を通じて影響を受くるものは、新たに放下さるべき貨幣資本の量のみである。新たなる個別的資本の追加が一定の生產部門に於いて通例の形に行はれる限り、貨幣資本は右の第一の場合には過剩となり、第二の場合には拘束されることとなる。

P及びW'の運動が同時に蓄積を意味し、追加的の貨幣gが、貨幣資本に轉化される限りに於いてのみ、P……P及び W'……W' なる循環は、G……G' として表現される。この場合を除いて考へるならば、此等の循環が生產資本の諸要素の價値變動に依つて受ける影響は、G……G' に與へられる影響とは異なる所があるのである。かかる價値變動が生產行程を通過しつつある資本部分の上に及ぼす反應作用のことは、この場合にも問題外に置いて考へる。この場合、直接的の影響を受けるものは本來の投資ではない。かかる影響を受けるものは、最初の循環を遂げる產業資本ではなく、再生產行程を通過しつつある產業資本であり、W'……W'^APm（卽ち商品資本が商品から成る所の生產諸要素に再轉化される行程）である。價値又は價格が低落するとき、その結果として三つの場合が可能である。第一に再生產行程が同一の規模を以つて持續されること。この場合には、現實的の蓄積（規模の擴大された再生產）、又は其誘因たり結果たるg（餘剩價値）の蓄積基金化が豫め行はれることなくして、從前充用されてゐた貨幣資本の一部は遊離されて貨幣資本の蓄積が生ずることとなる。第二に、技術上の比例が許す限り、再生產行程は他の場合におけるよりも大規模に擴張されること、第三に、原料其他の物のヨリ大なる在庫品が準備されるやうになることである。〉

商品資本を回收すべき諸要素の價値が增騰する場合には、右と反對の結果が生ずる。かかる場合には、再生產は最早順當な規模を以つては行はれなくなつて、例へば從業時間を短縮するやうになるか、又はこれを舊來の規模通りに持續する必要上追加的の貨幣資本を使用せねばならなくなつて、貨幣資本の拘束を來たすやうになるか、或は蓄積用の貨幣基金が存在する場合に就いて言へば、その全部なり一部なりを再生產行程の擴張に充用しないで、舊來通りの規模における再生產行程の經營に充用するかの、三つの場合が生じ得る。この第三の場合にも、貨幣資本の拘束が行はれる。ただ異なる所は、この場合の追加的貨幣資本は外部の貨幣市場から來ないで、產業資本家自身の財源から來るといふ一點のみである。」

けれども P……P 及び W'……W' なる循環に於いては、諸種の變象が生じ得る。例へば曩の紡績業者が多量の棉花在庫品を有し、隨つて彼れの生產資本の大なる部分が棉花在庫品として存在する場合に、棉花の價格が下落するとすれば、彼れの生產資本の一部は價値低減を來たすこととなる。反對に棉花の價格が騰貴するとすれば、彼れの生產資本の此部分は價値騰貴を來たすこととなる。他方に又、彼れが其資本の少なからざる部分を商品資本例へば綿絲に固定せしめてゐるとすれば、棉花の價格が下落する結果彼れの商品資本の一部、總じて又循環を遂げつつある彼れの資本の一部は價値消滅を來たし、棉花の價格が騰貴する場合には反對の結果を生ずる。最後に W'—G—W^APm なる行程に於いて、Wの諸要素が價値變動を受くる以前 W'—G（卽ち商品資本の實現）が行はれるとすれば、資本は右の第一場合に考察した如くにしてのみ、卽ち第二の流通段階 G—W^APm に於いてのみ影響を受ける。けれども斯かる價値變動が W'—G の實現以前に生ずるとすれば、他の事情に變化なき限り、棉花の價格下落に應じて綿絲の價格は下落し、反對に棉花の價格騰貴に應じて綿絲の價格は騰貴することとなる。卽ち同一の生產部門に投ぜられる樣々な個別的資本の受くる影響は、此等の資本の存在し得べき事情の如何に從つて著しく異なり得るのである。」

貨幣資本の遊離及び拘束は更らに、流通行程の持續期間の差異、換言すれば流通速度の差異に依つても生じ得る。然し之れは資本の回轉を攻究する際取扱ふべきであつて、玆にはただ生產資本の諸要素の價値變動に基いて G……G′ と循環行程の他の兩形態との間に生ずる現實的區別のみが問題となるのである。

資本制生產方法が既に發達を遂げて專ら行はれるに至つた時代に在つては、$G—W\begin{<}^{A}_{P_m}$ なる流通段階における P_m（生產機關）を構成すべき商品中の顯著なる部分は、それ自身また他人の機能商品資本となるであらう。隨つて販賣者の側から見れば、$W'—G'$（產品資本の貨幣資本化）が行はれることとなる。けれども之れは絕對的の意味に言ひ得る事ではない。寧ろ反對に、產業資本が貨幣なり商品なりとして作用する流通行程の內部に於いては、この資本が貨幣資本なり商品資本なりとして通過する循環は、商品生產の領域に屬すべき種々樣々なる社會的生產方法のもとに行はれる商品流通と交叉するのである。商品が奴隷制度を基礎とする生產に依つて造られる場合にしろ、又は農民（支那の農民やインドのライオット）なり、共同體（オランダ領東インド）なり、國營生產（ロシア史上の初期の各時代に行はれた農奴制に基く生產の如き）なり、半野蠻的な狩獵民なり其他によつて造られる場合にしろ、兎にかく此等の生產方法のもとにおける商品及び貨幣は、それが產業資本を代表する所の商品及び貨幣と接觸するに至つたとき、產業資本の循環にも、また商品資本に依つて負擔される餘剩價値——それが收入として支出される限りは——の循環にも入ることとなるのである。卽ちそれは商品資本循環の二部門に入るのであつて、その生じ來たる生產行程の性質は關する所でない。それは商品として市場に作用し、商品として產業資本の循環に入り、產業資本に依つて負擔される餘剩價値の流通にも入るのである。卽ち產業資本の流通行程の特色たるものは、商品の由來の普遍的性質であり、市場の世界市場的存在である。外國の商品について言ひ得ることは、また外國の貨幣についても言ひ得る所である。商品資本は此貨幣に對して單に商品たる機能を盡すのみであり、後者は又前者に對して單に貨幣たる機能を盡すに過ぎない。貨幣はこの場合、世界貨幣たる機能を盡すのである。

だが、これについて注意を要する二つの事項がある。

第一に、$G—P_m$ なる取引が終了するや否や、商品（P_m）は最早商品ではなくなり、生產資本Pなる機能形態を採つた產業資本の存在樣式の一つとなるのである。これに依つて商品の由來は抹除される。今や商品は產業資本の存在形態として存するに過ぎず、產業資本に合體されたものとなるのである。けれどもこれを補ふには、依然として其再生產が必要である。この意味に於いて、資本制生產方法は其發達段階の外部に存する生產方法を條件とする譯である。然るに一切の生產を出來得る限り商品生產に轉化せしめんとすることは、資本制生產方法の傾向であつて、之れが主要手段たるものは、卽ち他の凡ゆる生產を資本制生產方法の流通行程の內部に引き入れることである。而して商品生產の發達したものは、卽ち資本制商品生產である。產業資本の接觸は到るところ此轉化を促し、同時に又、一切の直接的生產者を賃銀勞働者に轉化せしめることとなるのである。

第二に、產業資本の流通行程に入る商品（勞働者に支拂はれた可變資本が轉化してゆく所の、勞働力の再生產に必要な生活資料をも含む）は、その由來、その生じ來たつた生產行程の社會的形態の如何に拘らず、商品取引資本卽ち商人資本なる形態のもとに、早くも商品資本として產業資本に對立して來る。然るにこの商人資本なるものは、その性質上如何なる生產方法のもとに生產された商品をも含むものである。

資本制生產方法は大規模なる生產を含む如く、必然的に又大規模なる販賣をも含む。換言すれば、個々の消費者に對する販賣ではなく、商人に對する販賣を含むのである。勿論、消費者自身が生產的消費者となり產業資本家となつて

一つの生産部門における産業資本が他の部門に生産機關を供給する限り、一つの産業資本家が他の多くの産業資本家たちに直接販賣する（註文その他の形で）といふことも行はれる。この意味に於いて、各産業資本家は直接の販賣者であり、自分自身に對する商人である。尤も、商人に對して販賣する場合も同樣である。

商人資本の機能としての商品取引は資本制生産の前提であり、資本制生産の發達につれてます〳〵發展するものである。故に我々は、資本制流通行程の個別的方面の例解としては場合に依り此商品取引の存在を假定するが、資本制流通行程の一般的分析については、商人の介在に依らざる直接的の販賣が行はれるものと假定する。なぜならば商人の介在は、流通運動の種々なる要素を隱蔽することになるからである。

この問題を幾分素朴に說明してゐるシスモンヂの所論を見よ。彼れは言ふ——

『商業は多額の資本を要する。この資本は一見上記の運動をする資本の一部ではないやうに思はれる。呉服屋の店に在る織物は、一見したところ、富者が貧者を働かしむるために賃銀として支拂ふ年生産物部分とは全く關係なきものであるやうに思はれる。けれども此資本は、右に述ぶる他の資本の位置に代つたものに過ぎないのである。富の發達を明瞭に理解するため、我々は先づ富の生成に論を起し、富の諸運動を辿つてその終極點に達した。これに依つて、製造業（例へば織物製造業）に充用される資本は、つねに不變であることが明かとなつた。而して此資本は消費者の收入と交換された場合、二つの部分に分割されるものである。即ち生産物の形で資本家の收入に役立つ部分と、賃銀の形で新たなる織物の製造に從事する勞働者の收入に役立つ部分とがそれである。

『然るに、此資本の各異なつた部分を交互に代位せしめることは、各關係者にとつて利益であることが驗て知られるやうになる。即ち製造業者と消費者との間の全流通を行ふには一萬弗を以つて十分であるとすれば、この一萬弗を製造業者と、卸賣商人と、小賣商人との間に等分するのである。これに依つて製造業者は、從前一萬弗を以つて爲した所と同一の勞作を僅かに三分の一の額を以つて爲すこととなる。なぜならば、彼れは勞作が完了したとき消費者を求めるに比すれば、遙か迅速に商人に依つて製造品が購買されることを見出すからである。他方に、卸賣商人の資本は從前に比し遙か迅速に、小賣商人の資本に依つて代位されることとなる。……賃銀として前貸される額と、最終の消費者に依つて支拂はれる購買價格との差は、此等の資本の利潤と見做される。この利潤は製造業者と、卸賣商人と、小賣商人との機能分化が行はれるに至つた瞬間以後、彼等の間に分割されることとなつた。而して斯く三人を要し、一資本の代りに三資本部分を要するに至つた後にも、完成される勞作は變化する所がない』（『新經濟原論』第一卷、第一五九頁）。——『如何なる商人も、間接には生産に貢獻してゐる。蓋し生産は消費を目的とするものである故、生産物が消費者の手に入る迄は生産は完了したものとは考へられ得ないからである』（前揭、第一五七頁）。

我々は循環の一般的諸形態を攻究するに當り、總じてまた本卷全體を通じて、一定國家の特殊現象に過ぎぬ所の單なる價値表章である表徵的貨幣と、今日なほ未發達狀態に止まつてゐる信用貨幣とを除外し、專ら金屬貨幣としての貨幣のみについて考へるのである。これは第一に、史的系行に叶つてゐる。資本制生産の初期に於いては、信用貨幣なるものは何等の役割をも演ずるものではないか、又は極めて些細な役割を演ずるに過ぎないからである。第二に、この系行が必然のものであることは、學說上にも次の事實に依つて證明される所である。即ちトック其他の學者は信用貨幣の流通について從來幾多の批評的說明を與へたが、その結果彼等はつねに、單なる金屬流通の基礎に立つときなるものは、購買要具としても支拂要具としても作用し得るといふ事實を忘れてはならない。說明を單純にするため、

本卷に於いては概して此第一の機能形態のみについて考へる。」

産業資本の流通行程は産業資本の個別的循環行程の一部に過ぎぬものであつて、一般的商品流通の内部に行はれる一列の諸取引を代表するに止まる限り、それは曩に(第一卷、第三章)說いた普遍的法則に依つて決定される。貨幣の流通速度が大なれば大なる程、換言すれば、各個の資本がその商品轉形列又は貨幣轉形列を通過すること迅速なればなる程、同一の貨幣量(例へば五百磅)に依つて逐次的に流通せしめられる產業資本(又は商品資本なる形態を採つた個々の資本)の量はます〳〵大となる。隨つて貨幣が支拂要具なる機能を盡すこと著しければ著しき程、かくして例へば一つの商品資本を其生產機關に依つて代位せしめる際計算差額のみを支拂へば足るといふ結果を生ずること著しければ著しき程、且つ支拂期間(例へば勞銀支拂の場合における)が短縮さるればされる程、同一量の資本價値を流通せしむるに必要な貨幣量はます〳〵小となるのである。他方に於いて、流通の速度と他の總べての事情とが不變であると假定すれば、貨幣資本として流通すべき貨幣の量は、商品の價格總量(價格と商品量との積)に依つて決定され、更らに商品の量及び價値が與へられてゐるとすれば、貨幣そのものの價値に依つて決定される。」

然るに一般的商品流通の法則なるものは、資本の流通行程が單純なる流通諸取引の一列たる限りに於いてのみ行はれるのであつて、此等の取引が個別的產業資本の循環の機能的に決定された諸段階を成すといふ方面から見れば行はれることはないのである。

この事實を明かにするには、左の兩形態が示す如き間斷なく連續した流通行程を考察することが最も良策である。

$$(\mathrm{II})\ P\ldots\ldots W'\left\langle\begin{array}{l} W-\left\{\begin{array}{l} G-W\left\langle\begin{array}{l} A \\ P_m \end{array}\right. \ldots\ldots P(P') \end{array}\right. \\ -G' \end{array}\right.$$

$$(\mathrm{III})\ W'\left\{\begin{array}{l} W-\left\{\begin{array}{l} G-W\left\langle\begin{array}{l} A \\ P_m \end{array}\right. \ldots\ldots P\ldots\ldots W' \\ \qquad\qquad\qquad\qquad\qquad\qquad \left\{\begin{array}{l} w-g-w \\ w-g-w \end{array}\right. \end{array}\right. \\ -G' \end{array}\right.$$

流通行程(W—G—W なる形態を採つたものにしろ、G—W—G たる形態を採つたものにしろ)は流通諸取引の一列として見れば、相對立した二つの商品轉形列を代表するに過ぎない。而してその個別的轉形は又、おの〳〵他人の手に屬する對立商品若しくは對立貨幣の反對した轉形を含むものである。」

商品所有者の側における W—G は、購買者の側における G—W である。」W—G における商品の第一轉形は、G なる形を採つて現はれる商品の第二轉形であり、G—W において其反對である。故に資本家が商品の購買者及び販賣者たる職分を盡し、かくして彼れの資本が貨幣としては他人の商品に對立し、商品としては他人の貨幣に對立する限り、一つの段階における商品轉形と他の段階における他の商品の轉形との錯綜について述べた事は、資本の流通についても言ひ得る。けれども此錯綜は、同時に又、諸資本の轉形の錯綜を言ひ現はすものとはならないのである。」

第一に、G—W(P_m) が種々なる個別的資本の轉形の錯綜を表現し得ることは曩に見た通りである。例へば、木綿紡績業者の商品資本たる綿絲は、一部的には石炭に依つて代位される。彼れの資本の一部は貨幣として存在し、この貨幣形態から商品形態に轉化されるのであるが、一方石炭の生產に從事する資本家の資本は商品として存在し、この商品形態から貨幣形態に轉化される。この場合、同一の流通取引は二つの產業資本(相異つた生產部門に屬する)の相對立した轉形を表現し、隨つて此等の資本の轉形列の錯綜を表現することとなる。けれども曩に示した如く、Gの轉

化されてゆくP_mは、嚴密の意味における商品資本たることを要するものではない。」それは產業資本の機能形態たることと、換言すれば一資本家に依る生產物たることを要するものではない。一方の側における G—W 他方の側における W—G なる關係は、常に問題となる所であるが、資本轉形の錯綜は必ずしもさうではないのである。更らに G—A 卽ち勞働力の購買に至つては、決して資本轉形の錯綜を示すものではない。蓋し勞働力なるものは勞働者の商品には違ひないが、資本家の手に販賣される迄は資本となるものではないからである。他方に W′—G′ なる行程における G′ は、商品資本の轉化されたものであることを要しない。それは勞働力なる商品の貨幣化されたもの（勞銀）でもあり得るし、又は獨立した勞働者なり、奴隷なり、農奴なり、共同體なりに依つて生產された商品の貨幣化されたものでもあり得る。」

第二に又、世界市場に關係する總生產が資本制的に經營されると假定する限り、個別的資本の流通行程內に生ずる各轉形に依つて演ぜられる機能的に決定された役割は、他の資本の循環におけるそれに照應した對抗轉形を代表せねばならぬといふことにはならない。例へば P……P なる循環について見るに、W′ の轉化されてゆく貨幣 G′ は、これを購買者の側から見れば、彼れの餘剩價値の貨幣化されたものに過ぎないといふ場合も生じ得る。この W′ なる商品が消費品である場合が卽ちそれである。或は $G'—W' \overset{A}{<} \overset{P_m}{}$（卽ち蓄積資本が問題となる取引）における G′ は、P_m の販賣者から見ればその前貸資本を回復するに止まる場合もあり、又は收入の支出といふ岐路に入る結果毫も彼れの資本流通に復歸しないといふ場合もあり得る。

要するに個別的資本なるものは元來、社會的總資本の獨立して作用する組成分に過ぎないものであるが、この總資本の種々異なつた部分が流通行程のもとに如何にして交互代位されるかといふことは、資本についても餘剩價値についても、商品流通上の單純なる轉形錯綜に依つて知られるものではない。蓋し斯くの如き轉形錯綜は、資本流通上の諸取引にも、他の總べての商品流通にも、等しく共通する所のものであるからである。右の事實を知るには、寧ろ他の研究方法を必要とするのである。この問題について、從來の經濟學者は、嚴密に分析するならば結局すべての商品流通に共通する所の轉形錯綜から得た漠然たる觀念以上のものを含まない言葉を以つて滿足してゐたのである。」

產業資本の循環行程（隨つてまた資本制生產）の最も明瞭な特質の一つとなつてゐるものは、一方に、生產資本の構成要素は商品市場から來るものであつて、絕えず此市場に依つて更新され、商品として購買されねばならないといふ事實、他方に、勞働行程の生產物は商品として共處から出で來て、絕えず商品として新たに販賣されねばならないといふ事實である。例へば低地スコットランドの近世的小作農業者と、ヨーロッパ大陸の小農民とを比較せよ。前者は共生產物の全部を販賣する。隨つて共生產物の凡ゆる要素を（種子をも）市場に於いて回收しなければならない。然るに後者は、共生產物の大部分を直接消費して、出來得る限り少なく賣買し、道具、衣類等は出來得る限り自ら之れを製造してゐる。

斯くして從來、自然經濟と、貨幣經濟と、信用經濟とは、社會的生產の經濟上における三つの特徵的な運動形態として、相對立せしめられることとなつたのである。

けれども此等の三形態は、第一に對等の發達段階を代表するものではない。信用經濟及び貨幣經濟なる二つの稱呼が、生產者自身の間に於ける取引機能または取引方法を言ひ現はす限り、謂ふ所の信用經濟とは貨幣經濟の一形態に

過ぎぬものである。發達したる資本制生産のもとに於いては、貨幣經濟は信用經濟の基礎として現はれるに過ぎない。かくて貨幣經濟と信用經濟とは、資本制生産の相異なつた發達段階に照應するに過ぎぬものであつて、決して自然經濟に對して相獨立した取引形態たるものではない。若し貨幣經濟と信用經濟とを自然經濟に對して獨立したものと言ひ得るとすれば、同樣に自然經濟の各著しく異なつた形態をも、對等のものと見做して右の兩經濟に併立せしめることが可能となるであらう。

第二に、貨幣經濟及び信用經濟なる兩範疇を區別する所の特徴として强調されるものは、經濟換言すれば生産行程それ自身でなく、相異なつた生産代理人若しくは生産者の間に行はれる所の、生産行程に照應した取引方法である。而して此事實は、第一の自然經濟なる範疇についても同樣に言ひ得る所でなくてはならない。即ち自然經濟といふ代りに、交換經濟といふべきである。例へばペルーのインカ國家に行はれる如き完全に孤立隔絶された自然經濟は、此等の範疇の何づれにも屬せざるものとなるであらう。

第三に、貨幣經濟は總べての商品生産に共通する所のものであり、而して生産物は種々樣々なる社會的生産組織體のもとに商品として現はれるものであるから、資本制生産の特徴たるものは結局、生産物が取引品として、商品として産出される範圍、隨つて又生産物それ自身の構成要素が取引品として、商品として生産物の生産行程に入らねばならぬ範圍のみに限られることとなるであらう。

資本制生産なるものは、生産の普遍的形態たる商品生産であることは事實である。けれども、資本制生産が斯く商品生産であり、而して資本制生産の發達中この事實がます〳〵著しくなるのは、資本制度のもとに於ける勞働はそれ自身商品として現はれ、勞働者は勞働（即ち自己の勞働力の機能）をば、さきに假定した如く再生産費に依つて決定される所の價値を以つて販賣するが故である。勞働が賃銀勞働となるに應じて、生産者は産業資本家となる。隨つて農業上における直接的生産者までも賃銀勞働者となるに及び、玆に初めて資本制生産（隨つてまた商品生産）は其全範圍に亙つて現はれる事となるのである。貨幣關係たる購買者對販賣者の關係は、資本家對勞働者の關係に於いては生産そのものに內在した關係となる。然るにこの內在的關係は、生産の社會的性質を基礎とするものであつて、取引方法の社會的性質を基礎とするものではない。寧ろ後ちの社會的性質は、前の社會的性質に基くのである。けれども生産方法の性質の中に、生産方法に照應した取引方法の基礎を求めずして、寧ろ其反對の求め方をするといふ事は、取引が人の全注意を占めてゐるブルヂョア的眼界には相應した所爲である（七）。

（七）以上、第五稿より。以下章末までは、一八七七年乃至七八年に成つた原稿の中に含まれてゐる所の、諸著書からの拔萃の間に見出される註である。

資本家が貨幣の形で流通の內部に投ずる價値は、流通の內部から引き出す價値よりも小であるが、それは畢竟するところ、彼れが商品の形で流通の內部に投ずる價値が、同じ形で流通の內部から引き出した價値よりも大であることに基くのである。彼れが單に資本の人格化された者としての、産業資本家としての職分を盡す限り、商品價値について彼れの供給する所は需要する所よりも常に大である。若し此點について供給と需要とが一致するとすれば、彼れの資本は毫も價値增殖を遂げなかつたこととなるであらう。彼れの資本は生産資本たる機能を盡さなかつたこととなり、生産資本は餘剩價値を孕まざる商品資本に轉化されたこととなるであらう。それは生産行程の持續中商品形態に於け

る何等の餘剰價値をも勞働力から收得しなかつたこととなり、隨つて何等の資本機能をも盡さなかつたこととなるであらう。實際のところ、資本家は『買つたよりも高く賣ら』なければならない。けれども彼れがこれをなし遂げ得るのは、彼れの購買した、價値少なき故に價安き商品が、資本制生産行程のため、價値多き故に價高き商品に轉化される結果に外ならない。彼れが商品をヨリ價高く販賣するのは、それを價値以上に販賣する結果ではなく、寧ろ生産諸要素の價値總額以上の價値がそれに含まれてゐるからである。

資本家に依る供給と需要との差が大なれば大なる程、換言すれば彼れの供給する商品價値が需要する商品價値を超過すること著しければ著しき程、彼れに依つて資本價値が增殖せしめられる率もます〳〵大となるのである。彼れの目的とする所は、この供給と需要とを平均に歸せしむることではなく、寧ろ出來得る限り平均に歸せしめないやうにすることである。即ち供給を以つて需要に超過せしめることである。」

個々の資本家について言ひ得ることは、また資本家階級全體についても言ひ得る所である。

資本家が單に産業資本の人格化された者に止まる限り、彼れ自身の需要は畢竟、生産機關及び勞働力に對する需要に外ならない。Pmに對する彼れの需要は之れを價値の方面から見れば、彼れの前貸資本よりも小である。彼れは其資本よりも小なる價値、隨つて彼れが供給する商品資本の價値よりも更らに小なる價値を以つて生産機關を購買する。

勞働力に對する彼れの需要について言へば、かかる需要の價値は彼れの總資本に對する可變資本の比例 v:C に依つて決定される。隨つて此需要が資本制生産のもとに增大する比率は、生産機關に對する彼れの需要の增加率よりも小である。彼れに依るPmの購買は、Aの購買に比して絶えずます〳〵增大する。

勞働者は通常その賃銀を生活資料(而も大抵は生活必需品)に轉化するものであるが、この方面から見る時、勞働力に對する資本家の需要は、間接的に言へば勞働者階級の消費に歸すべき生活資料に對する需要を意味することとなる。けれども此需要はvに等しいものであつて、それ以上の極微分をも含むものではない(勞働者が彼れの賃銀の一部を貯蓄するとすれば——信用上の一切事情は、この場合必然、考慮に入れないこととする——それは取りも直さず、彼れが賃銀の一部を退藏貨幣に轉化し、その範圍に於いて需要者たり購買者たる職分を盡さなくなるといふことを意味する)。資本家の需要の最大限界はC即ち c+v であるが、彼れの供給は c+v+m に等しい。故に彼れの商品資本の組成が 80c+20v+20m であるとすれば、彼れの需要は 80c+20v に等しくなり、價値の點から見れば供給よりも五分の一だけ小となる。彼れの下に生産されるmの量の百分率(即ち利潤率)が大なれば大なる程、彼れの需要は供給に比してます〳〵小となるのである。

生産が進むにつれて、勞働力(隨つて間接的に言へば生活必需品)に對する資本家の需要は、生産機關に對する彼れの需要に比します〳〵小となるとはいへ、他方に於いてPmに對する彼れの日々の需要は彼れの資本よりも常に小であることを忘れてはならない。隨つて生産機關に對する彼れの需要は、彼れに此生産機關を供給する所の、等額の資本を以つて同一の條件のもとに從業する他の資本家の商品資本よりも常に小價値のものでなくてはならない。彼れに生産機關を供給する資本家が一人ではなく多人數であるとしても、それは問題の上に何等影響する所がない。いま、彼れの資本は一千磅であつて、その不變分は八百磅であるとせよ。然る場合、此等すべての資本家に對する彼れの需要は八百磅となる。利潤率が相等しいとして、各一千磅の資本(その中、彼等おの〳〵の占むる分は幾許であり、また彼等おの〳〵の有する資本量が總資本の上に占むる比率は幾許であるにしろ)を以つて彼等が供給する生産機關の價値は合計一千二百磅となる。即ち彼等から生産機關の供給を受くる右の資本家の需要は、彼等に依る供給の三分の二

に過ぎず、彼れ自身の需要總額の價値は、彼れ自身が供給する價値の五分の四に過ぎないのである。

茲についてながら、後に述べる資本回轉(4)の問題を豫め考慮に入れて置かねばならない。いま、彼れの總資本は五千磅であつて、そのうち四千磅は固定資本、一千磅は流通資本であるとし、而して此一千磅は曩に假定した如く800c+200v なる組成を有するものとしよう。彼れの總資本を年に一度回轉せしめる爲には、流通資本は年に五度回轉せしめられなければならない。然る場合、彼れの商品生産物は六千磅となる。即ち前貸資本よりも一千磅だけ大である。この場合にも、曩に掲げた所と同一の餘剰價値比率が生じて來る。即ち左の通りである。

5000C : 1000n=1000(c+v) : 20n

故に此回轉は、彼れの總需要と總供給との比率の上には何等の變化をも與ふるものでなく、前者は依然として後者よりも五分の一だけ小である。

彼れの固定資本は、十年毎に更新されねばならないと假定する。即ち固定資本の價値は年々十分の一（四百磅）つ償還されるのであつて、二年目には固定資本としての三千六百磅に貨幣としての四百磅を加へた價値が彼れの手に存することとなる。平均程度を超過せざる範圍に於いて修繕を要する限り、その費用は補充的に追加される投資に外ならない。この問題は左の如く觀察し得る。即ち彼れは其修繕費をば年々生産する所の商品生産物中に入る投資の一部として計算し、隨つて此費用は右の十分の一なる年償還額中に含まれるものと見るのである。（若し、修繕の必要が實際のところ平均以下であるとすれば、彼れにとつてはそれだけ利益となり、平均以上であるとすればそれだけ不利益となる。けれどもこの得失は、同一の産業部門に從事する資本家の全階級から見れば平均に歸するのである(5)）。兎にかく總資本が年に一度回轉する時、一年間における彼れの需要は依然五千磅であつて、最初前貸した資本價値に等しいのであるが、流通資本分については增大し、固定資本分については絶えず減少することとなるのである。

これより再生産の問題に入る。假りに資本家が餘剰價値gの全部を消費して、原資本量Cのみを生産資本に再轉化せしめるとしよう。然る場合には、資本家の需要は供給と同價値になる。尤も、彼れの資本の運動についてはさうではない。寧ろ彼れが資本家として需要する所の價値は、供給する價値の五分の四にしか相當しないのである。殘餘の五分の一に相當する價値は、之れを資本家に非ざる人として彼れが消費する。即ち資本家たる職分に於いてではなく己れ自身の私的欲望の爲に、享樂の爲に、消費するのである。

この場合、百分率で言ひ現はした彼れの計算は左の如くになる。

資本家として……	需要一〇〇	供給一二〇	
生活人として……	需要　二〇	供給——	
合　計……	需要一二〇	供給一二〇	

右の假定は、資本制生産が存在することなく、隨つて又、産業資本家そのものも存在しないと假定するに等しい。なぜならば、富の蓄積そのものではなく享樂が起動動機として作用すると假定することは、單にそれのみで、資本制度の根柢を廢除する所以となるからである。」

尙また此假定は、技術上から見ても不可能である。資本家は價格の動搖に對抗し、賣買上最も有利な市況が生じて來るまで待ち得るやうにするには、準備資本を造つて置かねばならないのであるが、單にそれのみでなく、更らに生産を擴大し技術上の進歩を己れの生産組織體に併合せしめるため、資本を蓄積して置くことが必要となるのである。」

資本を蓄積するためには、先づ、貨幣形態を以つて流通の内部から流れ來たつた餘剰價値の一部を流通から引上げ

て退藏し、舊來の營業の擴張、又は新たなる副業の開始に必要とする所の金額に達せしめなければならない。この貨幣退藏が持續する限り、資本家の需要は增大するものではない。貨幣は休止する。かくて供給商品に對する貨幣等價は市場から引上げられるが、この貨幣等價に對する商品等價は毫も引上げられることとならないのである。

信用のことは、この場合問題外に置く。資本家が例へば、その蓄積貨幣量を當座預金として銀行に預入し以つて利子を得るといふ場合も、信用の中に含まれるのである。

第五章　流通期間

生產部面（八）と流通の兩階段とを通過する資本運動が、時間的の順序を以つて行はれる事は曩に見た所である。資本が生產部面に在留する期間は卽ち資本の生產期間であり、流通部面に在留する期間は卽ち資本の流通期間である。隨つて資本が循環を遂げる全期間は、生產期間と流通期間との和に等しくなる譯である(一)。

（八）以下第四稿より。

生產期間なるものは、勞働行程の期間を含むことは言ふ迄もないが、然し勞働行程の期間の中に含まれるものではない。これについて先づ念頭に浮ぶことは、不變資本の一部は機械、建物などの如き勞働要具として存在するものであつて、此等の物は磨滅し盡される時に至るまで、絕えず新たに反復される所の同一の勞働行程に役立つのである。勞働行程の週期的中絕（例へば夜間における）は、此等の勞働要具の機能を中絕せしむることとなるが、生產場所における存在をも中絕せしめるものではない。勞働要具は機能を盡しつつある時のみではなく、機能を盡さない時にも矢張り生產場所に存在してゐるのである。

他方に、資本家は日々市場から來る供給の偶然に賴よることなしに、大なり小なりの期間、豫め決定された規模を以つて生產行程を進行せしめようとすれば、原料竝びに助成材の一定の在庫品を豫備して置かなければならない。原料などの斯かる在庫品は、ただ漸次的にのみ生產的に消費されるものであるから、その生產期間（九）と機能期間との間には差異が生ずることとなる。卽ち生產機關の生產期間なるものは、總じて（一）生產機關が生產機關たる機能を

盡す期間（換言すれば生産機關が生産行程に役立つ期間）と、(二) 生産行程が中絶され、隨つて又生産行程に合體された生産機關の機能が中絶される休止期間と、(三) 生産機關は既に生産行程の條件として存在し、隨つて生産資本を代表してゐるとはいへ、尙いまだ生産行程の內部に入らない期間とを包括するものである。

（九）生産期間といふ言葉は、この場合能動的の意味に解するのである。卽ち玆に謂ふ生産機關の生産期間とは、生産機關が生産される期間を指すのではなく、生産機關が商品生産物の生産行程に關與する時間を意味するのである。——F・E・

以上考察した區別は常に、生産資本が生産部面の內部に在留する期間と生産行程の內部に在留する期間との區別を指すのである。」然るに生産行程それ自身が又、勞働行程隨つて勞働期間の中絶を必要ならしめ得る。卽ち人間勞働を更らに追加することなくして、勞働對象が物理的行程の影響を受くる期間がそれである。かかる場合には、勞働行程は中絶され、隨つて生産機關が勞働要具として盡す機能も中絶されることとなるが、生産行程と隨つて又生産機關の機能とは其間にも持續する。これは例へば、地に蒔いた穀種や、地窖內に醱酵しつつある葡萄酒や、多くの製造業（例へば鞣皮業）に使用される化學的影響を受ける勞働材料などに於いて見られる所である。かかる場合には、生産期間は勞働期間よりも大となる。この差は畢竟するところ、勞働期間以上に出づる生産期間の超過に外ならない。而してこの超過分は常に、生産資本が生産行程それ自身の內部に作用することなくして、潛伏的に生産部面の內部に在留するといふ事實、又はそれが勞働行程に關與することなくして生産行程の內部に作用するといふ事實に基くものである。」

生産行程の條件として準備されるといふに止まる潛伏的の生産資本部分（紡績業における棉花、石炭等の如き）は、生産物の形成にも價値の形成にも關與するものではない。それは休用狀態に置かれた資本である。尤もそれを斯かる狀態に置くことは、生産行程の間斷なき流動の上に必要なる一條件となるのである。生産に充用すべき在庫品（潛伏的資本）を保存するに必要な建物、器具などは、生産行程の條件となるものであり、隨つて前貸生産資本の組成分ともなるものであつて、生産上の諸要素を豫備段階に保存する機能を盡す。この段階で勞働行程を要するとすれば、原料其他の物の價は高くなる。然しこの段階に於いてなされる勞働は、生産的勞働であつて餘剩價値を造り出す。この勞働の一部は、他の總べての賃銀勞働の一部と同樣に、代價を支拂はれることがないからである。全生産行程が順當に中絶されて、生産資本が機能を盡さなくなる期間には、價値も餘剩價値も生産されない。そこで夜間にも勞働させようとするやうになるのである（第一卷、第八章、第四節）。

勞働對象が生産行程そのものを通過しつつある時、勞働時間の上に中絶が生ずるとすれば、その間、價値も餘剩價値も生産されないが、生産物の完成は促進される。斯かる中絶期間は、生産物の生涯の一部を成し、生産物が通過しなければならない一行程となつてゐるのである。器具其他のものの價値は、これらの物が作用する全時間に比例して生産物の上に移轉される。生産物は勞働そのものに依つて此段階に置かれる。而して斯かる器具の使用は、塵埃となつて飛散した棉花部分が生産物の要素とはならないに拘らず、それ自身の價値を生産物の上に移轉すると同じ意味に於いて、生産の條件となるものである。建物、機械等の如き、潛伏的資本の他の部分、換言すれば生産行程の常則的な休止に依つてのみ機能を中絶する所の勞働要具——生産の縮小や恐慌などに基く變則的な中絶は、純粹の損失となるのであるが——は、生産物の形成要素となることなくして價値を附け加へる。潛伏的資本の斯かる部分が生産物に附け加へる價値總額は、この資本部分の平均的な存續期間に依つて決定される。蓋しこの資本部分は使用價値である故に、生産資本として作用しつつある時にも、作用せざる期間にも、價値を喪失するからである。

最後に、勞働行程は中絶されても生産行程の內部に存在を續ける不變資本分の價値は、生産行程の結果の上に再現

する。生産機關はこの場合、勞働そのものに依つて、おのづから一定の自然行程を通過すべき條件のもとに置かれる。而して斯かる自然行程の結果は、卽ち一定の利用效果となり、使用價値形態の變化となつて現はれるのである。勞働は生産機關を現實的に生産機關として有效に消費する限り、つねに其價値を生産物に移轉する。この結果を生ぜしむるため勞働要具を通して勞働を持續的に勞働對象の上に作用せしめねばならない場合にしろ、又は更らにそれ以上勞働の助けを借ることなく、自然行程に依りおのづから所期の變化を受くる如き條件のもとに生産機關を置き、かくして勞働對象に單なる刺戟を與へさへすれば可い場合にしろ、いづれにしても、問題の上には影響するところがないのである。

如何なる理由に依つて生産期間が勞働期間を超過するにしろ、卽ち生産機關が單なる潛伏的の生産資本に過ぎず、尙いまだ現實的の生産行程に對する豫備段階を脫しないといふ事が理由となるにしろ、又は生産行程の休止に依り、この行程の內部に於いて生産機關の機能が中絕されるといふ事が理由となるにしろ、最後に生産行程それ自身が勞働行程の中絕を必要ならしめるといふ事が理由となるにしろ、いづれにしても、生産機關は勞働吸取の機能を盡すものではない。勞働を吸取しない以上、餘剩勞働を吸取することにもならないのである。卽ち生産資本が勞働期間以上に出づる生産期間部分を通過しつつある限り、價値增殖行程の實現が斯かる機能休止と如何に不可分的に結合して居らうとも、生産資本の價値は毫も增殖されるものではないのである。生産期間と勞働期間とが一致に近づけば近づく程與へられたる期間における與へられたる生産資本の生産力と價値增殖とがまゝ〳〵大となることは明かである。そこで勞働期間以上に出づる生産期間の超過分を出來得る限り節減せんとする資本制生産の傾向が生じて來るのである。然し資本の生産期間と勞働期間とは相互一致しないとはいへ、前者は常に後者を含むものであつて、前者が後者を超過するといふ事それ自身が生産行程の條件となるのである。要するに生産期間なるものは常に、資本が使用價値を生産し價値を增殖する期間を、換言すれば資本が生産資本として作用する期間を意味する。尤もその中には、資本が潛伏狀態に止まる期間なり、又は價値を增殖することなくして生産に從事する期間なりが含まれるのである。

資本は流通部面の內部に止まる間、商品資本及び貨幣資本として作用する。資本の通過する二つの流通行程とは要するに、商品形態から貨幣形態に轉化される行程と、貨幣形態から商品形態に轉化される行程とを指すのである。これに就いて、商品の貨幣化は同時に又、商品に合體されてゐる餘剩價値の實現を意味し、貨幣の商品化は同時に又、資本價値をば生産諸要素なる形態に變ぜしむる轉化若しくは再轉化を意味するといふ事實は、流通行程としての此等の行程が單純なる商品轉形の行程であるといふ事實を些かも變ぜしめるものではない。

流通期間と生産期間とは、相互に排擠し合ふものである。資本は其流通期間の持續中には、生産資本としての機能を盡すものではなく、隨つて商品及び餘剩價値の何づれをも生産しないのである。資本價値の總體がつねに一擊的に甲なる段階から乙なる段階に入るといふ、最單純形態の循環を考へて見るに、資本の流通期間が持續する限り、生産行程隨つて又資本の價値增殖は中絕され、而して流通期間の長短に應じて生産行程の更新が迅速ともなり緩漫ともなることは明かである。反對に、資本の種々なる部分が相次いで循環を通過し、かくして總資本價値の循環がその種々なる部分の循環を通して逐次的に行はれるといふ場合には、此等の資本部分の流通部面に於ける不斷的の在留が長期に亙れば亙る程、生産部面の內部に間斷なく作用する所の資本部分はます〳〵小とならねばならぬことも明かである。かくて流通期間の伸縮は、生産期間の伸縮、換言すれば與へられたる大さの資本が生産資本なる機能を盡す範圍の伸縮に對する消極的制限として作用することとなる。資本の流通轉形が單なる觀念的のものに止まれば止まる程、語を

換へて言へば、流通期間が零に等しいか又は零に近づくこと著しくなるに從ひ、資本が資本として作用することはます〳〵顯著となり、資本の生產力と價値增殖とはます〳〵大となるのである。一例として、資本家が註文に應じて生產に從事し、生產物を引渡す際に支拂を受くるものと假定し、而して此支拂が彼れ自身の使用する生產機關の形でなされるものとすれば、斯かる場合には流通期間は零に近くなるのである。

要するに資本の流通期間なるものは、總じてその生產期間隨つて又價値增殖行程を制限するものであつて、この制限の大小は流通期間の長短に比例する。而して資本の流通期間は極めて種々なる程度に伸縮し得るものであるから、生產期間も亦極めて種々なる程度に制限され得ることとなるのである。然るに經濟學は、表面に現はれる所のもののみを、卽ち資本の流通期間が價値增殖行程一般の上に及ぼす影響のみを見るのである。經濟學はこの消極的影響を以つて積極的の影響と解する。この消極的影響の結果は、積極的なるが故である。而して斯かる外觀は、資本がその生產行程隨つて又勞働搾取から獨立した所の、流通部面に基く神祕的な價値增殖源泉を有する事を立證する如く見えるため、經濟學はます〳〵これを固執することとなるのである。科學的な經濟學でさへも、如何に此外觀に依つて欺かれてゐるかは、後に示す通りである。この外觀は軈て示す如く、種々なる現象に依つて確立される。卽ち（一）消極的の原因を積極的の原因として作用せしむる資本主義的の利潤計算方法。蓋し流通期間以外の點に異なる所なき種々なる投資部面の資本にとつて、流通期間がヨリ長期に亙るといふ事は、價格昂騰の原因として、約言すれば利潤平均化の一原因として作用するのである。（二）流通期間なるものは回轉期間の一要素たるに過ぎない。然るに後者は、生產期間又は再生產期間を含む。そこで回轉期間に基く事實が、流通期間に基くかの如く見えて來る。（三）可變資本（勞銀）への商品の轉化は、商品が豫め貨幣に轉化されることを條件とする。卽ち資本の蓄積上行はれるところの、追加的可變資本への轉化は、流通部面の內部に、又は流通期間の持續中になされるのである。そこで斯くして生ずる蓄積は、流通期間に基くものの如く見えて來る。

流通部面の內部に於いては、資本は二つの對立した段階 W—G 及び G—W（いづれを先きにするにしろ）を通過する。隨つて資本の流通期間も亦、二つの部分に分割される。卽ち商品から貨幣への轉化に要する時間と、貨幣から商品への轉化に要する時間とがそれである。W—G（卽ち販賣）は資本轉形における最も困難な部分であつて、通例の場合について言へば流通期間の大部分を占めるものであることは、單純なる商品流通の分析（第一卷、第三章）に依つて既に知られた所である。價値は貨幣として存在する時、不斷に轉化し得べき形態を採つてゐる。商品として存在する場合には、豫め貨幣に轉化されることなくしては、かくの如き直接的の交換可能と、隨つて又絕えず準備の整つた效力との形態を採り得るものではない。けれども資本の流通行程における G—W なる段階については、與へられたる投資における生產資本の一定の要素たるべき商品への轉化といふ事實が問題となる。生產機關は市場に存在しない場合もある。或は之れより漸く生產されねばならぬ場合もあり、遠隔の市場から供給を仰がねばならぬ場合もある。或は又、供給が不足したり、價格に變動が生じたりする場合もある。要するに、單純なる形態變化 G—W に於いては認め得られないで、而も流通段階の此部分のために大なり小なりの時間を必要ならしむる、幾多の事情が存在してゐるのである。

W—G と G—W は時間的に分離され得る如く、また空間的にも分離され得る。購買市場と販賣市場とは、空間的に別個の市場たり得るのである。しかのみならず、例へば工場の如きについて見るに、購買する人と販賣する人とが別個の人々に依つて代表されることは、しば〳〵見られる所である。商品生產は生產そのものを要する如く、また流

通をも必要とする。隨つて生產擔任者と同樣に流通擔任者をも必要とするに至るのである。再生產行程は資本の兩機能を含み、隨つて此等の機能が資本家自身なり、資本家の代理人たる賃銀勞働者なりに依つて代表されることの必要をも含む。けれども斯かる事實は、商品資本竝びに貨幣資本の機能と生產資本の機能との混同を可とする理由とならない如く、また流通擔任者と生產擔任者との混同を可とする理由ともならないのである。流通擔任者は生產擔任者に依つて支拂を受けねばならない。相互に賣買する資本家たちは、彼等の賣買取引に依つて生產物と價値との何づれをも造り出すものではない。而してこの事實は、彼等の營業の規模が斯かる賣買機能を他の人々の手に一任するを得せしめ且つ必要ならしむる場合にも、變化を受くることはないのである。

營業に依つては、購買人及び販賣人の賃銀を利益配當の形で支拂ふものもある。彼等は消費者に依つて支拂を受けるのだと主張した所で何の役にも立たない。蓋し消費者なるものは、みづから生產擔任者として商品等價を生產するか、又は權利上の名義（生產擔任者の組合員、其他の資格を以つて保有する所の）なり、勞務なりに依つて、生產擔任者の手から斯かる商品等價を占有する限りに於いてのみ、右の支拂をなし得るに過ぎないからである。

W—G と G—W との間には、商品及び貨幣の形態差異とは何等關係する所なく、寧ろ生產の資本制的性質に起因するところの一區別が存在してゐる。W—G も G—W もそれ自體として見れば、與へられたる價値が一つの形態から他の形態に轉化されることに外ならない。然るに W′—G′ なる轉形は、同時にまた W′ に含まれる餘剩價値の實現を意味するものである。G—W に於いてはさうではない。されば こそ販賣は購買よりも重要となるのである。G—W は順當なる條件のもとにある限り、G に依つて言ひ現はされた價値を增殖するに必要な取引であるが、餘剩價値の實現を意味するものではない。それは餘剩價値生產の序論であつて、附錄ではないのである。

商品資本の流通 W′—G′ は、商品の存在形態それ自身に依り、商品の使用價値的存在に依つて制限を與へられる。使用價値としての商品は、本來死滅を免れざるものである。隨つて一定の期間に、その用途の如何に從つて生產的消費なり個人的消費なりの何づれかに歸せざる限り、換言すれば一定の期間に販賣されることなき限り、それは腐朽して使用價値を失ふと同時に、また交換價値の負擔者たる性質をも喪失する。かくて此商品に含まれる資本價値又は其增殖分たる餘剩價値も失はれることとなる。使用價値なるものは、不斷に更新され再生產される限りに於いてのみ、換言すれば同一又は異なつた種類の新たなる使用價値に依つて代位される限りに於いてのみ、絕ゆることなき自己增殖的資本價値の負擔者となつてゐるのである。然るに使用價値が完成した商品の形で販賣され、この販賣を通して生產的又は個人的の消費に歸するといふことは、その再生產の不斷反復的なる條件となるのである。使用價値は一定の期間に、その舊來の使用形態を變更しなければならない。これは、使用價値が新たなる使用形態を以つて存續する爲に必要な條件となるのである。交換價値なるものは、その素材體を斯く不斷に變更することに依つてのみ保存される。使用價値の腐朽は、商品に依つて緩漫のものもあれば急激のものもある。隨つて其生產と消費との間に橫はる期間も、長短樣々なるを得るのである。かくして使用價値なるものは、或時は長期間、或時は短期間に亙つて、死滅することなく商品資本として W—G なる流通段階に在留し、商品として大なり小なりの流通期間に耐へることが出來る。商品體そのものの腐朽に依つて商品資本の流通期間に課される限界は、流通期間の此部分（卽ち商品資本として通過し得る流通期間）に對する絕對的の限界となる。商品の壽命が短かく、而して生產後直ちに消費され販賣されねばならぬことが著しくなればなる程、その生產場所から隔たり得る能力はます〳〵小となり、隨つてその空間的流通部面はます〳〵狹ばめられ、販路はます〳〵地方的の性質を帶びて來る。卽ち商品なるものは、その壽命が短かく、

その物理的構性に依り商品としての流通期間に課される絶對的制限が大となればなるほど、ます〳〵資本制生産の對象たるに適しなくなるのである。斯くの如き性質の商品は、人口稠密なる地方に於いてか、又は運輸機關の發達に依り地方的距離が狹ばめられる程度に比例してのみ、資本制生産に利用し得るのである。けれどもその生産が少數人の手と人口稠密なる地方とに集中するとき、斯かる物品に對しても比較的大なる市場が生じ得ることは、例へば麥酒製造業や搾乳業などについて見られる所である。

第六章　流通費用

(一)　純粹の流通費用

(I)　賣買期間

商品から貨幣へ、及び貨幣から商品への資本轉形は、同時に又資本家の取引であり賣買行爲である。かくの如き資本轉形の行はれる期間は、之れを主觀的に資本家の立場から見れば卽ち賣買期間（卽ち彼れが市場に於いて販賣者及び購買者たる職分を盡す期間）である。資本の流通期間は再生産期間の必要なる一節を成すものであるが、同樣に又、資本家が賣買を營む期間、卽ち市場に於いて奔走する期間は、彼れが資本家としての職分、換言すれば人格化したる資本としての職分を盡す期間の必要なる一節を成すものであり、彼れの營業期間の一部となるものである。

〔商品は價値通りに賣買されるものと假定するのであるから、この取引に於いては、ただ同一の價値が一つの形態から他の形態に、卽ち商品形態から貨幣形態に、また貨幣形態から商品形態に轉化される事實のみが（卽ち一つの狀態變化のみが）問題となるのである。商品が價値通りに販賣されるとき、購買者及び販賣者の手に在る價値量は不變であつて、ただ其存在形態が變化するのみである。若し價値通りに販賣されないとすれば、轉化される價値の總額は不變である。一方の側におけるプラスは、他方の側におけるマイナスを意味するからである。

然るに W—G 及び G—W なる轉化は、購買者と販賣者との間に行はれる取引であつて、この取引の決定には時

間を要する。而してこの事實は、彼等の間には互ひに相手を出し抜かうとする闘爭が行はれ、營業者は恰も『ギリシア人がギリシア人に出くわすと綱曳戰が始まる』といふ諺の如くに相互對抗するため、それだけます〳〵著しくなるのである。價値の狀態變化には時間と勞働力とを要する。けれどもこれは、價値を造り出す爲ではなく、一つの形態から他の形態への價値轉形を行ふ爲に必要なことである。而して斯かる狀態變化の際雙方とも過剩の價値量を占有しようと努めることは、問題の上に何等の影響をも與へない。この勞働は雙方の惡意的な企圖に依つて更らに著しくなるものであるが、それは訴訟手續について爲される勞働が係爭物の價値量を增大することがないのと同樣に、價値を造り出すものではないのである。この勞働（それは全體として見た資本制生產行程の必要なる一要素である。蓋し此意味に解した資本制生產行程は流通をも含み、又は流通の中に含まれることとなるからである）は恰も、熱を造るために一つの素材を燃燒する勞働の如きものである。かかる燃燒勞働は燃燒行程の必要なる一要素であるとはいへ、決して熱を造り出すものではない。例へば石炭を燃料として使用するには、酸素と化合せしめねばならない。それには（燃燒の結果たる炭酸瓦斯は石炭の瓦斯態であるから[1]）石炭を固形態から瓦斯態に轉化せしむる必要がある。換言すれば、石炭の存在形態又は狀態の上に物理的變化を生ぜしむる必要がある。新たなる化合の生ずるに先だち、一つの固體に結合した炭素分子を分解して、更らにこの炭素分子それ自身を個々の原子に分解せねばならない。而して斯くするには、一定の力消費を要する。斯樣にして消費される力は、熱に轉化されるものではなく、寧ろ熱から生じて來るものである。故に商品所有者が資本家でなく獨立した直接的の生產者であるとすれば、賣買に要する期間は彼等の勞働期間からの控除を意味することとなる。さればこそ、彼等は常に（古代及び中世に於いて）斯かる取引を休日に讓らうとしたのである。

商品取引は資本家の手で廣大なる範圍を占めることとなるのであるが、それがため、價値を造り出すことなく單に價値の形態轉化を媒介するに過ぎない此勞働が、價値造出的の勞働に轉化され得るものでないことは言ふ迄もない。かかる轉質の奇蹟は又、產業資本家が己れ自ら右の『燃燒勞働』を執り行ふ代りに、これを雇人たる第三者の專業たらしめるといふ轉置に依つても行はれ得るものではない。勿論この第三者は、資本家の美しき目を愛するが故に、その勞働力を提供するものではないのである。同樣に、土地所有者の下に働く地代徵集人なり、銀行の使丁なりの勞働に依つて、彼等が徵集する地代なり、囊に入れて他の銀行に携へ行く金貨なりの價値量が鐚一文も增殖せしめられるものでないといふ事實は、彼等自身から見れば何うでも可い問題である」（十）。

（十）括弧內の文章は、第八稿の終末に揭げられてゐる註の中から採錄したものである。

己れ自身に代つて他の人々に此機能を營ましめる資本家にとつては、賣買は主要の一機能となる。彼れは多くの人人の造つた生產物をヨリ大なる社會的規模で占有するものであるから、隨つて同樣の大なる規模で此生產物を販賣し後ち更らに之れを貨幣から生產諸要素に再轉化せしめることを要する。然し此場合にも、賣買が價値を造り出すものでないことに變りはない。この場合、商人資本の機能に依つて一つの幻想が生じて來る。然し此問題については、今の所これ以上には立ち入つて考察しないこととする。だが、これだけの事は最初から明かである。卽ちそれ自身としては不生產的であるが然し再生產上には必要の一節となつてゐる一機能が、分業の結果多數人の副業たる位置から、少數人の專業たり特殊營業たる位置に轉化される場合、この機能自體の性質は斯かる轉化のため變化を受けるものではないといふことがそれである。商人（彼れはこの場合、商品の轉形を行ふべき單なる代理人に過ぎず、單なる賣買人に過ぎないものと見るのである）は彼れの取引に依つて多くの生產者の爲に賣買時間を短縮せしめ得る。かかる場合

商人なるものは無用の力消費を節減せしめ又は生産期間の遊離を助くる一機械と見做すべきである（十一）。

（十一）『商業上の費用は、必要なものであるとはいへ、一つの負擔と見做すべきである。』（ケネー著『經濟表の分析』デール編、フキジオクラット、第一部、パリー、一八四六年刊、第七一頁）(a)。ケネーに依れば、商人同志の間の競爭が齎らす『利潤』（即ち競爭の結果商人が『報酬又は利得を節減』せざるを得なくなるといふ事實）は、……事實上、直接的の販賣者なり消費的購買者なりに對する損失の防止といふ事に外ならない。所で商業上の費用の損失を防止するといふ事は、單なる交換――運輸上の費用を伴ふものであると否とに拘はらず――の意味に解した商業に依つて嚴密なる生産物が生じ又は富が增殖されるといふ事ではない』（前掲、第一四五及一四六頁）。『臨時費用なるものが存在しないとすれば、商業上の費用は常に、生産物を販賣する人々、又は購買者から支拂はれた十分の價格を享受する所の人々に依つて負擔されるのである』（前掲、第一六三頁）。『所有者』及び『生産者』は『賃銀支拂者』であり、商人は『賃銀受領者』である。（ケネー著『經濟問題』デール編、フキジオクラット、第一部、パリー、一八四六年刊、第一六四頁）。

資本家としての商人、竝びに商人資本に關する考察は後段に讓る。玆では說明を單純にするため、この賣買擔任者が彼れ自身の勞働を販賣する人であると假定しよう。彼れはこの W—G 及 G—W なる取引に於いて、彼れの勞働力竝びに勞働時間を支出する。かくして、彼れは生活してゆくのである。これは他の勞働者が例へば紡績なり製藥なりに依つて生活するのと同樣である。彼れは必要なる機能を盡すのであるが、それは再生産行程そのものが不生産的の機能を含む結果である。彼れは他の勞働者と同樣に勞働する。然し彼れの勞働の內容は、價値及び生産物の何づれをも造り出すものではない。彼れ自身が空費の一部となるのである。彼れの效用は、不生産的機能を生産的機能に轉化せしめることに存するものではなく、また不生産的勞働を生産的勞働に轉化せしめることに存するものでもない。若しこの機能移動に依つて、かかる轉化が遂行され得るとすれば、それこそ一つの奇蹟であらう。

彼れの效用は寧ろ、社會における勞働力及び勞働時間の一小部分をばこの不生産的機能に拘束するといふ點に存するものである。單にそれのみではない。彼れは他の勞働者よりも高き賃銀を受けてゐるとはいへ、それでも矢張り單なる賃銀勞働者に過ぎないと假定しよう。如何なる賃銀を受けるにしろ、彼れは賃銀勞働者としては彼れの時間の一部を無料で勞働する譯である。彼れは恐らく一日に十時間勞働して、八時間分の價値生産物を受けるであらう。彼れの勞働する二時間分の餘剩勞働は、八時間分の必要勞働と同樣に何等の價値をも生産するものでない。尤もこの必要勞働に依つて社會的生産物の一部は彼れに移轉されるのである。第一に、社會的に觀察するならば、一つの勞働力が十時間に亙つて斯くの如き單なる流通機能のため消費されることは從前通りで變化する所はない。それは他の如何なる目的のためにも、隨つて生産的勞働のためにも、利用し得るものではないのである。第二に、この二時間の餘剩勞働はこれを行ふ個人に依つて支出されるとはいへ、社會は何等その代價を支拂ふものではない。これに依つて、社會は毫も過剩の生産物又は價値を占有するものとはならないのである。けれども彼れに依つて代表される流通費用は、五分の一の減少を來たすこととなる。即ち十時間から八時間に減少するのである。彼れに依つて擔任される此現實的な流通時間の五分の一については、社會は何等の等價をも支拂ふものでない。然し此流通擔任者を充用するものが資本家であるとすれば、右の二時間の代價を支拂はない結果、かかる資本家の流通費用――彼れの收入からの控除分を代表する所の――は減少することとなる。之れは資本家から見れば、積極的の一利得となるのである。なぜならば、彼れの資本の價値增殖に對する消極的の制限は狹ばめられることとなるからである。小規模の獨立した商品生産者が彼れ自身の時間の一部を賣買に支出する限り、この賣買に必要な時間は彼れの生産的機能の合間々々に支出される所の時間として表現されるか、又は彼れの生産時間の減損といふ形を採るに過ぎない。

いづれにしても、この目的に必要な時間は、轉化される所の價値を些かも增殖することなき流通費用である。それは價値を商品形態から貨幣形態に轉化せしめるに必要な費用となつてゐるのである。資本家的商品生產者が流通擔任者として現はれる限り、彼れはヨリ大なる規模を以つて賣買し、隨つてヨリ大なる範圍に於いて流通擔任者たる職分を盡すといふ事實に依つてのみ、直接的の商品生產者から區別される。彼れの營業の範圍が擴大されて、己れ自身の流通擔任者を賃銀勞働者として購買（雇傭）することが必要となり、又は可能となつた曉にも、この現象は本質に於いて變化を受けることはない。單なる形態轉化の意味に解した流通行程に於いて、或る程度の勞働力と勞働時間とが支出されることは免れない。けれども此事實は今や追加的の資本支出として現はれる。かくの如き、流通部面にのみ作用する所の勞働力を購買する爲に、可變資本の一部を支出せねばならなくなるからである。この資本前貸は生產物と價値との何づれをも造り出すものではなく、それだけの程度に於いて前貸資本の盡す生產的機能の範圍を縮小せしめることとなる。これは丁度、生產物の一部が、殘餘の部分を賣買する所の一機械に轉化されるのと同じである。この機械に依つて生產物の一部は控除される。この機械は流通の內部に支出さるべき勞働力其他の物を節減し得るといへ、他の機械の如く生產行程の內部に作用するものではない。それは流通費用の一部たるに過ぎないのである。

（2）簿記

現實的の賣買のほか、簿記のためにも勞働時間が支出される。加ふるに、對象化された勞働である所のペンや、インクや、机や、事務所の費用なども、簿記に屬するものとなる。卽ち此簿記の機能に於いては、一方に勞働力、他方に勞働要具が支出されるのであつて、これは賣買期間について行はれる關係と異なる所はない。

循環內部の統一としての資本、循環行程を通過しつつある價値としての資本は、生產部面の內部に於けると、流通部面の兩段階の內部に於けるとを問はず、ただ觀念的にのみ計算貨幣なる形態を以つて、先づ商品生產者（又は資本家的商品生產者）の腦裡に存在するものである。この運動は簿記（價格決定又は價格計算をも含む）に依つて確立され整理される。生產と特にまた價値增殖との運動——この運動に於いては、商品は單に價値負擔者として、計算貨幣に依り觀念的な價値存在を確立される物の名稱として作用するに過ぎぬ——は、かくして象徵的の觀念寫像を與へられる。個々の商品所有者が單に頭の中だけで簿記を行ふか（例へば農夫のなす如く、資本制農業が行はれるやうになつてから、初めて簿記を行ふ小作農業者が生じて來るのである）、又は生產期間の外部に於いて、支出、收入、支拂期日等につき、附隨的にのみ簿記を行ふといふ狀態を脫しない限り、彼れの簿記機能と其目的の爲に彼れが恐らく使用するであらう勞働要具（紙などの如き）とは、勞働時間及び勞働要具の追加的消費を代表するものとなることは明かである。この追加的の勞働時間及び勞働要具は必要のものではあるが、然し生產的に消費し得べき時間と、現實的の生產行程內に作用し生產物及び價値の形成に關與する所の勞働要具とからの控除分を代表するものである（十二）。かかる簿記機能が資本家的商品生產者の手に集中して、多數の小商品生產者の職分たる代りに單一なる資本家の職分として、大規模生產行程の內部における機能として現はれるやうになると、その範圍は擴大されることとなるのであるが、然し斯かる事實も、更らに右の簿記機能がそれを附隨する所の生產的機能から分離獨立して特殊の專任的代理人の職分になるといふ事實も、共に此機能の性質そのものを變化せしめるものではない。

（十二）中世紀における農業上の簿記は、ただ僧院の內部にのみ行はれたものである。しかしインドの太初的な共同體に於いても、既に農業上の簿記が行はれてゐたことは、本書第一卷に述べた所である。この簿記は獨立して、共同體內部の一吏員の專務となつたものである。かかる分業の結果、時間、勞力、出費等が節約されることとなる。然し此場合にも、生產と生產に關

する簿記とは、船荷と船荷證券とが別個の物であると同様に、別個の物たるを失はなかつた。共同體における勞働力の一部は簿記者の形で生産方面から引き上げられる。彼れの職分に伴ふ費用は、彼れ自身の勞働に依つて補償されるものではなく、共同體の生産物からの控除に依つて補償されるのである。資本家の下に働く簿記者について行はれる所も、必要なる變化を加へて考へれば、このインド共同體の簿記者に行はれる所と同一である。(第二稿より)。

一つの機能はそれ自體に於いて(隨つてそれが獨立化するに先だつて)生産物及び價値を生ずることなき限り、分業の結果それが獨立化するに至つた後にも此等のものを造り出すことはない。一資本家が新たに資本を放下する場合彼れは簿記者その他を雇入れ且つ簿記用品を準備するために、その資本の一部を投じなければならない。彼れの資本が既に其機能に從事し、不斷の再生産行程を遂げつつあるものとすれば、彼れは商品生産物の一部を貨幣に轉化せしむることに依つて、絶えずこれを簿記者、販賣人その他の者に轉化せしめなければならない。かかる資本分は生産行程から引き上げられ、流通費用の一部となるものであつて、總收益よりの控除を意味するものである。(以上の考察には、この機能に專用される勞働そのものも含まれてゐるのである)。

けれども一方における簿記に伴ふ費用(又は勞働時間の不生産的支出)と、他方における賣買時間の支出との間には、一定の區別が存在してゐる。賣買時間の支出なるものは、生産行程の一定の社會的形態に、換言すれば、生産行程が商品の生産行程であるといふ事實に基因するものである。生産行程が社會的の規模を採つて純個人的の性質を失ふに至れば至る程、生産行程の整理及び觀念的總括としての簿記はます〳〵必要となつて來る。隨つてそれは手工業的經營及び小農的經營のもとに行はれる分散的な生産に於けるよりも、資本制生産に於いてはヨリ一層必要となり、また資本制生産に於けるよりも、共同的生産に於いてはヨリ一層必要となるのである。然し簿記上の費用は生産が集中し簿記が社會的のものとなるに從つて、ます〳〵節減されるのである。

茲に問題となるものは、單なる形式上の轉形に基く流通費用の一般的性質のみであつて、斯かる流通費用の凡ゆる細目的形態に立ち入ることは、この場合必要でない。而も價値の純粋なる形態轉化の領域に屬し、隨つて生産行程の一定の社會的形態に基くところの諸形態——此等の形態は、個々の商品生産者から見れば消失的にして殆んど注意に上ることなき要素に過ぎず、その生産的機能と竝行又は錯綜するものである——が、如何に巨額の流通費用として人目を驚かすものとなり得るかは、單なる貨幣收支が銀行などの、又は個々の營業における會計方の、專屬機能として獨立化し大規模に集中されるといふ事實に依つて知られるところである。而も此流通費用は形態を變更することに依つて性質をも變更するものでないことは、固く念頭に置かねばならぬ事實である。

(3) 貨幣

生産物は商品として生産されると否とに拘らず、常に個人的又は生産的の消費を目的として生産される富の素材的形態であり、使用價値である。生産物が商品となつた場合には、その價値は價格として觀念的に存在してゐる。商品の價格は、現實的の使用形態を些かも變ぜしめるものではない。けれども金銀の如き一定の商品が貨幣として作用し貨幣として專ら流通行程の内部に在留するといふ事實(斯かる商品は更らに、退藏貨幣、準備金等の形態を以つても潛伏的ながら流通部面に存在するものであるが)は、商品を生産する生産行程の一定の社會的形態に基く純粋の産物である。資本制生産の基礎上に於いては、商品は生産物の普遍的形態となり、生産物の大部分は商品として生産されることとなる。隨つて大抵の生産物は貨幣形態を採らねばならなくなる。かくして商品の量は、社會的富の中の商品として作用する部分は、絶えず增大することとなる。これがため、流通要具や、支拂要具や、準備金などとして作

用する金銀の範圍も亦擴大されることとなる。かくの如き、貨幣として作用する商品は、個人的消費又は生產的消費の何づれにも歸するものではない。それは、單なる流通機能として役立つ形態に固定された社會的勞働である。社會的富の一部が斯かる不生產的な形態に拘束されるといふ事實の外に尙、貨幣が磨滅する結果、絕えず之れを回復し、生產物形態における新たなる社會的勞働を新たなる金銀に轉化せしめることが必要になるといふ事實もある。この回復費は、資本制度の發達した諸國に在つては顯著なる額に達する。なぜならば、これらの國における貨幣形態に拘束された富の部分は、總じて著しき程度に達してゐるからである。貨幣商品としての金銀は、之れを社會の立場から見れば、生產の社會的形態にのみ基因する所の流通費用を構成するものとなる。それは商品生產、特に又資本制生產の發達につれて增大する所の、商品生產一般に伴ふ空費であつて、流通行程の爲に犧牲とさるべき、社會的富の一部である（十三）。

（十三）『一國に流通する所の貨幣は、その國における資本の一定部分であつて、殘餘の資本部分の生產力を助長又は增進する爲、生產上の用途から絕對的に引き上げられたものである。故に金を流通要具として採用する爲に一定量の富を要するといふことは、他の何等かの生產を助長する目的を以つて、一つの機械を製造する場合におけると異ならないのである』（『エコノミスト』誌、第五卷、第五一九頁）。

（二）保管費用

單なる價値轉形から、觀念的に考察した流通から生ずる流通費用は、商品價値の形成要素となるものではない。斯かる流通費用として支出される資本部分は、資本家について言ふ限り、生產的に支出される資本からの、單なる控除分を意味するに過ぎない。然るに以下攻究せんとする流通費用は、これとは性質を異にするものである。この流通費用は、實をいふと流通部面に持續されるに過ぎざる（隨つて流通形態のため生產的性質を隱蔽されるに過ぎざる）生產行程から生じ得るものである。他方に、それは社會的の見地からすれば、生きた勞働なり對象化した勞働なりの單なる費用であり、不生產的支出であるに拘らず、同一の理由に依つて又、個々の資本家から見れば價値を形成するものとなり、商品の販賣價格に對する追加となり得るのである。この結論は、生產部面が異なるに從ひ、また此處彼處に就いて言へば、生產部面は同一であつても其內部における個別的資本が異なるに從つて、右の費用に差異が存するやうになるといふ事實のみに依つても生じて來るのである。斯かる費用は商品の價格に追加されるものであるから、個々の資本家の負擔に歸する程度に比例して配分されることとなる。然るに價値を追加する所の凡ゆる勞働は、また餘剩價値をも追加し得るものであり、且つ資本制度のもとに於いては常にこれを追加するものとなるであらう。蓋し勞働に依つて生ずる價値の大小は、勞働それ自身の大小に懸り、勞働に依つて生ずる餘剩價値の大小は、資本家が如何なる範圍まで勞働の代價を支拂ふかに懸るからである。されば使用價値を追加することなくして商品の價格を大ならしめる所の、隨つて社會から見れば生產上の空費に屬する所の費用と雖も、個々の資本家の立場から見れば致富の源泉となり得るのである。他方に又、玆に說く如き流通費用が商品の價格に追加されて均等に配分されるに過ぎない限り、斯かる追加は流通費用の不生產的性質を消滅せしめるものではない。一例を擧ぐれば、保險會社なるものは個々の資本家の損失をば資本家階級全體の上に配分せしめる。けれども此事實は、かくして平均化された損失が社會的總資本から見れば依然として損失たる事を妨ぐるものではない。

（1）一般的意味に於ける在庫品形成

生産物なるものは、商品資本として存在し市場に在留する間、換言すれば生産行程を出て消費行程に入る迄の間は在庫品となつてゐる。市場に在留する所の商品として、隨つて又在庫品なる形態を採つた商品としての商品資本は、各循環の内部に二重の位置を占める。即ち一方には、問題の循環を遂げつつある資本の商品生産物として現はれ、他方には反對に、購買して生産資本に轉化されるため市場に存在せねばならぬ他の一資本の商品生産物として現はれるのである。勿論、この後ちの商品資本については、註文を受けてから初めて生産されるといふ場合も可能である。斯かる場合には、それが生産されるまでの間、中絶が生ずることとなる。けれども生産行程及び再生産行程を流暢に進行せしめるためには、或る分量の商品（生産機關）が絶えず市場に存在すること、換言すれば在庫品を構成することが必要となる。同樣に生産資本は勞働力の購買を含むものであつて、この場合における貨幣形態は、勞働者が大部分を市場に見出さなければならない生活資料の價値形態に過ぎぬものである。この問題に關する立入つた說明は、本節の後段に讓り、玆では豫め右の點だけを明かにして置く次第である。

既に商品生産物に轉化されて、今や販賣され貨幣に轉化されねばならぬ循環資本價値、即ち商品資本として現在市場に作用しつつある循環資本價値の立場から見れば、それが在庫品を構成することは、これ取りも直さず己れ自身の目的に反對して、心ならずも市場に在留することに外ならない。販賣が迅速に行はれれば行はれる程、再生産行程はますく流暢に進行するのである。W'—G' なる轉形に拘束される事は、資本の循環中に行はれねばならぬ現實的の新陳代謝と、資本が更らに生産資本として盡すべき機能とを妨げる所以となる。他方に G—W なる轉形から見れば、商品が絶えず市場に存在する事、換言すれば在庫商品が形成されるといふ事實は、再生産行程の進行を流暢にし、且つ新たなる又は追加的の投資を可能ならしむべき條件として現はれるのである。

商品資本を在庫商品として市場に在留せしめる爲には、店舗、貯藏所、倉庫等の建物を要し、隨つて不變資本の支出を必要とする。また商品を入庫するためにも、勞働力の代價を支拂ふことが必要になつて來る。更らに商品は損傷を來たすものであつて、有害なる自然力の影響に曝らされてゐる。これを防ぐためには、一部的には勞働要具なる對象的形態、一部的にはまた勞働力なる形態を以つて、追加資本を放下しなければならない（十四）。

（十四）一八四一年、コアベットの計算した所に依れば、九ヶ月に亙る一季節間の小麥入庫費として、量の上の損失が半パーセント、小麥價格に對する利子が三パーセント、倉庫賃借料が二パーセント、篩分け竝びに運搬上の賃錢が一パーセント、積込賃が半パーセントであつて、合計七パーセントに上つた。即ち一クォーター當り五十志の小麥價格に對して、三志六片に上つたのである』（トマス・コアベット著『個人の富の原因及態樣研究』ロンドン、一八四一年刊）(4)。リヴァープール市の商人が鐵道委員に對して供述したところに依ると、一八六五年における穀物入庫に要する月々の純費用は、一クォーター當り二片、即ち一噸當り九乃至十片であつた（『勅命鐵道委員、一九六七年、證述』第一九頁、第三三一號）(5)。

即ち資本が商品資本隨つて又在庫商品なる形態を採つて存在する時、生産部面に屬しないが故に流通費用に算入される所の費用が生じて來るのであつて、斯かる流通費用は或る程度まで商品の價値に入り、かくして商品價格を昂騰せしめることとなる。この點に於いて、それは第一節に述べた流通費用から區別されるのである。如何なる場合にも、在庫商品の保存と保管とに役立つところの資本及び勞働力は直接的の生産行程から引き上げられたものとなるのである。他方に又、この目的に充用される資本（その組成分としての勞働力をも含む）は、社會的生産物に依つて補償されることを要する。即ち斯かる資本の支出は、勞働生産力の低減と同樣の作用をなすものであつて、一定の利用效果を得るためにヨリ多量の資本及び勞働を要することとなるのである。それは經費となるのである。

所で在庫商品の形成に基く流通費用は、豫め與へられてゐる價値を商品形態から貨幣形態に轉化せしむるに必要な時間にのみ基因し、換言すれば生産行程の一定の社會的形態（即ち生産物は商品として造られるものであるから、貨幣に轉化されることを要するといふ事實）にのみ基因する限り、曩に第一節に列擧した流通上の諸費用と全く性質を等しくするものである。他方に商品の價値がこの場合、保存又は增殖されるやうになるのは、使用價値が、生産物そのものが、資本支出を要する一定の對象的條件の下に置かれ、而して使用價値の上に追加勞働を作用せしむる所の操作を加へられる結果である。然るに商品價値の計算や、この行程についての簿記や、賣買上の取引などは、商品價値が依つて存在する所の使用價値の上に作用するものではなく、寧ろ商品價値の形態に關係するのみである。かくて玆に心ならずも形成される所の在庫品に伴ふ斯種の經費は、轉形の停滯と必要とにのみ基くものであるとはいへ、左の事實に依つて第一章に掲げた經費から區別されることとなる。即ち此場合における經費は、價値轉形を目的としてなされるものではなく、寧ろ生産物としての、使用價値としての商品の內に存在し、隨つて生産物の、商品そのものの保存に依つてのみ保存され得る所の價値の保存を目的としてなされるといふ事がそれである。使用價値はこの場合、增殖することなく、また價値を高められることもなく、寧ろ減少を來たすのである。然し斯かる減少は制限されるものであつて、使用價値は保存されることとなるのである。商品の內に存在する前貸價値も亦、この場合には增進するものでない。けれども新たなる勞働（對象化された勞働と、生きた勞働との兩者を含む）は追加されるのである。

更らに攻究すべきことは、斯種の經費が如何なる程度まで商品生産一般の特質、並びにその普遍的絕對的の形態たる資本制商品生産の特質に基くか、他方に又、それが如何なる程度まで凡ゆる社會的生産に共通する所のものであり、ただ資本制生産の內部に於いてのみ特殊の一姿容を、特殊の一現象形態を採るに至るかといふ問題である。

アダム・スミスは在庫品の形成が資本制生産獨特の現象であるといふ荒唐無稽な見解を立てた（十五）。反對に、ヨリ最近の經濟學者、例へばレーラーの如きは、資本制生産が發展するにつれて在庫品は減少すると主張してゐる。更らにシスモンヂに至つては、在庫品を以つて資本制生産の短所の一つだとしてゐる。

（十五）『諸國民の富』第二部、緒論。

在庫品なるものは實際のところ、三つの形態を以つて存在する。即ち生産資本なる形態と、個人的消費基金なる形態と、在庫商品又は商品資本なる形態とがそれである。在庫品の絕對量は以上三つ形態の總べてを通じて同時に增大し得るものであるが、その相對量は一つの形態に於いて增大するとき、他の形態に於いては減少することとなる。

生産が直接に生産者の自給自足を目的として行はれ、交換又は販賣を目的として營まれる部分が僅少の程度に止まり隨つて社會的生産物は毫も商品形態を採ることなく、又はその僅少部分のみが商品形態を採るといふ場合には、商品形態における在庫品（即ち在庫商品）は富の極小部分を占むるに過ぎないことは最初から明かな事實である。然るにこの場合、消費基金殊に嚴密の意味に於ける生活資料基金の量は相對的に大である。これは古代の農民經營を見れば解ることであつて、この經營の下に於いては、生産物の壓倒的大部分は所有者の手に存在してゐるゆゑに、在庫商品を形成することなく、直接的に生産機關又は生活資料の在庫品に轉化されることとなつて、在庫商品の形態を採るに至らない。アダム・スミスが、斯かる生産方法に立脚する社會には何等の在庫品も存在しないと言つた所以は、玆にある。彼れは在庫品の形態を在庫品それ自身と混同してゐる。彼れの信ずる所に依れば、從來の社會は共日暮し的の生活をしてゐたもので、翌日のことは偶然の力に任せるといふ有樣であつた（十六）といふのであるが、これはあどけない錯誤的解釋である。

（十六）生産物が商品に轉化され、在庫消費品が在庫商品に轉化されることに依つて、アダム・スミスの謂ふ如く在庫品が生ずるどころか、寧ろ反對に斯かる轉形は、自足生産から商品生産への推移に際して生産者の經濟に激烈なる恐慌を齎らすものである。一例を擧ぐれば、インドでは極めて最近に至るまで、『豐作の年には殆んど價なきものとなつた穀物を多量に貯藏する習慣』が保存されてゐた（ベンガル及オリッサ州の飢饉に關する下院報告、一八六七年、第一部、第二三〇頁、第七四號）。アメリカ南北戰爭に依り、棉花、黃麻などの需要が突然增進した結果、インドの各地にわたつて米作は著しく縮少され、米價は昂騰を來たし、生産者は舊來の貯藏米を販賣するに至つた。加ふるに、一八六四乃至六六年以降、オースタラリア、マダガスカール等に向けて先例なき米の輸出が行はれた。一八六六年の飢饉が、オリッサ一州のみでも優に一百萬人の生命を奪ひ去つた程に急性となつたのは、蓋しこれが爲である（上掲報告、第一七四頁、一七五頁、二一三頁、二一四頁。及び其第三部、ベンール州の飢饉に關する文書、第三二――三三頁。この報告は、飢饉の諸原因中特に舊來の貯藏米穀が排出された事實を强調してゐる）。以上第二稿より。

生産資本なる形態を採つた在庫品は、既に生産行程の內部に存在する生産機關、或は少なくとも生産者の手に保有されて既に生産行程の內部に潛伏する所の生産機關として存在するものである。勞働の生産力が增進し、從前の凡ゆる生産方法以上に勞働の社會的生産力を發達せしめる所の資本制生産方法が進むにつれて、勞働要具の形で永久に生産行程と合體され、大なり小なりの期間絕えず反復的に生産行程の內部に作用する所の生産機關（建物、機械など）は不斷に大となり、而してこの生産機關の增大は勞働の社會的生産力發達の前提條件ともなり結果ともなる事は曩に見た通りである。この形態における富が絕對的に增殖するのみではなく、また相對的にも增殖するといふ事實こそ（第一卷、第二三章、第二節參照）、先づ第一に資本制生産方法の特徵となつてゐる。然し不變資本の素材的存在形態たる生産機關は、單に斯種の勞働要具のみから成るものではなく、また種々なる加工段階における勞働材料、並びに諸種の助成材からも成るものである。生産の規模が擴大され、協業や、分業や、機械などに依り勞働生産力が增進するにつれて、日々の再生産行程に入るべき原料、助成材等の量も亦增大することとなる。此等の要素は豫め生産場所に準備されてあらねばならぬ。かくして生産資本なる形態を採つた此在庫品の範圍は、絕對的に擴大されることとなる。生産行程を流暢に進行せしめるには（斯かる在庫品が日々更新され得るか、又は一定の期間內にのみ更新され得るに過ぎないかといふ問題は暫く措き）、例へば日々又は每週消費される所よりも多量の原料などを絕えず生産場所に蓄積して置くことを要する。生産行程の連續を維持するには、生産行程の條件の存在が、日々の購買に於ける可能的な中絕に依つても、又は商品生産物が日々或は每週販賣されて、ただ不規則的にのみ其生産諸要素に再轉化され得るに過ぎないといふ事實に依つても左右されることなきを必要とする。けれども生産資本が潛伏的に存在する程度・換言すれば在庫品を形成する程度に著しき差異の生じ得ることは明かである。例へば紡績業者が三ケ月分の棉花なり石炭なりを準備して置かねばならないか、又は一ケ月分の棉花なり石炭なりを準備して置かねばならないかに從つて、非常なる差異が生じて來る。斯かる在庫品は絕對的には增大しても、相對的には減少し得ることは我々の知る所である。

この事實は種々異なつた條件に倚存するものである。而して此等の條件は本質の上から言へば、結局みなヨリ迅速に、規則正しく、且つ安全に、必要とするだけの原料の中絕を來たすことがないやうに間斷なく供給するといふ事實に歸するのである。斯かる條件が備はること少なければ少なき程、換言すれば供給の安全と規整と迅速とが小なれば小なる程、生産資本の潛伏的部分たる、生産者の手に在つて更らに加工を期待しつつある原料其他の物の在庫品は益々大とならなければならない。斯種の條件は、資本制生産（隨つて又社會的勞働の生産力）の發達程度に逆比例するものである。隨つてこの形態における在庫品も、同樣に逆比例することとなるのである。

だが此場合、在庫品の減少として現はれる（例へばレーラーの見解に於いて）ものは、その一部について言へば、商品資本又は嚴密の意義における在庫商品としての在庫品の減少に外ならないものであつて、同一なる在庫品の形態變化を意味するに過ぎないのである。一例として、日々國内に生産される石炭の量が大であり、隨つて石炭生産の規模と能率とが大であるとすれば、紡績業者は其生産の持續を確保するため多量の石炭を入庫して置く必要はない。それは石炭の供給が絶えず確實に更新されることに依つて、不要とされるのである。

第二に、甲なる生産行程の生産物を生産機關として乙なる生産行程に移轉せしめ得る速度は、運輸交通機關の發達程度に依つて左右される。運賃の低廉は、これについて大なる役割を演ずるものである。例へば炭坑から紡績所への石炭の輸送を絶えず更新するに伴ふ費用は、運賃がヨリ低廉なるときは長期間分の多量な石炭を入庫して置く場合に比しヨリ大となるであらう。以上二つの事情は、生産行程それ自身から生ずるものである。

第三に、信用制度の發達といふ事が影響する。紡績業者が棉花、石炭などの在庫品を更新するについて、その製造綿絲の直接的販賣に倚存すること少なければ少なき程（而して信用制度の發達が著しくなるに從つて、この直接的倚存はます〳〵小となるのである）、綿絲販賣上の偶然から獨立した、與へられたる規模の連續的な綿絲生産を確保するに必要な在庫品の相對量はます〳〵小となり得るのである。

第四に又、原料、半製品などの中には、その生産に長期の時間を要するものが少なからずある。而してこれは特に農業に依つて供給される一切の原料について言ひ得る事である。隨つて生産行程の上に中絶を生ぜしめまいとすれば新たなる生産物が舊來の生産物に取つて代はることの出來ない全期間に亙つて、一定量の斯かる原料を準備して置くことが必要になつて來る。若し産業資本家の手に在る此在庫品が減少したとすれば、それは畢竟するところ在庫商品の形で商人の手に在る在庫品が增大した所以となるに過ぎない。例へば運輸機關が發達した結果、リヴァープール港の輸入倉庫に保存されてゐる棉花は迅速にマンチェスター市に移送され得るやうになり、かくしてマンチェスター市の製造業者は、必要に應じて比較的少量づつ在庫棉花を更新し得ることとなる。けれどもこの場合、在庫商品としてリヴァープールにおける商人の手に存在する同一棉花の量は、それだけます〳〵大となるのである。要するに、問題は在庫品の形態變化といふ事に過ぎないのであつて、この點をレーラー其他の學者は見落してゐるのである。而して社會的資本の立場から見れば、この場合在庫品として存在する生産物の量は變化する所がない。一國における例へば一年分の必要在庫品の量は、運輸機關の發達につれて減少する。多數の汽船や帆船が英米間を往復するとすれば、イギリスにとつて在庫棉花を更新する機會は增進し、かくしてイギリスの國内に準備されねばならぬ在庫棉花の平均量は減少することとなる。世界市場が發展して、同種物品の供給源泉が增大する場合も、同樣の結果を來たすのである。同一種類の物品が、相異なつた國から相異なつた時期に若干量づつ供給されることとなるからである。

（2）嚴密な意味の在庫商品

資本制生産の基礎上に於いては、商品は生産物の一般的形態となるものであり、而して資本制生産が廣さに於いても深さに於いても發達すればする程、この現象がます〳〵著しくなることは既に見た所である。かくて生産の範圍は假りに同一であるとしても、資本制生産方法のもとに商品として存在する生産物部分は、資本制以前の生産方法なり又は發達の微弱なる資本制生産方法なりの場合に比べて遙かに大となるのである。而して一切の商品、隨つて又一切の商品資本（これも商品に外ならないが、資本價値の存在形態としての商品であるといふ點が異なつてゐる）は、その生産部面から直接に生産的消費なり個人的消費なりに歸することなく、中途で市場に滯留する限り、在庫商品の一